
バカとオタクと召喚獣

則長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとオタクと召喚獣

【Nコード】

N8459K

【作者名】

則長

【あらすじ】

バカがいた・・・そしてオタクがいた。

歴史とアニメオタクというちょっとおかしなオタクが恋に友情と青春を謳歌する。

キャラ紹介（前書き）

駄文で自己満足な小説ですが読んでくれたらうれしいです

キャラ紹介

キャラ設定

主人公

山崎 慶太

A型 175cm 61キロ

オタク

アニオタと歴史オタクである。

アニオタはバトルものだけが。オタクなだけあって日本史、世界史は学年トップ。他は文系はいいが理数系がひどい。

しかし歴史と文系でカバーしておりAクラス並みの点数である。

というか興味を持ったものには何でも熱中しかなりはまればオタクの域に達してしまう。

木下姉弟とは幼馴染で優子とは中学2年のときから付き合っている。

秀吉とも親友で男と認める数少ない人物。

優子とは親公認でよく慶太の家でとまっている。

両親は仕事で世界を駆け回っているので家事全般をこなすことができ料理もうまく木下姉弟によく食べさせる。

武士に憧れ剣道を幼少からやっており腕はかなりのもの。

いつも伸ばすと木刀になる棒を持っている。

召喚獣は右手にランス、左手丸い盾を持つ騎士のような格好。

腕輪の力で一回だけ広範囲攻撃をできる。

第一問（前書き）

小説読んでバカテスにはまりました。
未熟ですがどうぞよろしく願います

第一問

第一問

問 以下の問いに答えなさい。

『調理のために火をかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、

調理を始めると問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合

金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

山崎慶太の答え

『問題点・・・ガンダリウム合金（↑だが現時点では採れないであろう）』

教師のコメント

早く書きたくて書く欄を間違えたようですね。
あと現在あるものを書いてくださいね。

????????????????????
????????????????

ピピピピピー

部屋中に響く目覚まし時計の音とカーテンの隙間からこぼれる春の朝日によって目を覚ましたのは俺、山崎慶太だ。

「はあく眠い・・・」

昨日も深夜までいろいろとしてた俺はまだ重いまぶたをこすりながら隣で寝ている愛する恋人の木下優子を起こさないようにベッドからおり着替えをしてからキッチンで朝食と昼の弁当を作り始めた。ここで親がいなかったのかと疑問を持つ人もいるだろう。

いや、決して事故とかで死んで天涯孤独の身・・・なんて漫画みたいなことはないぞ。

俺の親・・・というか両親はなんだか忙しい仕事をしており年中海外を飛び回っている。

だから家事全般は一人でこなせるし料理はかなりできると思う。

親がいなくてさびしくないかって？

まあ確かに小さいころはそう思うこともたまにあったが俺には一緒にいてくれる人がいたからそこまでじゃなかった。

そう・・・「慶太、おはようなのじゃ」

合鍵を使い爺言葉で家族同然な感じで部屋に入ってきたのは俺の幼馴染で親友かつ恋人の優子の双子の弟である木下秀吉だ。

「おはよう秀吉。今、朝ごはんと弁当作ってるところだから優子起こしてきてくれる？」

「ああ、わかったぞ。それよりいつますまんな。姉上もいつも世話になっておるし二人分の食事や弁当までつくってもらってのう」

今、俺と優子の関係は親公認であるため優子とは半同棲生活をしており木下姉弟の食事と弁当を毎日作っている。

「いや、優子のことは俺が好きだからいいし秀吉、俺たちは親友だろ？だからそんなこと気にすんな。」

秀吉は俺の言葉に笑顔で『いつもありがと』と礼を言ってから優子を起こしにいった。

この笑顔でそんなことを言われた普通の『男』なら誰だって落ちるだろう。

それから秀吉が優子と戻ってきた後朝食を食べ学校に向かった。

俺たちが通うすしかわったこの文月学園に入学して2度目の春。桜のさく坂道を3人で歩いていた。

「ふあゝ眠い」

優子があくびをする。そんな姿もかわいいぞ。

まあ確かに俺も眠い。昨日は二人で結構遅くまで起きてたからな。いや、勘違いするな。そんな不純行為などしてないからな！

「二人はよいの」

「ん？何がだ、秀吉？」

「今日はクラス発表の日じゃ。どうせ二人はAクラスでラブラブな一年を。ワシはFクラスじゃ」

秀吉がいったAクラスやFクラス。

この文月学園は学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした学園である。

科学とオカルトと偶然によって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し単純に学力でクラスを決め、試験の点数で強さが決まる召喚獣を使い他のクラスと戦争をし勝ったクラスは負けたクラスと教室の設備を交換できるというものである。

「あんたが演劇の練習ばかりしてるからでしょ。まあ私は慶太と最高の設備のAクラスで最高のラブラブ生活を送るけどね、ねえ、慶太？」

「お、おう」

なんだか俺は重大なことを忘れてる気がする・・・

「「おはようございます、西村先生」」

「おはよう、木下姉弟に山崎。」

玄関の前でたつて生徒たちに挨拶をしているのは浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男。

生活指導の鬼と言われている西村教諭だ。

鉄人というあだ名を持つがまじめな俺は本人の前ではそんなこと言わない。

そのあと先生は俺たち3人に箱から取り出した封筒を差し出してきた。

その封筒にはそれぞれの名前が書いてあった。

「やっぱりFクラスじゃ」

「よし、Aクラス！」

二人とも予想通りのクラスだったみたいだ。

俺もあけようとしたとき西村先生がしゃべり始める。

「山崎、お前は好きなことにならどこまでも熱中するやつだ。今回も歴史はすごかっただろう」

「だろう？先生、今回はかなり自信あったんですけど」

そつだ今回日本史、世界史ともかなりできが良くて満点の自信さがある。他の教科だつて文系科目は結構良かったと思うし理数系科目はいつもどおりだがAクラス並みの点数はとれたと思う。

『山崎慶太………Fクラス』

「最後の歴史が楽しみで興奮していたんだろう。すべてのテストに名前が書いてなかったぞ。」

「バカっ、慶太のバカッーーーー」

優子から平手打ちを食らい優子はそのまま走っていった。

それとかわって秀吉は俺と同じクラスになって喜んでいるようだ。

「まったくお前というやつは・・・名前を書いていれば日本史、世界史は満点で総合得点もAクラスでもトップ5人には入っていたぞ。」

第一問（後書き）

作者、優子が大好きです

第二問（前書き）

誤字脱字あるかも

それに進むの遅くなりそう・・・

第二問

国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあつた上にさらに悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解ですほかにも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も気から落ちる』、(2)なら『踏んだりけつたり』や『弱り目に祟り目』などがありますね』

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シニールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

キミは鬼ですか。

山崎慶太の答え

『（１）秀吉も木から落ちる』

『（２）泣きつ面に蜂須賀 正勝』

教師のコメント

歴史が好きなのはわかりましたがもうちょっと真面目に書いてください。

優子に置いていかれた俺と秀吉は校舎に入りＦクラスに向かっていった。

その道の途中に他とは比べ物にならない大きさでひときわ目立つ教室があった。

「これがＡクラスじゃと・・・なんと贅沢な」

秀吉の言うとおり壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに個人用のノートパソコンに好みの温度に調整できるエアコン、冷蔵庫やリクライニングシートなどほかにもいろんな設備が設置されていた。

「お、優子だ。おーい」

（「あつ、慶太ノノ・・・いや、今はだめよ。わたしは怒ってるんだから。名前書き忘れるなんてもうっバカ！」）

優子は俺に気付いて一回こっちに顔を向けたがすぐにそっぽを向いてしまった。

「最悪だゝ優子完全に怒ってるよ・・・秀吉ゝどうにかしてくれよ」

「まあ慶太なら少しの時間と甘い言葉で姉上はイチコロじゃ」

「そんなうまくいくもんか？」

秀吉の言葉に疑問を持ったがあとで実行してみよう。

Fクラスについた俺たちは呆然とした。

Aクラスとまったく違うぼろい教室。

床には腐った畳の上にぼろい座布団と卓袱台しかない。

「最悪だろ、これ」

「最悪じゃな・・・」

がっかりする俺たちに昨年からの友人たちが話しかけてくる。

「おはよう、二人とも。あれ、秀吉はわかるがなんで慶太までいるんだ？」

最初にしゃべりかけてきたのは身長180センチ強はありそうだががみのように短い髪がつんつん立っていて一見不良のような格好をしているのは坂本雄二だ。

「いやあ、名前書き忘れちゃってさあ。」

「まったく、お前らしいぜ。」

雄二とは入学当初から結構うまが合い仲良くやっている。

「それより雄二はここの代表か？」

「おう、当たり前だ。」

雄二と話していると胸はないがきれいな顔立ちをしていてポニーテールにしている女の子が喋りかけてきた。

「木下、山崎今年もよろしくね」

「よろしく(じゃ)」

その女の子は島田美波。一年のときからのクラスメイトでドイツ育ちの帰国子女だ。

「他には誰がいるのか？」

「ああ、いるぞ。お前もよく知っている土屋康太・・・いやムッツリーニだ。」

土屋康太。寡黙な正確だがかなりのスケベであるがそれを隠そうとするひたむきな姿からムッツリーニと呼ばれるようになった男だ。

そのあとHRの時間になったが一向に先生が現れないので俺たちはまた談笑していた。

しかしそこに一人のバカが入ってきた。

「すみません、ちょっと送れちゃいましたっ」

「遅刻だぞ、バカ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

俺と雄二は遅れて教室に入ってきたバカに罵声を浴びせる。

「ちょ、ちょっと雄二に慶太ひどくない！？ってなんで慶太がここにいるの？」

「名前書き忘れたんだよ・・・」

すると遅れて先生もやってきた。

「HRをはじめますので席についてくれませんか」

俺たちが席に着くとまた口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担当の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は黒板に名前を書こうとしたがチョークがないのでやめてしまった。

「どれだけ設備悪いんだよ。」

「皆さん全員に卓袱台と座布団は用意されてますか？不備があれば申し出てください」

「せんせー、俺の座布団の綿がほとんど入ってないですー」

クラスメイトの誰かが先生に不備を申し出たみたいだ。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されてますので、あとで自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

「ここつて廃屋？ 最悪だろ」

「では自己紹介でもはじめましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

先生に言われ廊下側の人、秀吉が自己紹介を始める。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

秀吉のあとに他の人も自己紹介をしていった。
おおっと、おれの番だ。

「山崎慶太だ。趣味は読書だ。歴史系とラノベしか読まないけどな。まあよろしく」

なんであいつがいるんだという声も聞こえたがめんどいので返事はしなかった。

俺の自己紹介が終わったあと、もそれは続き少し騒がしかった。明久のもおわり、少したったとき、ガリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ？」

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声がかかる。そりゃそうだ。普通はびっくりするだろう。

クラスが平然とするなか、数少ない平然としている人物の一人、担任の福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんをお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

小柄な体に島田とは間逆な体の（特に上半身の一部）女の子、姫路瑞希。

「はいっ！質問です。なんでここにいますか？」

とあるクラスメイトからの質問。誰もが思うものだ。

なぜかという、と彼女は入学して最初のテストで学年2位を記録し、その後、すばらしい成績を修めていた。

それなのにこんなFクラスにいるはずがない。

まさか俺みたいに名前の書き忘れ……

「慶太、姫路が名前の書き忘れなんてするとは思えんぞ」

「おい秀吉、なんで俺の思ってることがわかったんだよ」

「わからんはずないじゃろ。何年親友をやってると思ってるんじゃない」

そんなことを話していると姫路が再度口を開き始めた。

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしましまして。」

その言葉を聴きクラスの人々は『ああ、なるほど』とうなずいた。試験途中での退席は0点扱いとなる。

だから彼女もこのFクラスなのだ。

姫路の言い分を聞いてクラスのやつらがそれぞれいいわけを言い始めたがうざいのでスルーしよう。

少し教室がうるさくなってきたので先生が教卓をパンパンと、たたいて警告を発した。

しかし・・・・・・・・バキィツ バラバラバラ・・・・・・・・

突如先生の前で教卓がゴミ屑と化す。

だからどれだけ最低なんだよ！！

「え・・・・・・・・替えを用意してきます。少し待っていてください。」

そう告げ先生は教室を出て行った。

その少しあとに明久が雄二を伴って教室を出て行った。

秀吉と話しながら待ち時間をつぶしていたら雄二と明久が戻ってきた。その後すぐ先生も戻ってきた。

自己紹介が再開された。

そして最後、このクラスの代表である雄二の番だ。

「Fクラスの代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本で、好きなように呼んでくれ。……さて皆に一つ聞きたい」

雄二がゆっくりと全員の目を見るように告げる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが
不満はないか？」

『大ありじゃあっ！！』

二年F組生徒全員そろっての魂の叫びだ！

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

それから堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこでこれは代表としての提案なのだが」

自信満々な顔で俺たちを見つめながら……

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

面白いじゃん、雄二。

よし、いっちょやってやるか・・・・・・・・っとその前に優子の機嫌をなおさないかね」

第二問（後書き）

やっと次から試召戦争です。

第三問

英語

問 以下の問に答えなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師の答え

正解です。きちんと勉強していますね。

山崎慶太の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

今回は真面目に書きましたね。

さすがは文系得意なだけがありますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師の答え

訳せたのはThisだけでしか・

吉井明久の答え

『
●
「
♪
×
』

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

AクラスとFクラスの試験召喚戦争。
どちらが勝つかと聞いたら全員がAクラスだと言っだろう。
点数のさは歴然。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。
あたりまえだ

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

雄二は自信満々にそう宣言する。

まあ確かに難しそうだが面白そうだしやりたいなあ
優子とも一回戦ってみたいしな。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素がそろっている。それを今から説明してやる。おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

またやってたのかよお

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取るムッツリーニ、
土屋康太

「こいつがかの有名なムッツリーニだ」

その言葉を聞いたクラスメイトたちがざわめく

康太はほとんどの教科は明久と同じまたはそれ以下の学力であるが
保険・体育はAクラス・・・いや教師よりも勝るほどのだ。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力によく
知っているはずだ。」

「えっ？私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

試合戦争をやるとしたらこんなに頼りなる味方はいないだろうな。
雄二の幼馴染である天才霧島翔子に次ぐ学年2位の实力を持つて
るだろうからな。

「木下秀吉だっている。」

「そして山崎慶太だっている」

お、俺か。まあ紹介されて当然かこのクラスじゃあ2番目の点数を
取る自身はあるからな。

『おお、歴史だけでもかなりの点数を取ってるってやつか・・・』

『Aクラスでもかなり上の方にいける実力もあるそうだな』

『姫路さんとに続いて期待できるな』

「ああ、そういえばAクラスの木下優子と付き合ってるんだっけ、秀吉？」

おい、お前は知ってるはずだろう！？

「ああ、そうじゃぞ。しかも今は半同棲生活をしておるぞ」

秀吉いー。なぜそんなに詳しく言うんだ！？

「なああにいいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

『会長、異端者です。今すぐ裁きを！！』

そういつてクラス中の男どもが俺を囲んだ。

よりによって今、その話題で俺に喧嘩売るきか……

『今回我らFFF弾は審問会はやらず即、刑を言い渡す。山崎慶太、死刑。我らの手によつてその首をとつてやる!』』

本物のさつきをまといながら喋っているのは須川だな。よしやってやる。

「かかれー！！」

FFF団の連中はどこから出したのかわからない鎌を構え襲ってくる。

俺は腰にマウントされている棒を手に取りそれを伸ばして木刀にしてそれを構える。

「すまんなー慶太ー。めんどーなことになつてー」

「おい、謝るきないだろ、雄二。まあいいよ、これぐらいちょうどいい運動だ」

最初の来た鎌を勢いよく木刀で弾き飛ばしそのまま足で蹴り飛ばす。そのあとも軽く全員を叩きのめしておいた。つてなんで先生注意しないんだよッ！

そのあと明久がバカであることを再認識させられた。

かろうじて意識のあったFFF団の皆さんに試召戦争やる気あるかと聞いたらとりあえずそれは大丈夫だったので次は宣戦布告だろう。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいていひどい目にあうよね？」

うん。明久の言うことはごもつともだ。だからこそお前が適任なんだよ。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っただけだ。」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

わずかな俊巡すもなく力強く断言する雄二……ナイスだ！

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

「騙されたあつ！」

案の定、明久は暴行を受けてきた。

「やはりそう来たか・・・まあいい」

「いや、よくないってえッ」

「そう気にするな、明久。さあ作戦会議するぞ。屋上にも行くつ。」

く屋上へ

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

適当に座り雄二が話を始めた。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「それじゃあ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食べるよ？」

そっぴや明久貧乏なんだつたな・・・自分のせいだけだ。

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

自業自得なんだ。しょうがない

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように明久に聞いた。
まあ確かに普通はそう思うだろう。

「いや。一応食べてるよ………水と塩と砂糖」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……
・だから……あの……良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

姫路、いいやつだなあ。バカに弁当作ってきてくれるなんて。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のもの食べるのなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼でよければ。あ、皆さんの分も作ってきますね」

「おお、それはありがてえ。さんきゅうな姫路」

みんな姫路にお礼を言う。

ああ、俺は……

「姫路、ありがたいんだけど俺は遠慮しとくよ。昼は優子と一緒に

食べるから。」

「そうなんですか・・・じゃあ一緒に食べませんか？みんなで」

それはいい考えだが優子が反対するに決まってるな・・・

「ああ、ゴメン。今日ちょっと優子を怒らせちゃまってしばらくの間手を焼きそうで皆に迷惑かかりそうだからやっぱり遠慮しとくよ」

「わかりました。ではまた次の機会に」

「それにしても良かったじゃなか、明久。とりあえず今日は秀吉にでも分けてもらえ。いいだろ秀吉？今日は作りすぎてかなりの量入ってるからさ。」

今日は間違えて五人分は作ってしまったから秀吉のところには3人分は入っている。

「ああ、いいぞ。」

「やったー秀吉の弁当だーって慶太が作ってるの？」

何をいまさら

「知らなかったのか？昔からだ。俺は今、優子と秀吉の朝昼晩の食事を全部作ってるぞ」

「なっ！！あのかわいい女の子と家族同様の生活を・・・うらやましすぎる。慶太には木下優子までいるのに秀吉にまで手を出していないだろうな」

「そんなわけないだろう。俺は優子一筋だし秀吉は親友だぞ！」

「わしは男じゃー。それに慶太も女の子を否定してくれなのじゃ・・・」

「さて、話がかなりそれだな。試召戦争に戻ろう」

「そうだな・・・雄二、まず最初にEクラスを狙わないのは戦うまでもないからだろ？」

まあ妥当だろう

「え、なんで？僕たちよりクラスが上つてことはテストの点数が良かったってことじゃない？」

「明久、少し考えても見る。ここにはAクラスレベルが2人もいるんだぞ。まず負けるわけがない。」

雄二の言葉に俺も付け足す。

「俺と姫路がいればDクラスも普通に倒せるんだが今は0点だ。だから回復試験を受けないとならないからな」

「すごいわね。なんかAクラスにも勝てる気がしてきわ」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

まじで面白くなってきたなあ。

「よし、じゃあ作戦を説明するぞ」

第三問（後書き）

結局書けなかった・・・
部活忙しいよ

第四問（前書き）

誤字脱字あるかもしれません
あつたら報告してください。
すぐ直します
すいません

第四問

問 以下の問に答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。』

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのはつぎのどれか、1から4の中から選びなさい。

$$\begin{array}{llll} 1, & \sin A + \cos B & 2, & \sin A - \cos B \\ \sin A \cos B & 4, & \sin A \cos B + \cos A \sin B & 3, \end{array}$$

姫路瑞希の答え

『(1) $X = \pi/6$

(2) 4

』

教師のコメントそうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X =$ およそ3

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもありますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久

『(2) およそ3』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒はキミが初めてです。

山崎慶太の答え

『はつきり言つてわかりません。僕は数学が苦手なんです。だから答えるのはやめました。代わりに日本史でもどうですか？』

教師の答え

先生は初めて数学のテストのなかでしかも文章で質問されました。あとで日本史はありますがその前に職員室に来てください。

とうとうDクラスとの戦争が始まった。

しかし、今俺がいるのは教室だ。

なぜかというところの戦争はテストの点数で召喚獣の強さが決まってくる。

けど前回のテストといえばクラスの振り分け試験だ。

言うまでもなく俺は0点だ・・・くそおツ、名前さえ書いていれば優子と一緒にクラスだったのに！

話を戻して・・・0点なわけなので点数を稼がなければいけない。そのために俺は回復テストを受けている。

もちろん姫路もだ。

俺のほうは歴史を中心に文系科目を受けている。

とにかく点数を稼がねば！！

（10分後）

「よし、Dクラスならこんなもんでいいだろう。姫路、先行くぞ」

「は、はい。頑張ってください。」

ある程度の点数を稼いだ俺は同じ教室でまだテストを受けていた姫路を置いて戦場へと走る。

教室をでるとそこで秀吉と少し数が減っているが秀吉が率いていた前線部隊と出会う。

「秀吉、どうしたんだ、こんなところで？」

「回復テストは終わったのか。わたちも点数を結構消耗してしまつてのう。あつちは明久たちに任せて1、2教科受けにきたんじゃ。」

「そうか、じゃあ俺は明久たちの援護に行く。」

あいつらだけじゃ心配すぎるからな……

俺がついたとき、Fクラスは少々劣勢になっていた。

「明久、大丈夫か？」

「慶太！？助かったよ。Dクラスの連中、化学の布施先生や五十嵐先生を連れてきたんだ。でも慶太ならここから逆転できるよね？」

化学か……

「悪いな、明久。俺は理数系は苦手だ。Fクラス並みにな。しかもだ！俺は世界史しか受けてきていないんだな」

「ちよつ、嘘でしょ」

『吉井隊長！横溝がやらえ！た！こえ！で布施先生側は残り二人だ！』

『五十嵐先生側の通路だが、現在折れ一人しかいない！援軍を頼む！』

『藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！』

これは結構厳しいな・・・あれはまだかよ

「布施先生側の人たちは召喚獣を防御に専念させて！五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら効率よく勝負するように！藤堂君は可哀想だけどあきらめるんだ！」

『了解』

明久の指示が廊下に響く。

まだ隊長として見られてたんだなあ。よかったな

『大変だ！斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！』

『せ、世界史の田中だと！？』

『Fクラスのやつら、まさか長期戦に持ち込む気か！』

やっと来たか・・・Dクラスの諸君、それは違うな。この戦争は着々とFクラスの勝利にちかづいてるのだよ。

「明久！Dクラスの連中を俺たちの前に集められるか！？」

「結構難しいよ。でもやってみる！」

さすがにこの状況なら難しいがやってみれば戦況は一気にこちらに傾いてくる

「こんな感じでいいの？早くしてくれないとこの状況じゃまとめてやられちゃうよ。」

「すぐいけるぜ！ちようど田中先生がついたところだ。先生、Dクラス10人に世界史で勝負します。」

「承認します」

「ちよつと、慶太。いくら世界史が得意でも10人は無理だよ！」

相手は10人。普通に考えれば勝てるはずがない。

「問題ない！サモンっ！！」

『Fクラス』	山崎慶太	V S	Dクラス×10
世界史	975点	V S	合計831点『

え！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「ま、まっつて慶太！いくら世界史だけ受けてきたからってその点数はありえないよ!!」

「いや、急いで書いてたら漢字ミスってな。一点減点だそうだ。あははは」

漢字ミスとかドンだけしよばいんだよ……帰ったら勉強しよ。

『化け物だ!』

『なんであんなのがFクラスにいるんだ!?!』

バケモノとは失礼な!

『おい、あれはあのオタクで有名な山崎慶太だぞ』

『くそッ、だからあんなに点数が高いのか!』

歴史でオタクというならまだ見逃してやろう。

「じゃあ、いつきに終わらせるぜ!」

俺は世界史でゲットした腕輪の力を発動する。

するとDクラスの召喚獣がいるところに炎があがりあいつらを火あぶりにしていた。

そして点数は0点に……

「0点になったものは補修だー!」

鉄人がやってきた。

0点になったものは補修室につれてかれみっちりしごかれるらしい。

『あんなの卑怯だろ』

『補修は嫌だ』

ふっ、ざまあみる

俺の世界史で獲得した腕輪の能力

それは全体攻撃だ。
まあ点数を引き換えにだけどね。

『くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！』

かろうじて残っていた相手部隊が下がっていく。

「深追いはするな。俺たちも明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ。」

これは雄二の指示。

まあ適切な指示だな。

深追いしすぎて敵の本隊と出会ったらすすがに厳しいからな。

教室に戻った後しばらく皆は化学のテストを受けていた。

俺も苦手な割にはがんばりました・・・34点です・・・

「よし、そろそろ決着を付けに行くか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合じゃろ。」

「・・・・・・・・（コクコク）」

「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄二の指示の元仲間たちがDクラスの連中を取り囲んで倒すという作戦だ。

下校中のドサクサにまぎれて敵を打つというこの状況ではてきせつなものだ。

『Dクラス塚本、討ち取つたり!』

先ほどから完成の声上がる。
しかし………

「援護に来たぞ!もう大丈夫だ!皆、落ち着いて取り囲まれないうに周囲を見て動け!」

Dクラスの本隊がついにきた。
しかも代表の平賀もいる。

これは危険もあるがチャンスでもある。
敵大将が来てくれたんだからそいつを倒せば俺達の勝ちだ!

「雄二、俺がいつきに大将倒してくるぜ!」

「待て!平賀の隣には現国の竹内がいる。お前は世界史しか受けてないだろう」

………そうだった。俺のバカヤロ………
………じゃああとはあいつに任せるか。

すると明久が平賀の元へ走っていった。

「Dクラス玉野美紀、サモン」

「な、近衛部隊!？」

明久の前に突如Dクラスの女子が現れる。

「ちくしょう!あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに」

「何を言ってるんだ!君じゃ隙をついたとしても僕に勝てるわけないじゃないか」

そろそろ来るかな・・・

「それは同感。たしかに僕には無理だろうね。だから・・・・・・・・・・姫路さんよろしくね」

「は?」

平賀は明久の言葉に驚いている。

というかバカを見るような目で明久を見る。

まあ普通はそうだろうな。

本当はAクラスにいるはずの姫路だ。

「あ、あの・・・」

そんな平賀の後ろから姫路が現れる。

「え?あ、姫路さん。どうしたの??Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

「いえ、そうじゃなくて・・・・Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしく願いします。」

「あ、こちらこそ」

「その・・・Dクラスの平賀君に現代国語で勝負を申し込みます。」

その言葉で二人が召喚獣を呼び出す。

よし、これで終わりつと。

『Fクラス	姫路瑞希	VS	Dクラス平賀源二
現代国語	339点	VS	129点

』

平賀はまだ驚いているようだ。

まあこれでおわり。

「う、ごめんなさい

姫路さんの召喚獣からの一撃によってDクラス代表の平賀源二は討死。

Fクラスの勝ちだ。

『うおーーーーー』

みんなから歓喜の声が上がる。

そのあと代表同士の話し合いが行われたようだった。

その内容とは教室交換はせずにDクラスの窓の外にあるBクラスのエアコンの室外機を壊すだけである。

これは次のBクラス戦を見据えての処置である。

まあとりあえず今日の戦いは終わったんだ。

優子と一緒に帰ろう。

「慶太ー帰ろー」

明久から声がかかる

「さきかえっていいよー。俺は優子と帰るからー」

「大声で言うなー！うらやましすぎるんだよ！！」

そういつてAクラスへ向かうが少し不安がある。

昼休憩に一応謝って許してもらったんだがまだ怒っててもう帰って
るかもしれない。

そしてAクラスの扉を開ける。

「失礼します。・・・優子ーいるか？」

教室を見渡す。

そこには生徒はほとんどおらず席は一つしか埋まってなかった。
そう、その席には・・・

「待っててくれたんだ。ありがとう。さあ帰るぞ」

その少女は窓のほうを向いていたが俺の声に気付きこちらを振り向く。

そして笑顔で頷いた。

「うん」

第四問（後書き）

質問等ありましたら言ってくださいね

第五問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すもの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

山崎慶太の答え

『ミノフスキー粒子（これはジオン公国在住のミノフスキー博士が・
・・・・・）』

教師のコメント

逆にあなたの知識には驚かされますね。

ちなみに先生もガンダムは好きです。

Dクラス戦があった日の翌日。

俺はいつもどおりの時間に目を覚ました。

そしていつもどおり優子と秀吉と登校し我が教室・・・といった
くないところに入る。

「おはよう明久、雄二、島田」

「「「おはよう」」」

「今日は珍しく遅いじゃねえか、慶太に秀吉。」

うん、結構遅刻ぎりぎりだったからね

「慶太が珍しく寝坊したのじゃ。まあ昨晚、姉上となにかしていた
のじゃろ。」

「チョッ、慶太ー何やってたのか白状しろ！！ってムツツリーニ、
大丈夫か！？」

明久、そう興奮するなよ。康太も鼻血出すぎだよ。

昨日の夜は優子とゲームしていただけなのに・・・

まあ軽くスルーしとこう。

今日は朝から試験だし。

4教科が終了し昼休憩になる。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄二もかなり食べるな

そこに島田も合流するようだ

「あ、あの。皆さん……えっと……お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

姫路が勇気を振り絞ってみんなの前に弁当を出す。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？よかったあ」

「あの、木下君と山崎君も一口でいいから食べてみてくれませんか？たくさん作りすぎちゃって」

「ああ、いいぞ。俺は優子呼んで来るから秀吉はこれもって皆と先に屋上にでも言って」

俺は秀吉に3人分の弁当をわたし、A組へと走る。

くAクラス」

「失礼しまーす。優子ーいるー？」

教室の扉を開ける。

いつ見てもすごいなあ。

すると一人の少女が話しかけてきた。

「山崎・・・久しぶり」

「おお、霧島久しぶりだな」

話しかけてきたのは学年トップの学力をもち容姿端麗と言われている霧島翔子だ。

霧島とは1年のときにちょっとしたことで知り合った。

「代表、彼氏ですか？私は工藤愛子。よろしくね」

「違う・・・」

「そうそう、霧島は・・・」

「慶太ーお待たせってあれ？代表も愛子も慶太と知り合いだっけ？」

「うん・・・一年のときに」

「私はいまだよ。それより名前で読んでるってことは優子の彼氏？」

「え、うん。そうだよ・・・」

恥ずかしがる優子もかわいいな。

「それでな、優子。昼なんだが明久たちに呼ばれてさ姫路の弁当の試食に行かなくちゃ行けないから屋上で皆で食おうぜ」

「うん、いいわよ。あ、そうだ代表と愛子も一緒にどう？」

いい考えだな。

にぎやかなのはいいし霧島は雄二にも会いたいだろうしな。

「ごめん・・・ちよつと先生に呼ばれてて」

「私も部活で集まんなきゃいけないからさ、ごめんね」

「そうなんだ。じゃあまたの機会にねえ」

霧島と工藤と別れたあと俺たちは屋上に向かった。

俺は屋上で優子とのラブラブな時間をすごしながらちよつと姫路の弁当を味見させてもらおうと思ってただけなんだ。
でもね・・・・・・・・・・

「お待たせー」

「おう、いまから食べるところじゃ」

俺と優子は皆が座っている近くのベンチに座り弁当を食べ始める。

「うーん。やっぱり慶太の料理はおいしいよ」

そういつて優子が擦り寄ってくる。
ああ、可愛いな。俺って幸せだ。

「ねえ、ちよつとあれむかつくんだけど」

「そう言つなよ。あいつらいつでもああなんだろ？」

「そうじゃ。慶太と姉上は家でも外でもあんなかんじじゃぞ」

「いいですね……うらやましいです」

「うん、私ももつと……」

よし、そろそろ味見してくるかな。

「あれ、まだ食べてないのか？」

「あ、はい。最初は吉井君に食べてもらおうと思つていたんですけど。山崎君、料理上手だから味見してくれませんか？」

「ああ、いいぞ」

とり合えず定番の……。まあアスパラ巻きでもいただこうか。
なんか嫌なが予感する。

なんだこれは……。長年料理してきたものの勘つていうやつか。
とりあえず口に入れる……。死んだ。

「ぐっ！（なんだこの味……。どんなことしたらこんな味になるんだ？だがここは吐けない。姫路は一生懸命作ってきたんだ。……」

たぶん。だからここはなんとしても食べる)」

「どうしたか？山崎君」

「あ、うん。おいしいよ」

「さすが姫路さんだね。じゃあ僕も・・・」

「・・・・・・・・・・（ヒョイ）」

明久が食べようとしたがすばやい動きで康太がエビフライを口に入れる。

・・・・・・・・・・さらばだ、ムッツリーニ

「・・・・・・・・・・（ガクガクガク・・・・・・・・・・バタ・・・・・・・・）」

姫路が慌てる。

やはり心配なんだろう。

「・・・・・・・・・・（ムクリ）」

お、起き上がった。

「・・・・・・・・・・（グッ）」

ナイスだ、康太。

「はあ、良かったです。」

（明久、姫路の弁当はおいしいぞ。だからいつきに流し込め！）

（いやっ、ムツツリーニが瀕死の状態なんだよ！僕に死ねって言うの？）

（せっかく姫路が作ってきてくれたのじゃ。遠慮せずにいつきに流し込ものじゃ）

（でも・・・）

「おう、待たせたな！へー、こりやうまそうじゃいか。どれどれ」

飲み物を買に行っていたらしい雄二が帰ってきてすぐに姫路の弁当を食べようとする。

「ちょっと待て、雄二」

「どうしたんだ、慶太？」

雄二の耳に口を近づけて話し始める・・・姫路に聞こえないように。

（雄二、俺たちは大体食べさせてもらった。あとは全部食べていいぞ・・・ああ、いつきに流し込め！）

「おお、わかった。じゃあ・・・・・・・・・・・・・・・・（バタ）」

「あ、あれ坂本君大丈夫ですか！？」

「あ、足が攣ってな・・・・・・・・」

さすが雄二だ。

姫路が傷つかないように嘘をつくなんて

「あつ、デザートもあるんでした……スプーンを教室に忘れてきてしまいました。とってきますね」

や、やばい!!

どうする……雄二はもう限界だ……

「ここはワシが行こう。」

「秀吉、だめだよ。女の子なのに体が持たないよ」

明久、秀吉はれっきとした男です。

「大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう。」

「それならいいんだけど」

「では、いただきます。むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴバあっ!」

秀吉……お前でも無理だったか……

第六問

問 以下の問に答えなさい。

『ペンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『~~~~~』

教師のコメント

パソコンの都合でこう書きます。
とりあえず正解です。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

キミは化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

山崎慶太の答え

『ごめんなさい。わかりません』

教師のコメント

いきなり謝られても……正直なのはいいですが。

今日はBクラスとの試召戦争・・・・・・・・のはずなんだが

「慶太、ほんとに大丈夫なの？」

「俺のことは心配するな。優子はちゃんと学校行ってこい」

そう、俺は昨晚から39.3の熱がでて寝込んでいるんだ。
今朝もまだ下がらず優子を送り出すことになる。

優子が秀吉と家を出て数十分後。
雄二に電話しておかなきゃな

携帯をとり雄二に電話をかける

「あ、雄二？ゴメンな〜今日いけなくて」

「おお、慶太か。まさか、お前がこんなところで休むなんて思わなかったぜ」

「ああ、俺もこんな熱が出るとは思わなくてよ。優子が心配しすぎて学校行かないなんていいだしたからビックリしたよ」

「ハハ、お前たちはほんとにバカップルだな」

「それは認めてやろう。それにしても今日は大丈夫なのか？」

「任せろ！お前がいなくてもBクラスになんか負けないさ。じゃあ早く治せよ。Aクラス戦には来てもらはないと困るからな」

「大丈夫。明日には治るよ。じゃあな」

電話を切る。

明日には治るよなあ〜治ってくれよ〜

早く治らないとさらに優子に心配をかけてしまう。

そのために……………寝るかっ！

・

・

・

・

・

よく寝たな〜

腹減ってきたから起きてしまったけどそろそろ優子たちも帰ってくるし試召戦争も終わっただろう。

雄二に電話をしてみるか。

「お、雄二、Bクラス戦どうだった？」

「慶太か、それは明日に持ち越した。ちょっといろいろあつてな。明日はお前も来ることだしちゃっちゃんと終わらせるぞ。」

「その件なんだけどな……………明日これないかもしれないんだ……………なんか熱が一向に下がる気配がないんだ」

「マジか……………まあ大丈夫だ。こっちは何とかするよ。お前は早く風邪治せよ」

「りょう〜かいー。じゃあな」

試召戦争は何かなるだろうと思ってるとう優子と秀吉が帰ってきた。

「慶太くただいまく大丈夫だった?!」

すごい勢いで部屋にはいってきて俺に飛びついてくる優子。俺のことこんなに心配してくれてるなんて超嬉しいぞ!

「大丈夫だよ。」

「本当かのう、慶太。どれ?」

秀吉が俺の額に手を合わせる。

やばいっ! ぜんぜん熱が下がってないこちがばれてしまう。

優子にはこれ以上心配かけたくないなあ。

よし、アイコンタクトだこれで秀吉に俺の思ってることを伝えれる。

(秀吉、熱が全然さがってないことは優子に言わないでくれ)

伝わったよな……秀吉とは0歳のときからの付き合いだ。優子もだけど。

俺たちの友情にできないことはない。

これは慶太からのアイコンタクか

ふむふむ、姉上に熱があることをばらしてもっと看病して欲しいというこかのう。

慶太も意外に甘えん坊じやのう。

「姉上、慶太はまだ高熱のままじゃ。大変じゃ」

え……

「ちよつと慶太、全然大丈夫じゃないじゃない。ちゃんと布団に入つてて」

なぜだっ！なぜ秀吉に通じないんだ！！

「とにかく慶太、お腹すいてるでしょ。今お粥作ってきてあげるから」

まあいつかな。優子のお粥が食べれることだし。

こうして優子が部屋から出て行きキッチンに向かった。

「雄二に聞いたじやろう、Bクラス戦は明日に持越しじゃ。じゃが慶太はまだ出られそうにはないじやろう」

「ああ、多分無理だな。まあ俺がいなくても大丈夫だろ。」

「うむ、なんとかなるじやろうな」

それから十数分後優子が帰ってきた。

「慶太、お待たせ。はいアーン」

優子がスプーンでおかゆをよそい俺の口に運んでくる。
うゝ最高だあゝゝ

「……どう……かな……慶太が作るのに比べればあんまりおいしくないと思うけど……」

上目遣いで顔を赤くしながら味を聞いてくる。

美味しくないわけじゃないか！優子の作ったものだぞ！しかもアーンだ！！

「すっごくおいしいよ、優子。ねえもう一回食べさせて」

「やったあー。はい、アーン」

うん、最高だ。

「ワシは邪魔になるからそろそろ帰るかのう」

「そうよ。邪魔だから早く帰って」

優子の言うことは正しいが今回は秀吉に一つ頼みたいことがある。

「秀吉、食べ終わるまで待っててくれないか。ちょっと用事があったな」

「それはかまわんがのう。姉上からの視線が怖いのじゃ」

「優子。こっち向いて食べさせて」

「うん」

こうして食べさせてもらうこと30分。

「でだ、秀吉に頼みたいことというのは……優子連れ帰ってくれ。」

「え、なんで慶太！？私、今日も泊まって看病するよ。」

「だめ、この部屋にいたら優子にうつしてしまうかもしれない」

「私なら大丈夫だよ」

「だめだ！秀吉、よろしくたのむよ」

「わかった。姉上いくのじゃ」

「・・・うん・・・」

ごめんな、優子。

早く治すから。

こうして次の日も同じようなかんじだった。

ひとついいことはFクラスがBクラスに勝利したということだ。

そして次の日・・・

「慶太、なおった？」

まだ朝早くに俺の家の玄の扉を開けて入ってきた優子。

その後ろには秀吉もいる。

「優子・・・それが熱がまた上がって40 を超えて・・・

はぁ、はぁ」

「うそ！？はやくベッドに行つて。こんなところにいたら」

優子が俺の元に駆けつけてくる。
俺は廊下で倒れそうになっている。

「おれ．．．もうだめだ．．．．．」

「ちょっと、けいた！！やだっ、そんなのいや．．．．．」

ヤバイ、本気で優子が泣きそうだ

「なーんてね。冗談だよ。もう完璧だよ。」

「え．．．ほんとに？」

「本当だよ」

「．．．．バカ．．．．慶太のバカー．．．．．本当に心配したんだから」

「ごめんね。朝ごはん作ってあるから食べよ」

「うんッ」

そしていつもどおり朝食を済まし三人で登校した。

そしてとうとう始まるんだ。

Aクラスとの対決が！！

第六問（後書き）

Bクラス戦がこういうことになったのは別に書くのが面倒だったからとかじゃないんですよ。

第七問（前書き）

やっと小説一巻終わりですね

第七問

問 次の（ ）に正しい年号記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

山崎慶太の答え

『1549年。前年、宣教監督となったイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが現在の鹿児島市祇園之洲に上陸し薩摩の領主である島津貴久に会い宣教の許しをもらった。ここから日本にキリスト教が広まっていくといわれる。宣教の許可をもらったザビエルは・
・・・・・』

教師のコメント

詳しすぎです。一応正解にしておきましょう。

「よし！Aクラスに乗り込むぞ！！」

雄二の提案でAクラスとは一騎打ちを行うことになった。前面对決だとさすがに戦力差がありすぎるので雄二いわく勝てるというので五対五の対戦を今からAクラスに宣戦布告に行くのだ。

「Aクラス」

「Fクラスだ！俺たちはお前たちに五対五の勝負を挑みに来た。」

雄二を筆頭に俺や明久、姫路に康太、秀吉に島田などFクラス首脳陣がそろっている

「やつぱり来たわね」

雄二の大声に優子を先頭に霧島と工藤が前に出てくる。

「勝負の内容ははこちらで選ばせてもらう。」

「へえ」だから五対五なんだあ。ちゃんとこっちも条件を呑むようにしてきたんだね。えらいじゃん」

いつもどおり親しげなかんじの工藤。

「わかった・・・それでいい・・・」

代表である霧島の言葉にだれも反対するものはいなかった。それもそうだろう。

いくらBクラスを倒したといえどもしよせんはFクラスだ・・・

と思ってるんだろう。
実際それだけの点数差はあるんだ。

「でも条件がある．．．負けたほうはなんでも一つ言うことを聞く」

「ああ、いいぜ翔子」

俺は今、霧島が勝つたらやろうとしていることがわかってしまった。だって、雄二と霧島の関係を知っているからな。もちろん霧島の．．．

そのとき優子が少し不安そうな顔をしていた。

「どうしたんだ、優子？」

「だって慶太は私と戦おうとするでしょ？そうしたら慶太は得意の歴史を選択する。歴史じゃ慶太には勝てるわけがないもん．．．」

「俺が優子と戦うかなんてまだ決まってないだろ。それにどうせこの学校には俺に歴史でかてるやつなんていないよ」

「うん．．．」

「よし、交渉成立だな。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね、皆にも報告しなきゃいけないしね」

交渉を終了し俺たちの教室に戻る。
そこで作戦会議が行われた。

「出場者はまず代表の俺と姫路と慶太とムッツリー二・・・康太だ。
この四人に反対はないな」

周りのみんなが雄二の問にうなづく。

完全な得意科目が俺と康太だし。雄二は代表だ。姫路もいうことないだろう。

「でだ、あと一人は明久にしようと思うんだが」

「ちよつと待つて。なんでアキなの？私のほうがいいでしょ！」

島田が雄二に文句を言う。

まあ確かに教科も選べる今回では明久よりは断然島田のほうが勝率は上がるだろうが・・・

「島田、少し考えてみる。確かにお前は数学はいいがさすがにAクラスには勝てないだろ？」

「うん・・・まあそうだけど」

「それなら明久に出させたほうがいいだろう。あいつは観察処分者だ。召喚獣のダメージがフィードバックして明久も痛みを感じるんだ。こんなに面白いことはないだろう。島田は前から明久に消火器などの罪をかぶせられたんだろ？ここで一つお仕置きをしてやらないとなあ」

「え、ちよつと慶太まった！そんな酷いよ。友達を見捨てるなんて

それにもつお仕置きは受けたと思うんだけど」

「山崎、ナイスアイデアね。じゃあアキで決まりね」

こうして時間は10時。

いよいよ始まるのだ。

「では、両名準備はよろしいですか？」

Aクラスの担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは一人目のかた、どうぞ」

「よし、明久行つて来い」

最初は負ける予定なんだ。

盛大に散つて来い

「はあ、しょうがないな。じゃあ僕の本気を出してやろう」

対戦相手は佐藤美穂だ。

明久が本気を出したところで勝てるわけがない。

「よろしく吉井君」

☐ Aクラス Fクラス
佐藤美穂 VS 吉井明久
物理 389点 62点
☐

「ぐふあ!!・・・」

最初からわかっていたことだ・・・

「では二人目、どうぞ」

「・・・・・・・・・・（スック）」

ムツツリーニが立ち上がった。

「じゃ、ボクがいこうかな」

Aクラス側は工藤だ。

これは予想できてたことだ。

康太の情報はあちらにもすでに漏れている。

だから保健体育が得意なもの同士の対決になったのだ。

「教科は何にしますか？」

「・・・・・・・・・・保健体育」

「土屋君だよな。保健体育がずいぶんと得意なようだけどボクもかなり得意なんだ・・・・・・・・君と違って、実技で、ね。」

「・・・・・・・・・・」

「そろそろ召喚してください」

「はい。サモンっと」

「・・・・・・・・・・サモン」

それぞれ二人の召喚獣が姿を現す。

康太は忍者のような姿をし、小太刀を二本持っている。
一方工藤は制服に巨大な斧を装備している。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

「・・・・・・・・・・加速」

康太の召喚獣に斧が振り下ろされる瞬間腕輪が輝き姿がブレた。

「・・・・・・・・・・加速、終了」

そのあとすぐに工藤の召喚獣が全身から血を噴出して倒れた。

446対572点。

康太の圧勝だ。

さすがムッツリーニだな。

「これで一対一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

次は姫路だ。

この勝負は誰が来ようと勝つ予定である。

「それなら僕が相手をしよう」

出てきたのは学年次席の久保利光だ。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします。」

「ちよつと待った！何を勝手に」

「かまいません」

クレームをつける明久に姫路が止める。

「それでは……」

それぞれの召喚獣が呼び出されるが勝負は一瞬だった。

『Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	V S	4409点	

』

『す、すい』

まわりから驚きの声上がる。

「ぐつ……！姫持さん、どうやってそんなに強くなったんだ……」

「……私、このクラスのみんながすきなんです。人のために一生懸命なみんなのいる、Fクラスが……。だからがんばれるんです」

いいこというな、姫路。明久を筆頭にFクラスの面々がともうれしそうな顔をしているぞ。

「これで1対2です。次の方どうぞ。」

4戦目。俺の出番だ。

「よし、行ってくる」

「軽く勝ってこいよ、慶太」

俺に向けての明久の声。

よほど俺の歴史を信頼しているんだろう。

「ごめんね……。代表。慶太には勝てないよ」

「……。しょうがない。とにかく精一杯がんばってきて」

「それでは教科は何にしますか？」

「教科は……。じゃあ……。数学にします。」

「え……。」

『え~~~~~!!!!!!』

周りから今日一番の驚きの声が上がった。
みんなは俺が日本史か世界史のどちらかを選択すると思っていただ
ろつ。

「ちよつと慶太ッ！なんで!？」

「いいじゃん別に。さあ、はじめるぞ優子。サモン」

「慶太・・・サモン」

『Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	山崎慶太
数学	376点		12点	』

「ちよつと慶太ッいくらなんでも酷すぎるよ。僕よりも低いよ!」

明久、俺は数学が一番の苦手教科なんだ。がんばったほうだよ。

そして勝負は終わった。

当然俺の負けだ。

俺がみんなの元に戻ると・・・罵声の嵐だ。

「慶太、なんで歴史で勝負しなかったんだよ。」

「別にいいだろ、明久。どうせ雄二が勝ってくれるんだ。」

「でも、万が一ってことも・・・」

「心配するな。雄二がここまで自信があるんだから。」

「……そうだね。雄二最後は任せたよ」

「おう、任せとけ。」

雄二が前に歩み出る。

あちらからも代表の霧島が出てきた。

「教科は？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

そのあと先生が試験を準備しに行き、しばらくして戻ってきた。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

二人が教室を出て戦場に向かった。

「皆さんはここでモニターを見ていてください」

壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される。

そしてテストが始まった。

二人ともすらすらと回答を当てはめていく。

() 年 大化の改新

「あ、でた」

これが雄二の狙い目。

霧島が絶対に間違える問題だ。

先ほど雄二からこのことを聞いていたFクラスの面々はこれで勝利を確信した。

『うおおおっ!』

教室中に歓喜の声が響いた

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子

97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二

53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

「三対二でAクラスの勝利です。」

「雄二ー！今すぐころしてやるー！歯を食い縛れ！」

「吉井君落ち着いてください。」

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも

考えられるのにこの点数だと・・・」

「いかにも俺の全力だ。」

「そうだろうと思ったよ、雄二」

「えっ！？慶太は雄二が負けるってわかってたの？」

「まあな。」

「じゃあ何でさっきあんなこと言ったの？」

「だって俺・・・Ｆクラスを勝たそうなんて最初からしてないから」

「え・・・どういうこと、慶太？」

そこに優子や霧島もやってくる。

「優子、俺はな、お前をこのＦクラスの教室に入れたくないんだ。だから俺はあそこで負けたんだ」

「慶太・・・ありがとうっ」

優子が俺に抱きついてくる。

俺も優子の細い体を抱きしめかえした。

「ねえ慶太、チューしてえ」

優子がでれでれモードに入った。

よし、優子の愛をすべて受け止める！
そして俺は優子と唇を合わせる。

『山崎を殺せー！！』

『やつはなんとしても仕留めるのだー！！』

周りがうるさいな。

せっかくの俺と優子のラブラブタイムを。

「や、山崎君。ここは学校ですよっ！！」

「みんなうるさいな。優子今からデート行こうぜ」

「うん、ヤッター」

俺は優子の手を握り教室を出ようと駆け出す。

「山崎、ちょっと待て！」

この野太い声は鉄人だ

「今日は大目に見てやるが明日からは補修だぞ」

「えーっと、理数系以外なら受けますよ。じゃあさよなら」

第八問（前書き）

今回はオリジナルの話です。

第八問

問 以下の問に答えなさい

『人が生きていくうえで必要となる五大栄養素をすべて書きなさい。』

姫路瑞希の答え

『1、脂質 2、炭水化物 3、タンパク質 4、ビタミン 5、ミネラル』

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

『1、砂糖 2、塩 3、水道水 4、雨水 5、湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

山崎慶太の答え

『1、優子 2、栄養素のいろいろ』

教師のコメント

先生としてはそのいろいろを書いて欲しかったです

Aクラス戦のあとの優子とのデート。

楽しかったが周りではいろいろと騒がしかったなあ。

まあそれはまたの機会になるだろう。

鉄人の補修は他の先生よりもきついが理数系以外なら一応Aクラス並みの学力を持っていて俺としては楽だったんだが理数系はほんとつまらなかった・・・

平日をそんな感じでした。こし日曜日。

今日は家で優子と秀吉とゆっくりしてたんだが昼ごはんを食べたと宅配がやってきた。

「宅配便デース。」

宅配便とはいつも勝手に入ってくるものだ。
入ってきたので対応するために体を起こそうとすると。

「慶太、ここはワシが行くぞ。姉上をどかすのは大変じゃろうかな」

そう、今、優子は俺の胡坐をしている足の上で寝ているのだ。

「ああ、ありがと、秀吉」

秀吉がはんこをもって玄関まで歩いていった。
しばらくするとA4サイズより少し大きめの封筒をもって秀吉が帰ってきた。

「慶太の父上からじゃぞ」

「親父からってことはいつものあれか！」

いつものあれを封筒から取り出す。
それはかなりの厚みを持った紙の束であった。

「ということはおじさんとおばさんは帰ってくのじゃな」

「たぶん、そうだろうな」

この紙の束は親父の仕事の書類だ。

これが来たときは俺の親父とお袋が仕事から帰ってくるってことだ。

「まあ、これは後で読ませてもらうとするか。秀吉、俺はもうちょっと寝るぞ」

「ああ、ワシも寝るぞ」

翌日、いつもどおり朝食を済ませ学校に着き一限目が終わったころだ。

俺は昨日届いた資料を読んでいた。
すると明久が話しかけてきた。

「慶太、何読んでるの？」

「おお、明久。見てみるか？」

「うん・・・ええっと・・・アメリカミシシッピ流域」地区での調査結果についてって何これ？」

「そのまんまだ。これは親父の仕事の調査結果だよ」

「へえ、慶太の親父さんは何の仕事をやってるんだ？」

「やっぱり歴史に関係のある仕事なの？」

そこに雄二と島田が話しに入ってきた。康太と姫路もいるみたいだ。ちなみに秀吉は演劇部の何かで呼ばれているみたいだ。

「親父の仕事は歴史学者だよ。で、これはその調査結果だ」

「すごいですね。だから、山崎君はそんなに歴史がすきなんですね。」

まあ確かに影響は受けてたな。

「あ、そうだ。ねえ慶太、今日の放課後、僕に歴史教えてくれない？」

「明久に？いきなりなんで？」

「明日、社会の模擬テストがあるでしょ。そのためだよ」

「別にいいけど、明久が勉強教えてだなんて珍しいな。」

このバカが勉強を自分からするなんて普段はめったにないことだ。

「僕だってやるときはやるんだよ。」

「そっか。じゃあ、みんなも一緒にやらないか？俺の家でいいからさ、勉強会。」

「お、いいんじゃないか。慶太の家も行ってみたいしな。」

「……………うん」

「ウチも行っているの？できればウチも歴史教わりたいし」

「ああ、いいぞ。姫路も来るか？」

「あ、はい。じゃあ行かせてもらいますね」

みんなで勉強会するのは楽しそうだな。

「あ、でも慶太。木下優子さんとかいいの？羨ましいけどラブラブな時間を邪魔しちゃって。」

「別にいいよ。みんながいてもイチャイチャするから。」

ということを決まった俺の家での勉強会。

秀吉と優子に事情を話すとすんなりOKしてくれて放課後みんなですのまま行くことになった。

「そろそろ優子たちが来るころだな」

「あれ、たちってFクラスのみんなは全員そろっているから一人だけじゃないの？」

「いや、優子以外にもう一人いるぞ」

「おい、慶太。まさかその一人って……………」

「そうだよ。雄二の……来たみたいだ」

「慶太ー、おまたせー」

「山崎……誘ってくれてありがとう」

優子と一緒に現れたのはAクラス代表の霧島翔子だ。

「まで！なんで翔子もよんだんだよ、慶太！！」

「人数が多いほうが楽しいし雄二の彼女なんだからいいじゃないか」

「彼女じゃねえよ。」

とりあえず9人で俺の家まで向かっている。

「みんな、俺は夕飯の買い物行ってくるから先行っててくれ。優子、手伝ってくれ」

「うん、わかった」

それから俺と優子が買い物から帰ってくるとリビングではみんながちゃんと勉強していた。

まあ、かなり頭のいい人が二人もいるからな。

「慶太の家って結構大きいね」

買ってきた物をしまつてみんなの元に戻ると明久が話しかけてきた。

「ん、そうか？まあ3人で暮らしてるとなると大きいかな。よし、じゃあやるか、明久、島田。」

「うん、お願いします。」

それから一時間が経った。

優子には事前にFクラスの皆とも仲良くしろよって行っておいたんだが心配は要らなかった。

男子はともかく姫路と島田とも結構仲良くなっているみたいだ。

二人は優子に勉強ではないことまで熱心に聞いているようだったが

「まあ範囲分はこんなところだ。他に聞きたいことはあるか？」

「大丈夫だよ。それにしても慶太の教え方はうまいね」

「そうよね。問題文が全部読めなくても解けそうだもんね」

明久も島田も満足してくれたようだ。

「よし、じゃあそろそろ夕飯でも作るかな。」

「あの、私手伝いますよ。」

俺が立ち上がったとき姫路が手伝ってくれるといった。

「大丈夫。今日は客なんだから座ってていいよ。それに皆には俺の本当の実力を教えてあげるからな」

「へえ、楽しみだなあ」

「優子……山崎ってそんなに料理上手なの？」

「慶太の料理はスツごくおいしいよ。もうプロ級よ」

「……山崎、作ってるところ見せてもらっていい？」

「おう、いいぜ」

ということと霧島を従えキッチンへと向かった。

俺のキッチンとでもいおうか。

このキッチンは料理にはまった俺が特注で作ってもらったものだ。大人数用のためにコンロだって大目にある。

「霧島、なんで見学なんだ」

「……今後のための参考」

「雄二に作ってあげるのか……よし、今日は中華料理がメインだ。霧島に最高の味を伝授してやろう！雄二は素直じゃないんだ。お前の気持ちを料理に込めればちゃんと伝わるはずだ」

「……山崎ありがとう」

ちなみにキッチンは特注にしたおかげで少しサイズが大きくなっておりリビングからは見えなくなっている。

「お待たせー今日は中華料理だ。」

「「「「「・・・す、すごい」「」「」

みんなの声がそろった。やっぱりすごいと言われると作った側もう
れしいもんだ

「じゃあ、まずエビチリいただきマース・・・う、うますぎる！
！確かにプロ並み、いや、それ以上かもしれない」

明久に続き皆も食べ始める。

「こりゃあ、たいしたもんだな」

「・・・おいしい」

「やっぱり慶太の料理は最高じゃの」

「うん、慶太だーいすき」

「思ってた以上においしいです・・・羨ましいです」

「うん・・・普通の中華料理店なんかよりよっぽどおいしいわ・・・
・・・ウチも作るところ見ておけばよかった」

うんうん、今日もなかなかいい出来だったな。

そのあとすべて食べつくし片づけをしたあとしばらくしまた勉強を
していたらすでに時計は9時を回っていた。

「じゃあ俺たちはそろそろ帰るかな。」

雄二が帰るといったので霧島も一緒に帰るようだ。

他の皆も帰り支度を始めていた。

「玄関まで送ってくよ」

皆が玄関から出ると家の前にタクシーが止まっているようだ。そこから出てきたのは・・・親父とお袋だった。

「もしかしてあれが慶太の両親？」

「そうだよ。」

「おお、これはにぎやかだな。」

「慶太のお友達？」

「お邪魔しました。山崎君のクラスメイトの姫路瑞希です。」

さすが姫路は礼儀正しいな。

続けて他の皆も自己紹介し、帰宅していった。のこっているのは俺と優子と秀吉と親だけだ。

「優子ちゃん、また可愛くなったわね」

「ありがとうございます、おばさん。」

「では、ワシもそろそろ帰るかのう」

「じゃあ、私も今日は帰るね。今日は久しぶりに親子がそろってるんだしね、慶太。」

「別に気を使わなくてもいいのに」

「いいじゃないか、慶太。今回は明日の夜には出発しなければなら
ないんだ。だから今夜に討論をするぞ」

「わかったよ。じゃあ優子、秀吉、おやすみ」

二人を見送ったあと家に入り親父との討論が始まる。

これは毎回恒例のことで親父の調査結果を元に俺の疑問に思ったこ
とや思ったことなどを話し合うのだ。

これはこれで楽しいのだがいつもはまだ時間があるため日中などに
行うが今夜は夜中。

いつもどおりやれば朝の5時ぐらいまではかかりそうだ。

はあゝねむ。

第八問（後書き）

なんか読み返してみると落ちとか面白いところがないですね・・・
いつもそうか

第九問（前書き）

いつもより長くなってしまいました

第九問

学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれませんね。

写真館とかも候補になりえると覚えておきます

吉井明久のコメント

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

山崎慶太の答え

『優子からの愛』

教師のコメント

どうしたんですか！？

二人の間に何かがあつたのですか！？

そろそろ新学期最初の行事、『清涼祭』の季節がやってきた。

他のクラスはすでに準備を始めているが俺たちのクラスはまだ決ま

っていない……はあ……そんなことより今は優子を喧嘩してしまったことが一番の問題だ。俺にも落ち度はあったと思うが優子にだって悪いところはあったはずだ。

今は会議中である

まず学園祭実行委員を決めるらしい。

「実行委員なら姫路さんが適任じゃないかな？」

「え？私ですか」

明久に指名されたのは姫路だ。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

「じゃあ、美波は？」

次に明久が提案したのは島田だ。

「え？ウチがやるの？うん……、ウチは召喚退会に瑞希と出るからちよつと困るかな」

「じゃあ、サポートとして副実行委員をつければいいんじゃないか？」

「ナイスアイデア、慶太。どう、美波？」

「ん……。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど。」

その言葉で皆が候補を挙げ始める。
すると秀吉が・・・

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

「あ、俺も明久がいいと思う」

「秀吉に慶太まで・・・僕もそういう面倒な仕事は遠慮したいんだけど。」

「そんなの誰だってそうだぜ」

「そうじゃ。それなら適任がやったほうがいかるう」

「むう・・・それはそうだけど・・・」

『賛成、賛成』

『クズなりにがんばれ』

もう明久でいいじゃないか。

「明久で決定だな」

「ちょっと、待ってくれる！？途中、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりしたやつがいたんですけど！」

しょうがないなあ

最終手段だ

「秀吉、ちよつといいか」

俺は秀吉の耳に近づき小さな声である事を指示した。
少しばかり困惑気味だったが秀吉は了承してくれた。

「あ、明久……」

俺の指示通り秀吉が明久に近寄り少し屈み、明久に対して上目遣いで……

「一生のお願いじゃ。なつてくれないじゃろうか？」

「ハイ！ハイ、僕やります！！」

作戦成功だ！

明久がバカでよかったぜ。

「決まったみたいね。じゃあ私が意見を聞くからアキは板書してね。」

「ん。了解」

後は任せよう

俺は当日の仕事だけをやるっ。

「それじゃ、ちゃっちゃときめるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば拳手してもらえる？」

島田が告げると数名が手を挙げた。
皆結構やる気あるんだな。

「はい、土屋」

「・・・・・・・・・・写真館」

大体、予想はついていたけどこれだと完全に康太が中心でやることになるな。」

「土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど、一応意見だから黒板に書いてもらえる、アキ？」

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶ーと言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

それはやめておいたほうがいいと思うんだが。

似合うだろう人はこのクラスに2人しかいないと思うんだが

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別にただの喫茶店で、ウェイトレスがウェディングを着ているんだ」

「斬新ではあるな」

「調達するのはどうするんだ？」

「それに男が嫌がるだろ？人生の墓場、とか言うぐらいだしな」

「ほら、アキ。今の意見を黒板に書いて」

「あ、うん」

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

「じゃあ、次は・・・須川」

「俺は中華喫茶を提案する。」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。」

「アキ、それじゃあ、須川の意見も黒板に書いておいてくれる？」

「あ、うん・・・」

明久は本当に須川の言っていたことがわかっているのか？

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

そのとき教室の扉が勢いよく開く

そこに現れたのは俺たちの担任鉄人だ。

おそらくクラスの出し物が決まったか見にきたんだろう。

鉄人が黒板に目を向ける。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

「まったく、お前たちは・・・少しはまじめにやったらどうだ。稼
ぎを出して少しは設備を向上させようとは思わないのか。」

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃない』

『「いい加減この設備にも我慢の限界だ』

いつきに活気付く教室。

俺もそのことに気付かなかったなあ

「み、皆さんっ！がんばりましょう！」

姫路はかなりのやる気だな。

やっぱり今回の召喚大会と関係があるのか？

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

教室内で意見が飛び交う。

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそ、リターンも大きいはずだ』

パンパン

「もう、まとまりそうにないから多数決にするわよ。それじゃ、写真館に賛成の人！・・・はい、次はウェディング喫茶！・・・最後、中華喫茶！」

まだ言い合ってるやつらもいるが島田は手を挙げた人の分を数えていく。

まあ、俺が一番までもそんな中華喫茶にしようかな

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ。」

と、須川が立ち上がる。

「・・・・・・・・・・（すくっ）」

それに続いて康太も立ち上がる。

「ムツツリー二、料理なんてできたの？」

「……………紳士の嗜み」

チャイナドレスが見たいがために中華料理店に通っているうちに見よう見まねでできるようになったんだろう。
すると雄二が口を開く

「なあ、慶太も中華料理作ればいいんじゃないか？慶太の料理なら客はかなり入ってくるだろ」

「ああ、そうだけいいの、須川？最初の趣向と変わってくるけど」

「いいさ、すべては設備向上のためだ！」

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は山崎と須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

厨房班のリーダーは結局、俺になった。

お茶とかはそんな知らないけどメイン料理などが作れるからだとかだそうだ。

まあ、俺以外のやつらにも作ってもらわなきゃいけないし簡単に作れるレシピでも考えておかなきゃな……

放課後になり帰りの支度をする。

優子とは喧嘩中だから話もしないし一緒に帰らない。
別居中だ。

「秀吉、帰ろうぜ」

「そ、そうじゃのう・・・」

すると明久と島田の話し声が聞こえた。

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉のほうがいいよ！」

「・・・あ、明久？」

なんかタイミングが悪いな。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいのじゃが、そんなこといわれても、ワシらにはいろいろと障害があると思うのじゃ。その、ホラ。年の差とか・・・」

どうしてそうなるんだ・・・

「ひ、秀吉！違うんだ！ものすごい誤解だよ！さっきのはただの言葉のあやで！それと、僕らの間にある障害は決して年の差じゃないと思う！」

「何とかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような・・・」

「お前らそんなに深刻な話してるのか？なんなら俺も手伝うけど。」

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の話で」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なの・・・」

「え？どういうこと？」

明久は話を理解してなかったのか・・・
とり合えず聞いてみよう

「本人には誰にもいわないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし・・・。けど、一応秘密の話だからね？山崎も木下も」

「う、うん。わかった。」 「おう。」 「わかったのじゃ」

「実は瑞希なんだけど・・・・転向するかもしれないの」

・・・明久が壊れた

「む。まずい。明久が処理落ちしかけておるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから」

「おい、バカ！目を覚ませ」

「・・・はっ！？美波！姫路さんが転校って、どういことさ！」

「・・・Fクラスの環境のせいかな」

だいたいこんな理由だろう。
はたからみれば最悪だからな。

「そうよ、山崎。設備の問題ってこと。瑞希は体も弱いし」

「そうだよな。それが一番まずいよね」

「じゃあ、絶対成功させるしかないよな！」

「そうだね慶太。転校するなんて嫌だもん。そのためにも雄二に連絡取らないと」

そういつて携帯を取り出し雄二に電話をかける明久。
少しの間会話をしていたようだがなんだかおかしい。

「雄二はなんていっておったのじゃ？」

「えっと、『見つかった』とか『かばんを頼む』とか言ってた」

「たぶん、霧島に追われてるんだろ」

雄二も素直になればいいのにな。

まあ、今の俺と優子は素直になれてないから喧嘩してるんだけどね。

「そうすると、坂本と連絡を取るのには難しそうね」

島田が大きく息を吐く。

「いや、これはチャンスだ。」

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すにはちょうどいい状況なんだよ。うん。ちよっと3人とも協力してくれるかな？」

「それはいいけど……坂本も居場所はわかってるの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは何も雄二だけじゃない」

それから明久について教室をあとにした。

「やあ、雄二。奇遇だね。」

そこは体育館にある女子更衣室。

雄二は部屋の物陰で体を小さくしていた。

「どういつ偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ。それに慶太まで」

「まあいろいろあつてな」

ガチャッ

音を立ててドアが開くと、その向こうには体育服姿の女子の姿があった……優子だ

優子と一瞬、目が合う

「先生、覗きです。主犯はFクラス、山崎慶太です。」

冷たい声で言い放たれた言葉。

俺に対して怒っているから当然の仕打ちである。

「逃げるぞ、雄二、明久。」

勢いよく部屋を飛び出す。

「了解・・・あれ？なんで秀吉のお姉さんは主犯が慶太だって言ったの？いつもの二人なら慶太だけなら許されてもいいんじゃない？」

「今、喧嘩中だから」

「お前らが喧嘩なんて珍しいな」

「いいだろ、別に・・・」

『山崎が！？吉井と坂本はいつものことだが』

鉄人が追ってくる。

「明久！」

前方の新校舎2階の窓から中に逃げ込もうというわけか・・・
まず雄二が手を組んで作った踏み台に明久が足をかけいつきに飛び上がる。

そのあと雄二が壁をけり明久の制服に捕まりながら中に進入する

「慶太も早くっ！」

「了解！」

俺も雄二と一緒に方法で中に入る

明久の制服から嫌な音がしたのは気にしない。

『お前ら！明日は逃がさんぞ！』

さすがの鉄人でもここまででは追ってこれないようだ。

「で、何なんだ？」

「喫茶店のことか・・・こんな回りくどいやり方しなくても、明久が『大好きな姫路さんの為にがんばりたいんだ！協力してください！』といえば面倒だが引き受けてやるというのに」

「なっ！？べ、別に、そんなことは一言も・・・・・・・・・・！」

「しょうがないから協力してやるよ」

それから詳しいこと雄二に説明した

「問題は三つだな。」

雄二の言った問題は一つ目は快適ではないる学習環境だ。あの設備はどう考えても酷い。

二つ目は老朽化した教室。健康に害の学習環境だ。

三つ目は姫路が能力を伸ばすために必要な競争相手だ。

Fクラスなので本来学年次席であるはずの姫路から見ればレベルが低いのである。

俺や康太みたいな偏りのある生徒じゃ全体的に能力が伸びることは難しいだろ。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目はとかく二つ目と三つ目は難しいのう」

「それでもないさ。三つ目のほうは既に姫路と島田が対策を練っているんだろう？」

「この前、瑞希に頼まれちゃっからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って、頼まれちゃったからね」

いつもと違う表情をした島田を見て驚いた。

普通に可愛いと思うんだがな。

そっぴや喧嘩してても浮気とかしたいと思わないな。
他の女子に興味がわかない

「翔子に参加したら優勝は厳しいだろうが、アイツはこういう行事に無関心だからな。姫路と島田の優勝もありえる」

「ああ、二人ならありえるな」

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどつするの？」

「どつするもなにも、学園長に直訴したら」いいだけの話だろう？」

「それだけ？僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるの？」

「明久、ここは曲がりなしにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「あ、そうか」

「それなら、早速学園長に会いに行つて来るか」

それから、俺と雄二と明久と秀吉は学園長室に向かった。

『・・・賞品の・・・として隠し・・・』

『・・・こそ・・・勝手に・・・如月ハイランドに・・・』

なにやら学園長が誰かと話しているらしい。なんとなくが言い争つてる感じた。

「学園長はいるみたいだな。入ろっぜ」

「失礼しマース」

俺が前にいる二人を促すとノックをして返事が帰ってくるまえに入つていった。

「本当に失礼なガキどもだねえ。後ろのやつはちゃんと待っているというのに」

俺は一応優等生をやつてゐる。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話しを続けることができませんね。・・・まさか、貴女の差し金ですか？」

そついったのは教頭の竹原先生だ。

この人はあんまり好きじゃない。

「馬鹿を言わないでくれ。どうして私がそんなせこい手を使わなくちゃいけないんだ。負い目があるわけでもないのに。」

「それはどうだか。とり合えず私は失礼します。」

教頭が俺の横を通り部屋を出て行く。

「んで、ガキども。あんたらは何のようだ。」

「今日は学園長にお話があつて来ました」

「私はそれどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えときな」

この人も口が悪いな。

まあ教頭よりこういう人のほうが好きだけど

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。こちらは……
……二年を代表する馬鹿です」

「ほう、そうかい。アンタ達がFクラスの坂本と吉井かい。それでその二人は？」

「俺は同じFクラスの山崎慶太です。」

「ワシもFクラスの木下秀吉じゃ」

「あんたがああの山崎かい。歴史で過去最高点を取ったというのはよし、気が変わったよ。話を聞いてやるうじゃないか」

俺のことを知っているのか。

まあ、あれだけの点数を取れば当たり前か。

それから俺たちは今回の件について話した。

途中雄二たちの暴言も入っていたが気にしない。

「ふむ、ちょうどいいタイミングさね……」

今、なんかいったか？

「よしよし。お前達の言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してくれるんですね！」

さすが腐っても教育機関だ。これぐらい大丈夫だろう

「却下だね」

「雄二、鉄、このババアをコンクリートに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度に気を遣え」

雄二、お前も気をつける。

「設備に差があるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

その言葉をさえぎるように学園長が口を開く。

「・・・と、いつもなら言っているんだけどね・・・可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるうじやないか」

可愛い生徒・・・なんてこれっぽちも思っていないだろう。

学園長が交換条件として出したのがこれだ。

清涼祭で行われる召喚大会の副賞の『如月グランドパークのペアチケットの回収』。なんでも訪れたカップルは幸せになれるというリンクスを作ろうとしているのだが、その方法が多少強引な手段を用いても結婚までコーディネートするらしい。

「わかった。条件をのみましょう。だがこちらからも提案がある・・・だよな雄二？」

「ああ、召喚大会は2対2のタッグマッチ。形式はトーナメント制で一回戦が数学だとしたら二回戦は化学、といった具合で進めていくと聞いている」

一回戦で消耗した点数のまま戦うのはおもしろくなるだろうか
らな。

「対戦表が決まったら、その教科の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ、いいだろう。ただし対戦相手はこちらがランダムで決めさせてもらうよ。その変更はなしだ」

「・・・ありがとうございます」

「さて、そこまで協力するんだ。当然勝てるんだろうね？」

「もちろんです。俺たちをなめないでください」

「そうじゃのう。ぜったい優勝せねばの」

「お前たち4人とも出るんだろう？どう分かれるんだ？」

「そうだね。ここはじゃんけんでいこう。」

そんな簡単に決めていいのか、明久。

「じゃあ、ジャンケン・・・ポン！」

結果。俺・・・グー 秀吉・・・パー 雄二・・・パー 明久・・・グー

「最悪だゝ負けるゝ」

「ちょっと、慶太！それって僕だから負けるってこと！？」

でもとり合えずやるしかない！

以下の問に答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名をすべて挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

山崎慶太の答え

『エストニア リストニア ラトビア』

教師のコメント

山崎君は社会科系はすべて得意のようですね。
暗記が得意なのでしょう。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数があつてないことに違和感を覚えましょう。

第十問（前書き）

いつの間にかお気に入り登録数40件を超えました。皆さんありがとうございました。更新不定期ですができるだけがんばります

第十問

学園祭の出し物をきめるアンケートご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどのようなものがいいですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、いい考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしり書かなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています

山崎慶太の答え

『鎧兜に帯刀を勧める。(1クラス分ぐらいなら貸し出し可)』

教師のコメント

斬新なアイデアですね。

しかしなぜ山崎君の家にそんなに鎧や刀があるのかは不思議です。少し怖いです。

「よし、こんなもんだろ。みんなも大丈夫か？」

『オオー』

清涼祭当日。

俺は家から中華料理用の道具を持参し下準備をしていた。

俺は召喚大会に出るのでずっと厨房にいるわけには行かないので他にも何人か料理ができるやつを選び特訓して鍛えといたから何とかなるだろう。

「慶太ーそっちはどう？」

明久の声。

こっちの出来を確認したいのだろう。

「完璧だ。他のやつらも結構できるようになったしな。」

「よし、慶太もそろったことだし一回戦に行くぞ。」

そういつて、俺と明久、雄二に秀吉は教室をあとにする。

「それで雄二、僕はまだ対戦表見てないんだけど僕らでも勝てそう

なの？」

「ああ・・・お前らは絶対勝てるように教科を変えてきたぞ！」

「雄二、お前たちではなく、ワシらはどうなのじゃ」

「秀吉、俺たちはあきらめよう。一回戦目は翔子とお前の姉、木下優子だ。」

「な、雄二！？姉上はでるなんて一言もいってなかったはずじゃがのう・・・たしかにまともに戦って勝てる相手ではないのう」

「雄二、何か策はないの？」

次は秀吉に代わって明久が雄二に問いかける

「悔しいが翔子相手だと策がない・・・だが、なんで翔子がこんなのにでるなんて・・・」

「たぶん、如月ハイランドのチケットが欲しかったんじゃない？雄二と行くために」

「くそッ、翔子め・・・頼む！絶対勝ってくれ、慶太」

「あれ？なんで慶太だけに頼むの！？」

「それは明久が頼りにならないからじゃない？・・・まあ、雄二安心しろ。絶対優勝するから」

そして一回戦目

「えー。それでは試験召喚大会一回戦を始めます。」

今回の立会人を務めるのは古典の向井先生。なので、教科も古典になる。

「では、召喚してください。」

相手はBクラスの女子二人。
教科が数学とかだったらやばかっただろうな。

「「サモン」「」

『Bクラス	岩下律子	&	Bクラス	菊入真由美
古典	189点			192点

』

「さすがBクラスってとこだね。慶太は古典のできはどう？」

「まあまあってとこだな。明久は？」

「僕も同じようなもんだよ。」

「「サモン！」「」

『Fクラス 山崎慶太 & Bクラス 吉井明久
古典 431点 46点 』

「律子、あの点数!？」

「Aクラス上位の点数・・・すごい」

驚いてるようだな。

まあ当然か

「慶太って古典も得意だったの？」

「俺元々文系科目はAクラス並みはあるんだよ。古典は歴史もちよ
つと入ってるだろ。だから好きなほうだし。てか、明久はその点数
なんだ・・・まあ、しょうがないか。行くぞ！」

とりあえず俺はちょうど前にいる菊入の召喚獣に攻撃を仕掛ける。
相手は俺の点数を見て防御体制をとっているようだがすばやく俺の
召喚獣を後ろに回りこませてランスで一突き。

「そんな」

「明久、大丈夫か」

「この、このあ」

あつちも召喚獣の扱いにまだ慣れてないようだ。
明久に遊ばれている。

「僕も終わらせるよ」

先ほどから少しずつダメージを与え続けた明久の召喚獣は最後の渾身の一撃を決め勝利した。

「・・・勝者、山崎・吉井ペア」

これで一回戦突破だ。

「まずは一勝だね。」

「そうだな・・・よし、早くもどって皆を手伝うぞ。」

「うん」

〈教室〉

俺はトイレに行きたかったので明久を先に行かせていた。

「あれ？机が一つ変わってる」

「おお、慶太。戻ってきたようじゃな。」

「勝負の結果はわかってるから聞かないけどなんで机があるの？」

どうせ負けたんだろう

「それは、さっき、3ねんせいのがのう・・・」

秀吉は俺が不在だったときのことを話してくれた。

3年生二人が営業妨害してきて机がみかん箱だということがばれてしまったこと。

そこで雄二が二人を追い払ったが周りの客が机のせいではなれそうだったので秀吉が演劇部から持ってきたこと。

「よし、じゃあ離れた客を取り戻さないとな。俺は厨房に行く。」

「任せたぞ。慶太の料理があればなんとかなるかもしれないのう」
結構今回みんなとこうやって料理するのが楽しかったりする。

いろいろあったが俺の料理と明久となんとか客が戻ってきたようだ。
そしてこれから2回戦だ。
俺は机を調達してきた明久と雄二と会場に向かっている。

「雄二、二回戦の相手は？厨房が忙しくて見れなくてよ」

客が増えたので決行の賑わいで忙しかったな

「対戦表を見た限りじゃあ・・・お、予想通りだ」

雄二の予想を聞こうとしたが相手も来たので雄二と別れて登壇する。
そのとき雄二にあるものを渡された。

対戦会場に現れたのは・・・。「あれ？誰かと思えばBクラスとCクラスの代表カップルじゃないか？」

このふたり・・・顔は見たことあるような気がするんだけどなあ・・・

「明久、この二人誰？」

「慶太はBクラス戦のときいなかったんだよね。こっちがBクラス代表の根本君とCクラス代表の小山さんだよ」

「よ、吉井たちが相手だと！？隣のやつは……」

「どうしたの根本君。一人はバカだし、もう一人だってどうせFクラス。たいしたことないわよ」

ふんっ！言ってるがいい。俺の実力をさせてやる

「それでは試験召喚大会第二回戦を始めてください。」

今回の立会人は英語担当の遠藤先生だ。
サンキュ、雄二

「『『『サモン！』』』」

『Bクラス	根元恭二	&	Cクラス	小山友香
英語W	199点			165点

『Fクラス	山崎慶太	&	Fクラス	吉井明久
英語W	378点			59点

「な！前の試召戦争のときにはこんな点数のやついなかったぞ」

「あんときは病欠してたんだよ。明久、そっちの女子を少し相手しててくれ」

「了解」

明久の召喚獣が女子の召喚獣と戦い始めるのを見届けてから俺は根元の召喚獣に攻撃を仕掛ける。

「何でお前みたいなやつがFクラスにいるんだよ！」

根元は焦ってるな。まあ当然か。

あつちは防戦一方。

俺の召喚獣のランスをなんとか交わしている。

押してはいるのだがなかなか最後の一発が決まらない。

ここは先ほど雄二がくれたもの使ってみるか。

「根元！これを見ろ！」

「お、お前！なぜそれを！！」

俺が見せたもの……それは根元恭二個人写真集『生まれ変わったワタシを見て！』だ

根元ってこんな趣味だったんだ。

とりあえず今、根元は明らかに動揺しているのでこのスキに

「もっらい」

ランスで一突き

これで根元を倒した

「おーい、小山だっけか？今の見てただろ？これが欲しかったら降参してくれ」

「わかったわ。どうせあんたがいたら勝てそうにないしね。先生、

降参します」

「わかりました。山崎君と吉井君の勝利です。」

俺は小山に写真集を渡し明久と立ち去ろうとしていた。
そのとき後ろで

『別れましょ』

『ちょ、ちよっと待ってくれ！これには事情が・・・・・・・・！』

こんなことが聞こえたが気のせいだろ

第十問（後書き）

感想などもお待ちしています

第十一問（前書き）

高校の中間テスト、慶太と同じ結果になってしまった・・・

第十一問

以下の問に答えなさい

『PKOとは何か説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace - Keeping Operations（平和維持活動）の略。

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですがUnited Nations Operationsとも呼ばれたりします。

余裕があれば覚えておくといいでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsukiOppaiの略。

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略。』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人たちです。

山崎慶太の答え

『Peace - Keeping Operations（平和維持活動）の略。』

平和維持活動は、「国際の平和及び安全を維持する」（国際連合憲章第一章）ため、国際連合が小規模の軍隊を現地に派遣して行う活動である。従来は、紛争当事国の同意を前提に派遣されていたが、冷戦後は必ずしも同意を必要とせずに派遣する例もある。平和維持活動については、憲章上に明文の規定はないが、「ある種の国際連合の経費事件」において国際司法裁判所がその合法性を認め、国際連合総会が1962年の第17回総会でこれを受諾している（総会決議1854）。

軍事部門に派遣された各国軍隊は、自国の軍服（戦闘服）に、水色のベレー帽（国連紋章―オリーブ冠を巻いた地球儀―のバッジ付き）やヘルメットをかぶることから、「ブルーベレー」や「ブルーヘルメット」と通称される。また、派遣車両はPKO部隊であることを明示するため、白に塗色され、「UN」（国際連合の略称）と大書される。』

教師のコメント

正解です。

こんなに詳しいのはやはり歴史にかかわっているからでしょうか。

「ただいまー……って、あんまりお客さんがいないなあ」

俺と明久が2回戦から教室に帰ってくるとなかにはお客さんはほんの数人しかいなかった。

さっきなんとか取り戻したはずなんだけどなあ」

「お、戻ってきたようじゃの」

客がないので秀吉も暇そうだな。
ちなみに雄二はトイレに行った。

「秀吉、なんでこんなに人がいないんだ？さっき客もそれなりに入
ってきてたと思うんだけど。」

「わしにも良くわからんのじゃ。あれ以来妙な客も着ていないよう
じゃし」

「ってことは、教室の外で何かが起きているのかな？」

確かにそうかもしれないな。

明久にしてはいい考えだ。

そんなことを思っていると廊下から話し声が聞こえてきた。

「お兄さん、すみませんです」

「いや。気にするなチビツ子」

「チビツ子じゃなくて葉月ですっ」

「雄二が戻ってきたようじゃな」

雄二と小さな女の子の話し声が聞こえた。
そして教室の扉を開け入ってきた。

「お、坂本。妹か？」

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない?』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん? 名前はなんて言うんだ?」

どうやら人探しらしい。

「家族の兄じゃないのか? それなら、何か特徴は?」

意外と雄二が優しく聞いている。

将来も自分の子供にもあんな感じなんだろうなあ

霧〇〇子さんとのね」

「えっと……バカなお兄ちゃんでした!」

それならここに沢山いるな。

「……沢山いるんだが?」

俺も含まれているのか?

「あの、その、そうじゃなくて、その……」

「ん? 他に特徴があるのか?」

「……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです!」

『『吉井だな』』』

うん、間違いなく明久だ！

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い……」

「あつ！バカなお兄ちゃんだっ！」

小さな女の子が明久に抱きついた。

「『絶対に人違い』、がどうした？吉井」

「……人違いだと、いいなあ……」

明久、お前は自分がバカだっですでに気付いているんだろ

「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

吉井は抱きついている女の子を引き剥がした。

「え？お兄ちゃん……。知らないって、ひどい」

なかせたな。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

だんだん明久がかわいそうになってきたよ。

「明久……じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「そうだよ？明久はバカでバカなバカのバカだから仕方ないよ。このバカは一生治らないバカだよ……うんバカ……バカ……バカ」

「ちよつと、3人とも。そんなバカバカ、連呼しないで！慶太は最後のバカは無理やりつけたでしょ！！」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに……」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ふあっ！？」」

姫路と島田も帰ってきたのか……ナイスタイミング♪

「ふえええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」

明久・・・・・・・・お前はそんな境地に達していたのか・・・・・・・・

「坂本は包丁を持ってきて。5本あれば足りると思うから」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいつ！慶太ッ助けてよ！」

「え・・・・・・・・プロレスごっこがんばってね」

とり合えず笑顔でこう返しておいた。

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちよっと待ってなさい」

「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよ！」

小さい女の子が島田を見て泣き止んだ。

「ああ、あのときのぬいぐるみの子か！」

「なんだ？やっぱり明久の知り合いなのか？」

話を聞くとこの葉月という女の子は島田の妹らしい。
たしかに似ているな。

それで過去に明久、それに姫路とも面識が会ったらしい。

「ところでこの客の少なさはどういうことだ？」

「そうなんだ雄二。俺たちが帰ってきたときからこんなかんじなんだ。だから他のクラスの影響とかじゃないかな？」

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？どんな話した？」

代表が屈み込んで葉月と視線を合わせる。

「えつとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、て」

まだそんなのが続いてたのか。俺がいない間になんかしてたやつら。

「じゃあ、とりあえずそいつらのところに行ってみようぜ。とり合えず様子見て、酷いようだったら叩きのめす。」

「そうだな、慶太の言ったとおりあいつらの様子を見に行ってみるか。で、ちびっ子。さっきの話はどこで聞いたんだ？」

「えつとですね・・・短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店・・・・・・・・」

「慶太、それは姉上がいるAクラスじゃぞ」

それは知らなかった。

最近優子に会ってないし厨房の準備で忙しくて他のクラスの事なんて気にかけてなかったしな。」

「すまん、みんな。俺は厨房に行くよ。できるだけこっちでも客を

集めておくよ」

「わかったよ、慶太」

「姫路と雄二も一緒に行くといいじゃろ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼食済ましてくと良い」

俺と秀吉は雄二と明久、姫路に島田とその妹を送り出しそれぞれの仕事場に戻った。

〓十数分後〓

いまだ、客は戻らず。

はあ〓厨房に來たけれどなんにもすることがなくて暇だ……とり合えず雄二にどうなっているか聞いてみよう。

「……つと雄二、そっちはどうだ？」

「慶太か、たった今、あの常夏コンビ來た所だ」

たしかに何を言っているか聞き取れないがおそらくその常夏コンビがまた悪口を言っているようだ

「雄二、俺にいい案がある。少し待っててくれ」

「おう、じゃあ任せるぜ」

ということとで電話を切る。

「お前らちょっと厨房任せたぞ。」

『どこにでも行つて来い』

『どうせ、客こないだろー』

まあこいつらの言うことは間違つてないな

「秀吉、ちよつと協力してくれ」

「別にいいがなにかあつたのか？」

「ああ、ちよつとな……」

（Aクラス）慶太 Side out

「雄二、慶太はまだこないの？もう我慢の限界なんだけど！」

「そろそろだと思ふんだが……ん？あれはたしか……」

たつた今Aクラスに入ってきたのは常夏コンビと同じ3年Aクラスの一番人気の女子生徒だ。

その後ろには同じクラスの男子もいる

「ちよつと夏川、常村さつきからあんたたちがいつてる2年Fクラスの中中華喫茶。汚いとか言つてたくせに全然きれいじゃない。こまめに掃除してあるしテーブルもちゃんとしたものだし何たつてあの料理、プロ級じゃない！」

彼女は大声でAクラスの真ん中に座っている常夏コンビに二人が先ほどから言っていることと真逆のことをいった。

「え、いやその……」

いきなり学年１の女子にこんなこといわれた常夏コンビは次の言葉が出せないでいた。

「とにかく二人とも、クラスのほう手伝って」

あっけなく常夏コンビはその二人に連れられ教室を出て行った。

「雄二、今のはなんだったんだろう……」

「さあな…… まあ良かったじゃないか、あの先輩がFクラスの宣伝もしてくれたしよ。慶太にはとり合えず連絡しておかないとな……」

雄二が携帯を手に取り慶太に電話をかけようとする。

「やあ、雄二」

そのとき後ろから声がかかった。

それは先ほど女子の先輩と一緒にいた男子生徒であった。

「お前は……」
♪~~~~~♪

アニメのキャラクターの着ボイスがその男子生徒の制服の中から流れる。

「この音は……慶太!？」

明久が驚いたように言う。

〈慶太Side in〉

「そういうこと！」

俺は顔にかぶっていた男子生徒に似せたマスクをはがした。

「山崎君、それはなんなんですか!？」

まだ状況をつかめてない姫路が質問してきた。
まあみんなも不思議がつてるだらうけど。

「これは変装用のマスクだよ。俺と秀吉が苦労して身に着けた技術で作ったものだ。これであの常夏コンビを懲らしめるために一芝居うつたんだよ。ちなみにさっきの女子の先輩つてのは秀吉が化けたやつだよ。」

「お前つてやつはほんとすごいやつだなあ」

「ありがとう。じゃあ、俺は店のほうに戻るよ。あの先輩なら結構影響もあつただろうし、何とかしてみるよ」

とりあえずもどつて、がんばらないと。
姫路を転校させないために！
だって明久がかわいそうなんだもん♪

「で、三回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」

会場に向かったが相手が食中毒で棄権したらしい

もしかして・・・姫路が作っていたものが関係あったりして・・・

・

「それなりに客も戻ってきたようだがもうちょい、欲しいもんだな。そのためにはこれを着てもらおう」

そういつて雄二が取り出したのは刺繍も見事な水色と白のチャイナドレス。

「それを明久に着てもらうってことだな、雄二。」

「そうだぞ慶太「ってつちよ・・・！お願い、許して！そんなの着たらもう外に出れないよ！」

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらう」

「あ、なんだ。良かった」

それから姫路と島田が帰ってきてからチャイナドレスを着せて召喚大会に行かせ、秀吉と葉月にも着せて校舎内を歩かせた。そのおかげで客もさらに増えてきたようだ。

とりあえず店も順調に進み4回戦の時間が来た。

『それでは4回戦をはじめたいと思います。出場者は前に出てくだ
さい。』

4回戦目の相手は島田と姫路。

姫路の転校を防ぐために出てるらしいが俺たちも目的は同じだし学
園町との取引もあるのでここは負けられない。

『それでは、四回戦をはじめてください。出場者は前へどうぞ』

「あ、あの……。やっぱり恥ずかしいです。」

「我慢してくれ姫路。このほづが宣伝にもなるし……。明久も喜
ぶぞ」

最後のほうは明久には聞こえないように

「わかりました、がんばります！」

『では、召喚してください』

「よし、じゃあ……」「」「サモン！」「」

4人が一斉に召喚獣を召喚する。

ここで小さな歓声上がる。

始めてみる観客にはやはり珍しいものだろう。

ちなみにまだ点数は表示されていない。

『では四回戦を……。えっと、ちょっと待ってくださいませんか
？』

「すいませんが、少しマイクを貸してください」

そう告げると先生がマイクを貸してくれた。

これは雄二の指示でFクラスの宣伝を行うのだ。

『清涼祭にご来場の皆様こんにちは』

意図に気付いた明久が島田と姫路を並ばせる。

『ここにいる僕たち4人は本格中華料理と飲茶を提供する二Fの中華喫茶で働いています。このようにかわいらしい女子も一生懸命がんばっています。ふつつかながら私も料理を作っておりますのでよろしければどうぞお立ち寄りください。』

「「「よろしくお願いします！」」」

これは雄二が用意してくれたメモを読んだだけだ。

こういうのはあんまり得意じゃないんだけどちゃんと読めたよな？

「先生ありがとうございました。」

『・・・ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手たちのいる二Fに立ち寄ってみてください。さて、それではいよいよ召喚大会の始まりです。4人とも頑張ってください』

「アキに山崎。ここまでよく勝ち上がってきたわね。でも、いくら山崎がいても今回の教科は数学。あんたらじゃ勝ち目がないわ。」

「確かに島田・・・数学ならな！」

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波
現代文 412点 7点
』

「げ、現文！？四回戦は数学じゃなかったの！？」

「雄二がお前たちに渡した対戦表は雄二の手作りだ」

「だ、騙したわね！！」

「これで、ほとんど二対一だな。」

「そのとおりだよ慶太！7点しか取れていない美波の召喚獣なんてはつきり言っていないも同然さ！」

「くっ！なんて卑怯なの！」

俺は先ほどこのことを雄二に聞いたただけなので罪はないよ……うん。

『Fクラス 山崎慶太 & Fクラス 吉井明久
現代文 412点 9点
』

「……………明久」

「……………正直悪かったと思っている」

「……………しょうがないからとり合えず島田の相手をしてくれ。姫路は俺が何とかしてやる」

「山崎君には負けませんよ。私は絶対に優勝しなくてはなりませんから！」

「俺たちだって負けられないんだ。学園のためにも、お前のためにも」

周りの人に聞こえないように姫路に話しかける。

「え！？私のためってど、どういうことですか？」

「俺たちはお前の転校の件を知っていてこの大会に出てるんだ。俺だって姫路がこの学校からいなくなるのは嫌だし他の皆だってそうだ。特に明久もそう思ってる。だから、ここは負けてくれ。」

「・・・でも、山崎君たちに迷惑がかかってしまいます。だから私も負けたくありません」

「じゃあ、しょうがないな・・・姫路、これを見る！」

俺が姫路に見せたのは明久の半裸写真。

この前遊んでいるときにふざけてとったものだ。そしてここで姫路に隙ができた。

「隙あり！」

姫路が写真に見とれている間に姫路の召喚獣に俺の召喚獣がランスを突き刺す。

そして姫路の召喚獣の点数が0点になる。

「瑞希！」

姫路の召喚獣が倒され島田が動揺している。
明久はその隙について島田の召喚獣を倒した。
これで俺たちの勝ちだ。

「そんな！山崎君酷いです！」

「ごめん、でも絶対俺たちは優勝するから。・・・あとその写真あげるからさっき話したことは忘れてくれ」

「そんなことでこれくれるんですか？ありがとございますー！」

あれ？姫路ってこんなに扱いやすかったんだ・・・

第十一問（後書き）

なんか召喚大会の場面が少ない気がする・・・
感想もオマチシテイマス

第十二問

次の問に答えよ

世界三大美女を答えよ

姫路瑞希の答え

クレオパトラ7世、楊貴妃、ヘレネ

教師のコメント

正解です。

しかし日本ではヘレネのかわりに小野小町が入れられることが多いです。

吉井明久

木下秀吉、姫路瑞希、島田美波

教師のコメント

それはあなたの身の回りでのですね。

山崎慶太の答え

世界一大美女を答えよ

木下優子

教師のコメント

勝手に問題を変えないでください

4回戦に勝ちみんなで教室に戻るとクラス内は結構の賑わいになっていた。

「慶太、明久帰ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ？」

秀吉がチャイナドレス姿で歩み寄ってきた。

「俺たちが勝ったぜ」

「そうか、それは何よりじゃ」

秀吉は男のはずなんだが普通に似合ってる。

やはり優子に似ているからか

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ。」

「そうですね。喫茶店にお手伝いをしないといけませんよね」

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げのためにがんばりますか！」

「はいっ。葉月もがんばりますっ」

ウェイトレス3人娘もなかなかやる気のようにだ。

「ワシは一応男なのじゃが……」

「秀吉、俺はわかってるぞ。とりえず明久たちも働けよ。俺は厨房に行く」

「ん、そうだね」

「よし、行くぞ明久」

「うん。それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

忙しく料理を作ること一時間。

いよいよ、準決勝の時間になった。

俺と明久と雄二が教室を出て会場に向かう。

「二人ともこの試合は特に負けられないからな。」

「でも今回の相手って……慶太大丈夫？」

明久が心配すること……次の相手は雄二と秀吉を一回戦で破った優子、霧島ペアだ。

「俺のことは心配するな。姫路の……まあ明久のためでもあるか。全力で俺は二人を倒す。」

「頼もしいな、慶太。あの二人には小細工がききそうにない。だから、教科はお前の有利なものにしたいぞ。」

「サンキュ、雄二」

そうこうしているうちに会場に着いた。

「おっしや！行くぞ」

「おうつ！」

なんかいつも以上に気合が入ってるなあ、俺

優子が相手だからだろうか……ああ！もう、集中だ！！

『お待たせしました！これより準決勝を開始したいと思います。』

『それでは出場選手の入場です』

俺たちがお客さんたちの前に立つ。

そして向かいからは優子と霧島が出てくる。

「・・・・・・・・山崎、邪魔しないで」

「別に俺は霧島と雄二の邪魔をしたいってわけじゃない。というより俺は二人を応援したいと思っている」

と、そこで場外から雄二の言葉が聞こえたのは気にしない。

「・・・・・・・・それなら降参して」

「応援したいがここは絶対負けられない！」

そこで優子が口を開く

「あら、どうせまったくだらないことを考えてるんですよ。」

「俺は大切な友人のために優勝するんだ」

「あつそ、せいぜい、頑張ることね」

『それでは、召喚してください』

「」「」「サモン」「」「」

今回の教科は雄二いわく一番の強敵なので俺が一番得意な教科。明久もこれまで最も勉強してきた日本史だ。

『Aクラス 霧島翔子 & 木下優子

日本史 421点 599点』

「……優子、いつの間にそんなにとつてたの？」

「悔しいけど慶太のおかげで点数上がってるの」

『Fクラス 山崎慶太 & 吉井明久
日本史 865点 166点』

「さすが慶太だね。僕も結構がんばったほうなんだけど」

「ああ、お前にしてはがんばったほうだよ」

「……やっぱり山崎は強い」

総合点数だとほぼ互角……少し厳しいな。

まさか優子があそこまで点数を上げていたなんて

「慶太、どうする？この戦いは今日、一番厳しいと思うよ。」

それは当たり前だろう。

何もせずに戦ったほうが少ないんだから……あれ？一回もなかったような。

「策はないことがない……少し俺に任せてくれ。」

「了解」

策っていつでも雄二みたいなものを立てれるわけじゃないし……簡単なもんだ。

「俺の召喚獣から離れるなよ！相手を牽制しながら攻撃、防御を繰り返すんだ！」

明久は俺の言うとおり召喚獣を操作してくれている。

一進一退の攻防。

どちらも互いに点数は減らない。

優子と霧島の召喚獣は俺と明久の召喚獣を挟み込もうとしようとしているようだが、俺たちも移動を繰り返しながら攻撃をしているのでそれは成功しない。

「フン、こんなことしてても勝てないわよ。」

「それはわからないぜ・・・・・・・・・・よし、いまだ！」

俺が見ていたタイミング。

それは召喚獣の位置だ。

「リング、発動」

俺の召喚獣についているリングの能力が発揮される。

相手、2体の召喚獣がちょうど俺の召喚獣の前にそろうとき、その足元から炎が湧き上がる。

「しまった」

霧島から焦りの声が聞こえたがもう遅い。

俺もかなりの点数が消費されるがその分相手の点数もかなり削れる。惜しいことに優子には少し勘付かれていたようで少ししかダメージを与えられなかった。

『Fクラス 山崎慶太 & 吉井明久
日本史 565点 166点』

VS

『Aクラス 霧島翔子 & 木下優子
日本史 121点 559点』

「これならいけるよ、慶太。霧島さんは僕に任せて！」

明久はかなりやる気だ。

まあ、日ごろ絶対に勝てないであろう霧島に勝てそうな点数になっているのだから。

霧島は明久にまかせ、俺は自分の敵に意識を集中させる。

「残念だったわね。わたしにあんまり当てられなく。あのとき、慶太の微妙な癖が出てたからわかったのよ」

「まあ、いいさ。勝つのは俺だ！」

そういつて召喚獣を相手に向かわせる。

ここからはガチの勝負だ。

5分後

「やった」

隣では10点だけ残して霧島に勝利した明久が歓喜の雄たけびを上げていた。

やっぱりかなり嬉しかったんだろうな。

こちらは先ほどからお互いに徐々に点数が減っていき現在、俺が102点。優子が99点である。

「よそ見してると痛い目見るわよ！」

明久のほうに気をとられているうちに優子の召喚獣が迫ってきて、少し攻撃が掠めた。

悔しいがここで点数的には逆転されてしまう。

「このまま、終わらせるわよ！」

さっきの勢いのまま優子の召喚獣が俺の召喚獣に迫ってくる。

「慶太！」

ああ！クソッ！ここまできたら負けられないだろ！

そのとき俺は後ろを取られていた。

だからもう玉碎覚悟で後ろに振り返ると同時にランスを前に突き出した。

・
・
・

お互いの武器が同時に召喚獣に突き刺された。

そして点数が表示された。

『Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	山崎慶太
日本史	0点			0点

「……………相打ち……………」

『……………山崎・吉井ペアの勝利です。』

点数が残っているのは明久だけ。
チーム戦なので俺たちのペアが勝ったことになる。

「ごめん、代表・・・」

「ううん。ありがとう、優子。」

「やったな、明久！」

「うん！慶太のおかげだよ・・・でも、秀吉のお姉さんと仲直り
しなくていいの？」

「そのことはいいんだよ、別に」

「ねえ、喧嘩した理由って何なの？」

とりあえず教室に戻ろうと歩き始めると明久が聞いてきた

「・・・・・・・・」

それに俺は答えられなかった。

「・・・・・・・・なんで喧嘩したんだっけ？」

第十二問（後書き）

誤字等の指摘、感想などありましたら申してくださいね

第十三問

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを精製する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である。』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要なので、確実に覚えて老いてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利なものを作らないように

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

山崎慶太の答え

『塩化アンモニウム - ? 』アンモニア』

教師のコメント

ちゃんと答えを書いてくださいね

準決勝に教室に戻るとFクラスの皆はすごく盛り上がっていた。

なぜかというと、まあFクラスである俺と明久がAクラスの、上位者に勝ったからだ。

「やりましたね、明久君、山崎君」

「すごいじゃない、二人とも」

姫路や島田、そのほかにも沢山のやつらが俺と明久をほめてくれる。

「うんうん、もっとほめてくれみんな！」

「明久、調子乗りすぎんな」

「慶太の言つとおりだ、明久。まだ明日の決勝が残ってるんだぞ」

「わかってるよ」

「それじゃあ3人とも、繁盛していてワシらだけじゃ手が回らんのじゃ。手伝ってくれんか？」

「わかった。じゃあ俺は厨房に行くよ。」

「俺はちょっとトイレに行ってくる」

「あ、僕も」

明久はともかく雄二はまたか・・・もしかして下痢？

（15分後）

注文された料理を作り終えたころホールのほうでなにやら騒がしくなっている。

とり合えずそこに向かうと明久と雄二、康太が話していた。

「なんかあったのか？」

「慶太・・・ウェイトレスがさらわれた」

「姫路さんたちは大丈夫なの！？どこに連れて行かれたの！？相手はどんな連中！？」

「落ち着け明久。これは予想の範疇だ」

「え？そうなの？」

「ああ。もう一度俺たちに何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよっかいをだしてくるか。そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくるとは予想できたからな」

どうやら今回はウェイトレスを連れ出すという喫茶店の妨害のほうらしい。

たしかにこの中華喫茶の看板娘を連れ出すことで、売り上げには影響が出るだろう。

「まあ、お前ら二人でも何とかなるだろ？」

俺の間に雄二が答えようとしたとき……「……………たま
た来ていた霧島と木下も連れて行かれた」

……………ブツン

俺の中で何かが切れた

「……………康太、場所はわかるか？」

「……………大丈夫」

とって康太が取り出したのは盗聴の受信機だ。
場所がわかってるんなら……

「行くぞ、二人とも!!」

「「おう!」」

学校から会っついて5分程度のカラオケボックス。
やつらが移動したのはそこだ。

今はやつらがいる部屋のすぐ前にいる状況だ

『さてどうする？坂本とー吉井だったか？そいつら、この人質を
盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。
今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからな』

『坂本って、あの坂本か?』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちはわかるがそうもいかないだろ? 依頼はその二人を動けなくすることなんだから』

康太の持っていた受信機から、音楽に混じってそんな会話が聞こえてきた。

今にでも殴りこみたいところだが雄二の制止されている

お、お姉ちゃん……ん』

『アンタたち! いい加減葉月を放しなさいよ!』

『そうよ! アンタ達男として恥ずかしくないの!』

優子……! 無事見たいだな。よかった……。

『お姉ちゃん、だつてさ! かわいいー!』

『ギャはははは!』

『……灰皿をお取替えます』

……この声は康太か。

『おう。で、このオネエちゃんたちどうする? ヤッちゃっていいの?』

『この双子はほんとにベッピンさんだな。どっちもいいがスカートのほつがやりやすいや』

『あつ！ズリー！じゃあ俺は双子の片割れを……どうせこっちも女だろ』

やつの一人が優子の腕に触れる。
もう我慢できない！

「優子にさわんなっ！！」

明久Side

慶太が飛び出した。

まだムツツリーニから合図が来ていないのに……それにしても触られただけで飛び出すなんて、喧嘩してたのになあ

「雄二、僕たちも！」

「慶太も出てしまったからしょうがないな。いくぞ！！」

慶太Side

「今、優子に触れたのはお前か！！」

優子の一番近くにいるやつを指差しそう言い放つ。

『……そうだが、お前はだれだ？』

「俺は山崎慶太・・・優子の恋人だ!!・・・・・・・・・・..
じゃあとりあえずお前は死ね!!」

そういつてやつに向かって殴りかかる

俺のこぶしはやつの顔に見事に決まり吹き飛ばす。

『て、てめえヤスオになにしゃがる・・・・ってあれは坂本と・・・
・吉井ってやつか』

俺のあとに続いて雄二と明久もついてきたみたいだ。
数は少ない・・・楽勝だろ。

とりあえず明久は微妙だが雄二たちとやつらを気絶させる。
そして、すぐに優子の下に駆けつけ優子を抱きしめる。

「大丈夫か、優子!？」

「うん、ごめんね慶太・・・」

「なんで優子があやまんだよ。とにかく帰ろうぜ」

「うん」

優子を連れて（お姫様抱っこ）部屋を出て行く。

他の皆も明久たちと来るだろう。

誘拐騒ぎも終結して喫茶店の一日目も終了したFクラスの教室。
今は、俺と雄二と明久の3人が残っている状態だ。

「二人とも、そろそろ来る時間だぞ。」

「ああ、やっぱり読んだのね」

誰を呼んだのか。

雄二の考えることだ、おおよそ予想がつく

「え？誰を呼んだの？」

「慶太はもうわかってるんだろ？明久に教えてやれ」

「ここに来るのは学園長だ。この一連の騒動にはまだ何か裏があると雄二が思って真実を聞くために呼んだんだろ」

「あ、あのババア！僕らに何か隠してたのか！」

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

ようやく登場か……まあ俺はここらで……

「俺はここで退場するぜ。こういう話はあんまり好きじゃないんでな。優子も待ってるし、あとは頼んだぞ雄二」

「バカップル復活つてところだなわかったよ、じゃあな」

二人と別れて教室を出る。

そして待つてくれている優子と一緒に買い物してから家に帰った。
久しぶりの優子との夜だ。

がんばってご飯作らないとな
とにかく楽しみだ♪

「翌日」

昨日は超幸せだったなあ」

次の日は朝早く学校に行き明久とテストを受けていた。

決勝戦のために日本史同様今日の科目をずっと勉強してきた。

俺はそれなりに点数取っていたから最初受けないつもりだったんだ
がどうせ朝早く来たんだからってことでやってみたら驚いたことに
点数が結構上がった。

「吉井君も山崎君も早いですね」

「おう、姫路か・・・」

とにかく眠い・・・

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわあ・・・・・・・・・・」

「もう、そんなので決勝戦は大丈夫なの？相手は三年生らしいじゃない」

「問題ないと思うぜ。教科的にも明久がかなりがんばってるからな」

「そつだよ、美波！僕はこれまで死ぬ思いで勉強してきたんだから。」

「山崎が言うなら安心ね。お店は手伝えるの?」

「11時から手伝うよ。それまで少し寝かせてくれないかな? このところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったんだ」

「俺もそうさせてくれ。昼時は手伝うからよ」

「仕方ないわね。11時になったら起こしてあげるわ」

「よし、行くぞ明久!」

「うん!」

結局明久は30分くらいしか手伝っていない。

俺はさっき言った時間ちょうどにおきて手伝ってたんだが明久のほうは皆が気を遣ってくれて寝かせておいたんだ。

そして、俺と明久は何も喋ることなく会場へ向かった。

準決勝のときよりもまた観客が増えているようだ。

「気合入れてくぞ、明久。大好きな姫路のためにだろ?」

「ちょっと、慶太。その言い方はやめてくれないかなあ」

「本当のことだろ。とにかく始まるみたいだぞ」

『さて皆様。長らくおまたせいたしました！これより試験召喚シテムによる召喚大会の決勝戦を行います！それでは出場選手の入場です！』

この声は先生ではないな。

おそらく学校が雇ってるんだろう。

「さ、入場してください」

先生にポンと背中をたたかれ俺と明久は観衆の前に歩み出た。

『二年Fクラス所属の山崎慶太君と吉井明久君です！皆様拍手でお迎えください』

今まで聞いたことないほどの拍手の音が響く。

これほどまでの拍手をされるとさすが嬉しいな

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！しかし山崎君はAクラス並みの点数で圧倒してきました。』

（あの司会者さん慶太のこと褒めてるね）

（たしかに嬉しいな）

『そして対する選手は三年Aクラス所属・夏川俊平君と同じくAクラスの常村勇作君です。出場選手が少ない3年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。Aクラスということでこの勝負、面白い対決になりそうですね。』

相手は予想通りの常夏コンビ。

そついや雄二に言伝を頼まれてたんだつたな・・・

「先輩方、教頭先生に協力している理由は何ですか？」

そう聞くと坊主の先輩は一瞬驚いた顔をした。

「・・・そうかい。事情は理解してるってコトかい」

「大体は、それでどうなんですか？」

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ」

「そうなんですか。常村先輩同じ理由ですか」

「まあな」

こちらの会話が終わったのを見計らってか司会の人がまた口を開く

『さて、ここで両チームに意気込みをいってもらいましょう！』

ということで俺にマイクが渡される

「えーっと、紹介していただいた山崎です。先ほど僕がAクラス並みの点数を・・・と紹介されましたが、最初からそんな点数が良かったわけではありません。すべてはこの試験召喚があつたからこそです。二年生でFクラスになり少しさびしい環境の中学校生活を送ることにしました。ですが、そのため他クラスとの競争心が生まれて一生懸命勉強したのです。だから僕はこの学園に入って本当に

良かったと思います。この場ではこの学園でこれまで学んできた成果を発揮したいと思います。」

『はい、ありがとうございます。では、3年生組みもよろしくお願いします』

常夏コンビも話し始めるが興味がないので聞き流しておこう。

（慶太、さっき言ってたことって嘘だね？）

（当たり前だろ。ここは学校のPRをして学園長に恩を売っとくんだよ）

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

「「「サモン」」」

4人が掛け声を上げそれぞれの分身が呼び出された。
向こうの装備はオーソドックスな剣と鎧。

さすがはAクラス。
それなりの召喚獣だ。

『Aクラス 常村勇作 & 夏川俊平
世界史 219点 203点』

だてにAクラスじゃないな。

「どうした？俺たちの点数を見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もない」

先輩たちは誇らしげにディスプレイを示す。
すると明久が口を開く。

「・・・前に」

「あん？」

「前にクラスの子が言っていた」

「なんだ？晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？

「『好きな人の為なら頑張れる』って」

「だよな、明久！」

「ハア？コイツら何言ってるんだか」

「・・・僕も最近、心からそう思った」

『Fクラス 山崎慶太 & Fクラス 吉井明久

日本史 1021点 201点』

「「なっ!？」」

「アンタらは全力全開でぶったおしてやる!!」

「明久、点数かなりあがってるな。まあ俺の教え方が良かったおかげだな」

「うん。今回は本当に感謝してるよ。雄二だけじゃこつはならなかったからね」

「よし、じゃあ一対一でやるぞ。俺が一人で倒しても面白くないだろ？」

「そうだね。僕も自分の力で倒したいからね」

俺は召喚獣をモヒカン先輩に狙いを定める。

「クツ、こつちにきやがった。夏川援護しろよ」

モヒカン先輩が坊主先輩に助けを頼むが……「そうはさせないよ！」

そこに明久の召喚獣が割り込んだ。

明久Side

慶太の言うとおり一対一に持ち込めた。

「お前、いつの間にそんな点数を!？」

明らかに坊主先輩が動揺している

「さっき言ったとおり頑張ったんですよ。慶太の協力がなかったらここまでには行かなかったけどね」

こう話している間にも僕は召喚獣を操作していた。

「だがな、お前の知らない戦い方があるんだよ」

なに?! まさか、僕ら二年生では知らない特殊な力があるのか? 相手が何をしてくるかわからないうちはとり合えず牽制しないと。

「いけっ!」

僕の召喚獣を敵に向かっては知らせる。

僕の立ちいちからも離れた場所での戦闘になるけどそれは向こうも同じ……

「そら、引つかかった」

いきなり目の中に飛び込んでくる異物。これは……砂利!? 目潰しか!

「これが経験の差ってやつだ」

マズイ! 敵の攻撃がやってくる!

「明久! 召喚獣をしゃがませろ!!」

まだ目の見えない中聞こえてきた声に素直に従い召喚獣をしゃがませた。

「そのまま前に突け!!」

またもや聞こえてきた信頼できる声。
僕は言うとおりに召喚獣を動かした。

「あたれええっ!!」

・・・ようやく視界が晴れた

「よくやったぞ、明久」

慶太Side

『山崎・吉井ペアの勝利です。』

一対一に持ち込んですぐ俺は圧倒的にモヒカン先輩の召喚獣を倒してやった。

そのあと明久が視界を失っていて様なので少し助けてやった。
決勝戦にしては楽な戦いだったな。

そのあとは授賞式と簡単なデモンストレーションをし皆の祝福を受けて落ち着いたところでまた店のほうに精を出した。
こっちもサボってられないからな。

そして・・・『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

俺が厨房の片づけを終えたとき雄二から電話がかかってくる

「もしもし、どうしたんだ雄二？」

「今すぐ常夏コンビを探してくれ！！ババアとの会話が盗聴されしまったんだ」

「わかった。すぐに行く」

電話を切る。

何を盗聴されてたのか知らないがとにかくまずいことらしいな。

俺が廊下を走っていると明久と雄二と出会う

「どうだ、慶太？」

「まだ見つかってない。・・・いや、ちょっと待てよ。放送室は行ったか？」

「うん。でもアダルトDVDしかみつからなかったよ」

「それじゃあやつらは新校舎の屋上だ。あそこには後夜祭用の放送設備がある。」

「そんな！？でもここからじゃ間に合うかどうか・・・そうだった！」

明久がなにか思いついたようだな。

「やっぱりお前も考えたか。じゃあやるぞ。慶太は見ていてくれ。アウエイクン」

俺が必要ないと思い雄二にあげた白銀の腕輪が起動する。

そして物を触れる明久の召喚獣が後夜祭の締めに使うはずだった打ち上げハナビを新校舎屋上に投げつける。

ハナビは見事命中し放送機材を破壊していった。

「これはいい考えだな、二人とも。だけどそろそろやめたほうがいいと思うよ……」

「え、なんで……」

「貴様らあつ！何をやっているかあつ！」

「うわあつ」

突然背後からのドスの利いた声が。

ああゝあ。

これはやばい。

今の声で明久の召喚獣の制御が乱れハナビが見事校舎の一角に激突した。

「雄二、これはやばいよね……」

「ああ、やばいぞ」

「二人ともそんなこといつてないで逃げるぞ。鉄人が来た！」

「吉井に坂本おっ！それに山崎もか！貴様ら無事に帰ることができると思うなよ！」

「逃げるぞ、明久、慶太。」

「逃がすか！今日は絶対帰らせん！」

このままじゃ3人とも捕まっちゃう。

「ここは二手に分かれるぞ。俺と雄二はこっちで明久はあっちだ。
・あ、明久すまん」

分かれ道に迫り俺は雄二を引っ張り明久とは逆方向に。

その際明久を転ばせる。

これで鉄人は転んで距離の短くなった明久のほうに行くだろう。

「たすかった、慶太」

「明久には悪いがこれが最善の策だ。」

後日

あのあとは結局逃げ切れず3人ともばこられた。

優等生として学校生活を送ってきた俺としては初めての失敗だ。

だがお店の売り上げもよく姫路のお父さんへの説得も成功したようなのですべては一件落着だ。

そして俺はまた優子とのラブラブ生活を満喫しよう。

第十四問（前書き）

遅れました
すみません。

第十四問

問 次の問に答えよ

『織田信長の朝倉攻めで同盟を組んでいる浅井に嫁いだ（浅井とは同盟関係、織田とは婚姻関係）信長の妹・市が浅井の裏切りを信長に知らせるために（ ）を入れて上下を縛った袋を陣中見舞いとして送った。このことによつて信長は浅井を裏切ったという有名な逸話がある。

（ ）に入る言葉を述べよ。』

山崎慶太の答え

『小豆』

教師のコメント

山崎君には簡単すぎたでしょうか

姫路瑞希の答え

『小豆に薄いアンモニア水を混ぜる。味は悪くないと思うがその異臭で浅井の攻撃意志を伝える。』

教師のコメント

味はかぎりなく悪いでしょう。

土屋康太の答え

『黒豆』

教師のコメント

少し惜しいですね

吉井明久の答え

『凶暴な犬』

教師のコメント

確かに敵意を表せるかもしれませんが違います

今日から俺たち文月学園生徒は夏合宿に行くのだ。
だが、昨日のホームルーム・・・

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、大体のことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだ」

「先生、質問」

気になることがあるので質問。

しおりを見ればわかるんだろうが面倒だ。

「なんだ、山崎。しおりを見ればだいたいはわかるといったろ」

「正直めんどいので。えーと優子と一緒に勉強できるんですか？」

「まったく、お前ははつきり言うな。まあAクラスとの合同授業はあるぞ」

やった！それなら真面目にやる

「でだ、集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように。特に他のクラスとは違うので間違えるなよ」

やっぱり優子とは違うのか・・・

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは・・・現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ！？』『』』

ははは、ここまで酷いとは・・・

ということがあり大変面倒な方法でいく羽目になった。

優子が一緒に行きたいというがこれはしょうがないだろう。

そして今はバスの中。

なぜバスかって？

それは俺が借りたからだ。

俺の家は親が結構有名な学者なのでお金も結構ある。

なのでどうせ長旅なのでいつものメンバーで貸し切りバスで楽しく行こうと思ったのだ。

「でも本当にありがたいわよね」

「本当にありがとうございます。山崎君」

「別にいいって。こっちのほう楽しいだろうし、快適だ」

自慢じゃないがクーラー、ドリンクバー、おやつとサービスも充実している。

他のFクラス皆には悪いがな・・・

「慶太、慶太っ、これ食べていいの？」

「お、おう。別にいいけど」

「明久、お前、はしやぎすぎだぞ」

テンションがあがっている明久を雄二が制す

「だって雄二。いつも食べられないような豪華なお菓子があるんだよ。はしやがないほうがおかしいよ」

「そうじゃのう。それより島田。先ほどから読んでいるその本はなんじゃ？」

姫路と並んで座っている島田に秀吉が質問する。

「ん、これ？これは心理テストの本。100円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの。」

「へえ〜。面白そうだね。美波、僕にその問題出してよ」

その会話に明久が飛びつく
さつきからやたらテンションが高いなあ。

「うん。いいわよ」

「それなら皆でやろうよ」

というわけで車酔いをしている康太を除く皆でやることになった。

「じゃあいくわね。『1から10の数字で今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つあげてください』だって。どう？」

「俺は5・6だな。」と雄二

「ワシは2・7じゃな」と秀吉

「僕は1・4かな」と明久

「私は3・9です」と姫路

「俺は1・5だ」

俺たちが番号を言うと島田が指をさして

「クールでシニカル」↓雄二

「落ち着いた常識人」↓秀吉

「死になさい」↓明久

「温厚で慎重」↓姫路

「将来大物になる」↓俺

大物って父さんみたいのかな・・・

（前にも言ったが父さんは世界で有名な歴史学者でテレビでもバラエティや歴史者、時代劇の資料参考など様々な場面で活躍している）

「みんな結構当たってるのう」

「山崎君が大物になるって楽しみですね」

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない顔だつて。』」

そしてまた島田が指をさして

「公平で優しい人」↓雄二

「色香の強い人」↓秀吉

「むごたらしく死になさい」↓明久

「意志の強い人」↓姫路

「がんばる人」↓俺

ちよ、俺だけなんか大雑把・・・まあ明久よりましか。とにかく続けて心理テストを何問かやっていた。それぞれの問題でみんなで盛り上がる。

やっぱり皆で楽しく会話するのは楽しいなあ。
これが青春なのか・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・（トントン）」

不意に肩をたたかれた。

「お、康太。起きたのか。おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

「・・・・・・・・空腹で目が覚めた」

「たしかにもうこんな時間だな」

携帯電話で時計を見ると現在時刻は1時15分。
俺も腹が減ってきたな。

「あ、お昼ですね。それなら・・・・実はお弁当を作ってきたんです。良かったら・・・」

と、姫路が傍らに置いてあるかばんを手繰り寄せてなかから大きな弁当箱取り出した。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ。」

「俺もなんだ。ごめんな姫路」

「すまぬ。ワシも慶太につく手もらってるのじゃ。」

「・・・・・・・・調達済み」

ああ、そういうことか。

俺は姫路の弁当のことをすっかり忘れていたんだが雄二たちはしっかり自衛策を用意していたようだ。

残る明久は・・・・

「ごめん。実は僕もこうして惣菜のパンを」

明久が鞆から惣菜パンを取り出す。
が・・・・

「おっと、手が滑った（パシッ）」

「・・・・・・・・足が滑った（グシャッ）」

雄二と康太も見事な連携でパンがグシャグシャになる。

だが、明久はまだ諦めてないようだ。

「あははは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末に・・・・」
と、これはもう食べれないな。これは俺が責任をもって片付けてお
こう」

といい俺はパンをバスにしているゴミ箱に捨てた。

「慶太まで・・・・そんな」

「よかったな、明久。ありがたく姫路のを分けてもらえ」

「あ、はい。明久君、どうぞ。」

「（明久、もうここは食べるしかないだろう。ここで断ったら大好きな姫路が悲しむぞ）」

「（・・・そうだね。しょうがないか・・・）」

俺が明久の耳元で説得した。
すると明久は諦めたようだ。

「じゃあ、姫路さん。ありがたくいただくよ。」

そういつて明久が玉子焼きを割り箸でとり・・・俺のほうに持ってくる！？

の、ぐわあゝ

・
・
・
・
・
俺が気付くとそこは見知らぬ部屋だった。

第十五問

「ん．．．ここは？」

俺が知らない部屋。

おそらくここは合宿所だろ。

「慶太、起きたか！よかったのう」

「秀吉．．．ここは合宿所か？」

俺の前には秀吉、明久、雄二がいた。

「そうだぜ。お前はあのあとからずっと眠ったままだったんぞ」

「そうだよ、慶太。僕らが担いで連れてきてあげたんだよ」

．．．明久、お前．．．

「明久、お前は俺に何をしたか．．．覚えてないのか!!」

とりあえず殴つといた。

さきほどまで優子が看病してくれてたのだが先生に見つかり部屋に戻されてしまったらしい。

ガチャッ

「．．．．．ただいま」

「お帰り、康太。どこ行つてたんだ？」

「……慶太。無事でなにより。……情報を集めてた」

康太の情報とは……先日起こつた明久の盗撮と雄二の盗聴についてのことらしい

その犯人は同一人物らしく女生徒でお尻に火傷の痕があるらしい

「それにしてもしりに火傷とは……どうやって見つけるのじゃ」

「そうだな。俺も協力してあげたいが……どうすれば……」

ドバン！！

「全員手を頭の後ろで組んで伏せなさい！」

すごい勢いで俺たちの部屋に島田を先頭に女子ぞろぞろ入ってきた。

「な、何事じゃ！？」

「木下はこつちへ！そつちのバカ3人と山崎は抵抗をやめなさい！」

「仰々しくぞろぞろと、一体何のまねだ」

そうだ！明久たちはともかく俺は何もしていないはずだ！！

「よくまあ、そんなシラを切れるわね。わかつてるのよ。女子風呂にカメラとマイクを仕掛けたのは」

「そうか、この3人がバカなことやってすまないな」

とり合えず謝っておこう

「何言ってるの。山崎も犯人の一人よ」

「は！？俺は何も！じゃあ、秀吉は？」

「木下は秀吉でしょ。関係ないわ」

マジかよ……ん、そうだ！

「そうだ！優子も俺たちを疑ってるのか！？」

「……優子は疑ってない。吉井たちはともかく山崎のことは完全に信用してた。でも私たちは信じられない」

俺の間には霧島が答えてくれた。

それにしてもさすが優子だ。

大好きだぞ！

「でもあなたたち4人はとても仲がいい。山崎がつるまないはずないわ。」

これはC組代表の小山

「そうです。いくら優子ちゃんのこと大好きだからって……」

「……さすがに大勢の女子の裸に興味がないわけないわ！」

姫路は途中で恥ずかしくなったのか、途中で島田が言葉を続けた。

この間にも雄二は霧島に、明久たちは島田や姫路に拷問を受けていた。

「じゃあ、山崎君もこれをどうぞ」

明久たちと同様に俺にも重石がのせられる。
くっ

こんなものに負けられん！優子との再会を果たすまでは！

「上等じゃねえか！」

女子勢が去ると雄二が怒りとともに叫ぶ。

「まあ怒りはわくな。ここまであんなことされたらな。で、雄二、どうするんだ？」

「話を聞くと俺と明久を脅している犯人は同じで女子風呂にカメラを置いたやつは同一人物だった。そして覗き犯は火傷の痕がある。これでもう迷う余地はない。本当に覗きに行くぞ」

「そうだね。僕もこのままじゃ引き下がれないよ。いこう！」

「そ、そうとなれば、すぐにでも向かわねば風呂の時間が終わってしまうぞ！」

「……………（コクコク）」

秀吉も康太も、もちろん俺も協力する

「俺も友人のために協力するぜ」

「・・・・・・・・女子風呂の場所なら確認済み・・・・・・・・後半
組みの入浴時間、残り40分」

あさが、康太。
詳しすぎるぜ

「時間がないね。急ごう」

「そうだな。はしるか」

「了解じゃ」

「おう。」

あえて何もはかずに廊下を走る
もちろん音を立てないためだ。
そしていまは男女とも入浴時間。
人はいない

「・・・・・・・・この階段を下りて、しばらく廊下を進めば女子風呂」

康太の言うとおりに階段を駆け下りる
しかし俺たちの前にある男が立ちふさがる

「君たち止まりなさい。更衣室にカメラが設置されていたと聞いた
からまさかと思ってきてみたら本当に覗きに來るとは」

その男とは化学教師の布施先生だ。

「雄二、どうする！？布施先生だよ」

「かまわん。ぶちのめせ！」

ということで俺も突っ込む

「この前の補修の恨みだあ！」

わかってるよ・・・自分のせいなのは・・・だってキセキだよ
0点ならまだしも・・・っと嫌なことは思い出さないでおう

「ひいいいつ、さ、サモン」

教師も召喚獣を使えることは知っていたけど明久みたいに物も触れるなんて・・・結構厳しくなるな。

「明久と慶太とムツツリー二は先に行け！ここは俺が引き受ける。
秀吉も一緒に頼む」

「わかったぞ！」

ということで走り出そうとする俺たち3人

「ちょっと待て。ちなみに聞くが慶太と明久は化学の点数は何点だ？」

それは聞かないで欲しかったなあ

「僕はあと一点で2桁だった」

「俺は明久のマイナス8点だった。」

「さっさと行け！」

だから点数言いたくなかったんだ。

まあとにかく俺たちは女子風呂に向けてまた走り出した。

「そこで止まれ」

次にきたのは保健体育の大島先生。

同じ道に行く康太にとっては師匠といってもいい存在だ。

だが保健体育の先生に挑めるのはここでは康太じゃない

「康太任せられるか!？」

「もちろん。サモン」

「ふん。いいだろう。サモン！」

よしここは任せよう

「明久行くぞ……」

『	体育教師	大島武	V S	Fクラス	土屋康太	』
	保健体育	663点			424点	

マジかよ……俺じゃないんだし一教科であんな点数が

「まさか、点数操作とか・・・」

「俺たち教師がそんなことするはずないだろう。バカモノが」

「出たな鉄人！」

「やっぱり来ましたね、西村先生。ですが聞きましたよ。先生はこの前の担任入れ換えのゴタゴタで試験を受けていないと。だから今は点数がない。」

「ふん。よく知っているな山崎」

「そっか。じゃあ慶太。ここは僕に任せて先に行つてよ。」

かつこつけやがって、明久め

「そうはいきません。山崎君の相手はこの学年主任のこの高橋洋子です」

わざわざ名前まで言わなくても。

出番が少ないからって張り切りすぎですよ

といつてもこれはきつい

この人は才女だ。

他の先生とも格が違う

「さて、早く終わらせますよ、山崎君。サモン！」

「くそつ。サモン」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 山崎慶太』

総合科目 7791点

3986点

「あら？どうしたの。総合科目なら得意教科でカバーして姫路さんと同じぐらいの点数を取れるあなたがその程度とは」

「・・・ちよつとした事情があるんですよ。」

うん。さっき言った化学とがかなり関係してます。

「とり合えずこれで終わりです。このあとのことは西村先生が指示してくださいでしょう」

こうして俺は本気で戦ったの初めての敗退を喫した。

第十五問（後書き）

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所、何か素敵なことが起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています。

土屋康太の日記

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

山崎慶太の日誌

『みんな楽しく合宿所に向かっていった。皆で食べる昼飯もいいな

とか思っていた。楽しい昼食は始まった・・・けど・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・気付いたら合宿所にきていたんだ。』

教師のコメント

その場に姫路さんがいたんですね。

ご愁傷様です

第十六問（前書き）

ここからちょっとだけオリジナル展開ですね。

第十六問

はつきり言って拗ねていた。

確かに相手は教師。

強いのは明白だけど負けるのは悔しかった。

だから、今優子に膝枕してもらい慰めてもらってる。

「はあ」

強化合宿二日目

今日の予定はAクラスとの合同学習だ。

だから優子と一緒にいられるのである。

しかも基本的には自習だ。

「慶太、忠告しておくけど周りの男子がカッター構えてるよ」

明久が忠告してくれた。

・・・優しいやつだ・・・じゃあ・・・

「じゃあ、俺のたてになってくれ明久。あとは頼んだぞ」

「え、ちょ、それは僕に蜂の巣になれってこと!？」

カッター投げられたぐらいじゃ蜂の巣にはならないと思うぞ。

まあしかし優子に膝枕してもらっていると眠くなってきた。

うん。寝よう

おやすみ。

気持ちよく寝てたのだがおそらく明久のせいで鉄人が怒鳴り込んできたのでしょうがなく起きることにした。

そのあとはちゃんと勉強し（いや、俺は基本真面目君だから）夕食も食べ入浴の時間がやってきた。

今は自室に五人が集まっている状態だ

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど」

「その可能性は高いだろうな」

明久が言うには俺の寝ている間、自習中に工藤が録音機を上手に使っていたらしい。

「……やっぱり女子風呂を覗くしかない」

康太が言うように工藤が犯人であることを確かめるには結局それしかない。

それ以外で確かめるのはいろいろと危険だしな。

「けど、どうしようか？何か作戦を練らないと先生たちのあの警備を突破するのは難しそうだよ」

「作戦というが、あの場所はただの広い一本道じゃったからのう。正面突破しかないと思うぞい」

そうだ。

昨日攻めたときそこは見晴らしのいい一本道だった。何かに隠れて教師の目をくらますのは不可能だろう。

「方法ならある。仲間を増やす。こうすれば俺たち五人で行くより

断然勝機がある」

「確かにそうだな。で、その仲間はとうするんだ？もう風呂の時間になるよ」

「安心しろ。夕飯時にすでに声はかけてある。そろそろ来るはずだ」

タイミングよくノックの音が聞こえてくる
部屋にはFクラス男子全員が入ってきた。
そして雄二が口を開く

「よくきてくれた。実は皆に提案がある」

『提案？』

『今度は何だよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』
『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

「……皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ！！！！』』』

くいつきが半端ないです

「俺たちは昨日女子風呂の覗きに行ったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ。」

『ふむ、それで？』

「そこで風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られるアガルタの光景だ。どうだ？」

『『乗った!!!』』

さすが

思ってたとおりだ。

今の時間は20時10分

よし、俺も行くとするかな

ピロピロピロ

携帯の着信音が鳴る

これはメールだが……母さんか。

めったにメールなんてしないのにどうしたんだろう。

「件名：至急

お父さんが現場でちょっとした事故で怪我をしました。

とりあえず病院まで来てちょうだい。

渡したい資料もあるそうよ

」

マジかよ……こんなときに。

「慶太、お前は秀吉と一緒にC班を率いてくれ……」

「雄二すまん。俺は一次帰宅だ。親父が怪我して入院したそうだから一回帰ってこいと命令が来た。」

「そうか。貴重な戦力だったかしょうがない。早く行ってあげろ」

ありがとう。雄二

でも大丈夫かなあ・・・いや、今日の戦力じゃ無理だな。
おそらく昨日よりもあちらも戦力が増えているだろうし

とり合えず専用バスで帰ることに

あ、優子に電話しておこ

バスに乗り込んだあと電話をする。

「優子、俺だけど」

「慶太、どうしたの？」

「えーっと、今何してる？」

一応聞いておこう

「今からお風呂に入るところだよ。着替えてたところ」

やっぱりかあ。

まあ大丈夫だろ。

あいつらがたどり着くことはないな

「そうか。でさあ俺今から病院行かなくちゃいけないてさ」

「え！？どうしたの？怪我したの！？大丈夫！？」

「怪我したのは俺じゃなくて親父なんだ。発掘中に怪我したみたい
で帰ってこいってメールが着たんだ。」

「私もいくよ。慶太のお父さん心配だから」

「大丈夫だよ。怪我はたいしたことないみたいだし。本当は理由は新しい資料についてだろうから。優子はちゃんと勉強してて」

「わかった。いつごろ帰ってこれるの？」

「そうだな。最終日の朝にはこっちに絶対来てると思うよ。」

「そっかあ。お父さんのことも心配だけど。寂しいから慶太、早く帰ってきてね」

「わかってるよ。帰ってきたらすぐに会いに行くよ。じゃあバイバイ」

「うん。バイバイ」

よし。

資料もらってできるだけ早く帰ってくるぞ。

待ってるよ。優子

とりあえず病院まで寝てこつ。

じゃ、おやすみ

第十六問（後書き）

問題は今回なしということでは……けっして面倒だったとかじゃあないですよ

第十七問（前書き）

3 巻はこれで終わりですね
日本史の先生が良くわからなかったのでオリジナルにしておきました

第十七問

以下の問に答えなさい

『観測者Aが速度 v で走っていると、正面から周波数 f の音を發した v' で走行してる救急車がやってきた。音速を v としたとき、観測者にどのようなことが起きるかを書きなさい。また、その現象の名称も併せて答えなさい』

吉井明久の答え

『観測者Aが速度 v' + v で撥ねられる。

現象の名称・・・交通事故』

教師のコメント

きちんと相対速度を補正しているあたりが腹立たしいです。

山崎慶太の答え

『観測者Aは速度 $v \parallel v_2$ ガンダムに乗っていることから光の翼の生み出す超高速移動により周りを破壊していくであろう。

現象の名称・・・ v の字の残像を残して消えた』

教師のコメント

先生はガンダムシリーズで v ガンダムが一番好きです

現在時刻朝の7時30分

とり合えず病院に到着。
さあ。さつさと用事を済ませて帰るぞ。

受付の人に部屋を聞き向かう。

「ここだな……」

入るとそこは一人用の部屋だった。
そしてベッドには足を吊った親父、隣に椅子に座っている母さんがいた

「お、来たか。慶太。」

「お、来たか……。じゃねえよ。何やってんだよ親父」

「ははは。熱中しすぎてな。上から落ちてきたことに気付くのが遅れてしまったんだよ。」

詳しく聞くと父さんの古い友人が偶然見つけた洞穴を搜索していてその奥に壁画があったらしいんだ。写真を撮っているといきなり天井が崩れてきて逃げようとしたが足を挟まれたというわけだ。

「で、写真は無事なのか？」

「ちょっと慶太。お父さんの心配もしてあげなさいよ」

「ははは。いいんだよ、さすが私の息子だ……。ほれ。これが壁画の写真だ。」

そういつて写真を渡してきたので受け取る。

かな文字が書かれていることから平安以降のものだと思われるが書いてある絵がそれ以降のものとまったく違うものだった。

「こんなものがあつたのか……。なあ、親父……」

ここから俺と父さんの熱き討論が始まった。

12時間後

はあ……。あの写真のこと以外についても父さんの新しい研究資料があり丸半日話し込んでいた。

ほんとに最終日の朝にあっち着くじゃん。

母さんが買ってきたコンビニのおにぎりを食べながらバスに乗り込む。

そして夕食を食べおいたらまたん眠りについた。

やばいぞ……。これは非常にヤバイ……。

現在時刻午後7時……。渋滞に引っかかりました。

朝から一直線に合宿所まで向かっていたんだがなぜか急にこみだし
てほぼ動かなくなった状況で……。

俺や明久たちの覗き疑惑を晴らすため8時の入浴時間に間に合わない
くてはならないのに

~~~~~

明久からの電話だ。

「慶太。まだつかないの！？早くしないと入浴時間が始まっちゃうよ」

「わかってるけど渋滞から抜けられないんだよ。できるだけ急ぐから待ってる」

「うん。急いでね」

明久も興奮？しているようだ  
いや、とにかく急がねば

やっかついた。

もう時刻は8時を過ぎている  
すでに戦闘の音が聞こえていた。  
俺も一目散に女湯に向かう。

「山崎！」

皆が戦っている中を走っていると一人のクラスメイトが俺の名を呼ぶ

「須川か。大丈夫か？」

「おう、なんとかな。それよりおそかったじゃねえか。早く前線に行け。お前は重要な戦力だ。」

「わかった。お前も……」

「その男子！通さないわよ！！」

須川とともに走り出そうとしたとき、記憶によるとDクラスの女子が立ちふさがった。

「くつ。行け！山崎。お前はこんなところで立ち止まってるやつじゃないだろ！」

「……すまん。須川！」

須川を残してまた走る。  
すでに点数を浪費していた須川に勝ち目はないだろう。

「雄二、大丈夫か」

前を見るとそこには雄二と高橋女史が相対していた。

「やっときたか、慶太。」

「すまない。俺も手伝うよ。」

俺を倒した因縁の高橋女史だ。  
雄二だけじゃ勝ち目がない。

「いや。お前は前に進め。こいつは俺が足止めする。……進め慶太！」

「そうはせませんよ。山崎君の相手は私がさせてもらいますわよ」

「な！？キャメロン先生！？」

この綺麗な外国人の女性はルイス・キャメロンといい最近、急遽文月学園にきた日本史の先生だ。

え？なぜ外国の人なのにこんなに日本語がうまくて日本史の先生か  
つて？

それはこの人日本オタクなんです。

よくいるでしょ？テレビとかで出てる日本のことを日本人より知ってる人。

それがこの人で今、日本史の先生をやってる

「キャメロン先生はこの合宿にはきていないはずじゃ・・・」

「本当そうなのですが、男の子たちがこんな騒ぎを起こしたということで急遽呼ばれたんですよ。」

「いや。まてよ・・・先生は最近来ただけだから西村先生同様な点数がないはずじゃ。」

「今日のために受けてきました。」

「くそ。やるしかないってことですか。サモン！」

「いくら山崎君が日本史が好きだからといって教師になってるわたくしには勝てませんよ、。しかも高橋先生からいつもより総合得点  
が低いと聞きました。だからあなたの点数はいつもより低い。ますます勝率が下がりましたねサモン！」

自信満々に召喚獣を呼び出すキャメロン先生  
だけど、俺には勝てませんよ

『日本史教師 ルイス・キャメロン VS Fクラス 山崎慶太

日本史 579点

103

6点 』

「え．．．．わたくしの倍近くも．．．．」

「先生。俺を甘く見すぎですよ。先生が来る前は俺に日本史で勝てる人はいないという伝説があつたんですよ。もちろん教師もです。そしてその伝説は今も現在進行中です。あと総合得点が低かったのはただ理数系がほぼ0点に近かつたからです。日本史は逆に過去最高点ですよ。」

俺は召喚獣をゆっくりと歩かせる。

右手に持つランスを相手に向ける。

はつきりいつて点数が互角でも俺には勝つ自信があつた。

先生はまだ文月学園に来て少ししか経っていない。だから召喚獣の動かし方など他の先生に習っていても実践を經ていないキャメロン先生に俺を倒すことはできないさ。

「．．．．わたくしが日本の知識で負けるなんて．．．．そんな．．．．」

「坊やだからさ」

先生の召喚獣が向かってくる

初心者らしい単調の動き。

武器は2本の赤い槍（どこぞの親方様〜とか叫んでいるやつ）

なのだがそれを2本まとめて振り下ろしてくる。

「見える、見えるぞ！」

余裕で右に移動しそれを避けランスで召喚獣のわき腹をさす。  
まだわずかに点数が残っているようだ

「先生。君はいい先生だった。しかし、君の上司が悪いのだよ。こんな召喚獣初心者を戦場に呼び出すなんて。」

そして、また先生の召喚獣がこちらに突っ込んでくる。

「フン……撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだ！」

今度は真正面からランスで一突き。  
これで先生の点数は0点になった。

「それでは、先生」

キャメロン先生を撃破し廊下を走る。

康太が大島先生と工藤を相手に戦っていたが、さすが康太だ。  
圧倒的だった。

そして最後の砦。

西村先生とは明久が戦っている。

「明久！」

「慶太……やっと来たんだね」

明久の体はすでにぼろぼろだ。

召喚獣へのダメージが自信にフィードバックするというやっかいな能力が観察処分者の明久にはついている。

常人離れた西村先生のこぶしですでにかなりのダメージを受けているのだろう

「慶太。僕が隙を作るから鉄人を超えて先に女子風呂に行つて。」

確かに少しの隙さえあれば俺の身体能力で西村先生を抜けることはできる。

「わかった。だが気をつけろよ」

「大丈夫だよ。ダブル!!」

明久が前の召喚大会の優勝の景品としてもらった腕輪。  
これで召喚獣を2体呼び出せる。

「行け!!」

明久の召喚獣2体がうまく先生をひきつけている間に横を走りぬけ  
女子風呂に到達する。

「ここが女子風呂だな・・・よし」

一応ノックしてはいる

中に見えたのは一人の女子生徒が体を拭いているところだ。

「け、慶太!?!どうしてここに」

そこに優子以外の女子がいないことを確認してそばに行く

「知つてのとおり俺は除きの疑いをかけられている。だけど俺たちは本当はそんなことしてない」

「うん。わかってるよ。慶太がそんなことするはずないよ」

「ありがとう、優子。でも他の女子は信じていない。そして今ここにまだもう一つ隠しカメラが置いてあるらしい。俺たちはそれを見つけて罪を晴らそうとしてるんだ」

「わかった。私も一緒に探すよ」

俺と優子が探そうとしたとき一人の女性が風呂場からこの脱衣所にはいつてきた

「お、おい。なんでお前がここにいるんだ。老人の裸なんて見に来たのかい!？」

最悪だ・・・学園長登場。

「だれがそんなせみの抜け殻みたいのをみたがるか!!」

とりあえず先ほど優子に話したことを学園長にも話す。

「そういうことかい・・・」

なんとか納得してもらえたらしい

「慶太ー。カメラ見つけたよー」

「ありがとう優子……じゃあ……」

優子からつけとったカメラを地面にたたきつけ、中のテープごと破壊した。

「ほう。躊躇なく同級生の女子の裸が映っているテープを壊すとはなかなかすごい男だねえ」

「俺、優子にしか興味ないから……でももうすぐ既に覗くことしか眼中にないやつらがここになだれ込んできます。俺が止めますから俺だけ停学処分はなしにしてくださいませんか？」

風呂場の中にはまだ数名女子がいるが優子に脱衣所には出てこないようにと言ってもらっている。

優子も一緒に中にいらった。

あと停学処分は……まあこれだけのことをしたんだ。それぐらいは当然だろ。

「私を脅すかい……まあいいだろう。見事止めたらお前だけお咎めなしだ。」

「先生。教科は日本史でお願いします。」

「わかったよ。」

しばらくして脱衣所の扉が開く。  
雄二を先頭に男子が入ってくる。

「慶太。待つてくれたんだね。じゃあ皆で行こう理想郷へ！」

「・・・ハハッ。ハハハハ。間違っている。間違っているぞ明久！！今この風呂には優子が入っている。おれがここを通すわけないだろ！！」

「慶太、俺たちを裏切るのか！！」

「当たり前だ！優子の裸は誰にも見せん！！サモン！！！！」

「やるしかないようだね・・・サモン」

明久に続いて次々と召喚獣が出てくる。

「みんな、行くぞー！！」

「遅い」

リングの効果を発動。

入り口でかたまっていた召喚獣をいつきに焼き払った。

すでに消耗しているみんなの召喚獣は瞬く間に点数がなくなっていた。

次の週

優子と一緒に登校

うん。最高だ。

「おはようございます。優子ちゃん。山崎君。」

「おはよう。優子に山崎」

廊下を歩いていると姫路と島田と出会う

「おはよう。二人とも。今日もいい天気ね」

「はい。教室は寂しいですけどね」

「確かにそうね。Fクラスはたった3人だしね。」

そう、俺以外の男子は一週間の停学処分だ。

「慶太、今日はAクラスも空きが多いから今日はこっちでお昼食べよう。瑞希と美波も一緒に食べよ」

「はい」

「うん。じゃあお邪魔させてもらっわね」

今思ったけどこれって俺、ハーレムじゃね？  
まあ気にしない。

俺は優子にしか興味ないから

## 第十七問（後書き）

おかげさまPV10万突破しました。ユニークは1万5000です。という事で何かオリジナル話でも書こうと思ってます。なにかご要望があればなんでもおっしゃってください。これから更新はのろいですががんばっていきますのでよろしくお願いします

## 特別問題（前書き）

オリジナル話です。

## 特別問題

### 問題

二つのものが、天と地<sup>へだ</sup>ほども隔たっているということわざをなんと  
いうか

姫路瑞希の答え

『雲泥の差』

教師のコメント

正解です。そこまで難しくはなかったですね

山崎慶太の答え

『雲泥の差                      別解・・・俺の日本史と化学の点数の差』

教師のコメント

そんな別解を堂々と書かないでください。

合宿から帰ってきてから初めての登校日。

俺以外の2年男子全員が一週間停学処分なので秀吉は俺の家でお留守番。

まあ、それで優子と二人で登校。

途中で姫路と島田と会い、昼は皆Aクラスで食べようという話を  
して、現在Fクラスにいるという状況だ。

「ほんとに男子たちがいないと静かねえ」

「・・・明久君たちがないのも寂しいですけど教室に3人だけなのもおかしな感じがしますね。」

「ほんとだよ。まったく……明久たちもバカなことをしたぜ」

「山崎！あんたも一緒にやってたんだからね」

島田。

俺は……まあ、確かに否定はできないが

ガラガラ

教室の扉が開く

そして、俺たちの担任の西村先生が入ってきて、教卓の前に立つ。

おかしいな

まだ時間じゃないのにもう来たよ。

「まあ、知っての通り合宿の件で山崎以外の男子は一週間の停学処分なわけだ。そこでだ・・・Fクラスはもともと男子が多いことから現在お前ら3人しかない。だから特別に今週はAクラスで合同授業を行うことになった。」

「はい」

「えっ！？Aクラスって！？」

「よっしゃ――！！！！！！」

個々同じ反応をする。

姫路はまあ普通の態度をとる。

姫路にとってはAクラスでの授業の方が自分のためにもいいだろう。島田は数学だけならなんとかついていけるだろうが他はついていけないだろうからな。

まあ、俺は理数系はまったくだめだが優子と一緒に勉強できるので最高だ。

「先生！瑞希や山崎は大丈夫かもしれないけど私がAクラスじゃないっていけないですよ」

「確かそうかもしれないが一週間頑張ってくれ。姫路たちと他のクラスで授業を受けるより姫路たちと一緒にの方がいいだろうという先生たちの配慮だ。」

「はい」

「あと山崎」

ん？なんだよ先生  
早くAクラスに行つて優子と一緒に勉強を・・・

「木下のとなりで授業を受けようと思っているなら諦める。席は3人とも空いてる後ろの席に座ってもらうからな。」

「ちよつ、そんな」

最悪だ

なんで優子と同じ教室にいるのに離れてなくちゃいけないんだよ。

「それでは移動しろ」

くそっ！しょうがない

ずっとFクラスにいるよりかマシか

Aクラスにやってきた。

いまさらだけどやっぱり広いなあ

「来ましたね。それでは後ろの席に座ってください。」

Aクラスでも今回のことを説明しているところだったらしい。  
説明してるのは2年の学年主任兼Aクラス担任の高橋先生だ。

・・・俺に敗北という悔しさを味合わせた張本人だ。

ああ！マジで悔しい。

しかし、ここは先生の言うことを聞いて指定された席に着く

そしてそのまま授業が始まるので優子のところには行けなかった。  
こんなの生き地獄だ！

一時間目は英語

たしか遠藤先生のはずだ。

まああの人はさほどきびしくないしいつか。

「さあ、授業を始めるぞ。今日は遠藤先生が別件ではずしているの

で俺がビシビシ授業をするぞ。」

「最悪だ〜」

「なにが最悪だ、山崎。ここは本来はお前が来ていたはずの教室だ。設備だってFクラスより全然いいのだから嬉しいはずだろう」

いや。俺が言いたいのは設備ではなくあなたのことですよ。  
俺も理数科目では沢山先生の地獄の補修を受けましたから。  
今回は普通の授業だからって既に先生の補修の厳しさが俺の体に刻み込まれてるので拒否反応が……

キンコンカンコンコン

なんとか授業が終わった。

姫路はいつもどおり真面目に授業を受けていた。

島田も英語ならドイツ語と似ているの部分があるのでなんとかついていっているようだった  
というわけで……「ゆーこー」

「あ、慶太ー」

俺の呼びかけに優子が答えてくれた。

すぐさま優子の下へ行こうとしたとき……

「木下、高橋先生が授業が終わったら職員室に来てくれといっていたぞ」

ツバタ！

「大丈夫、慶太!？」

倒れた俺に優子が駆けつけてくれた。

「先生!なぜ俺と優子をそこまで離そうとするんですか!？」

「別にそういう意図は最初からないぞ。まあ確かに生活指導としてはそろそろ行き過ぎたお前と木下の関係について話さないといけない。よし、昼休みは生徒指導室できっちり話し合おう。木下のほうは高橋先生に言っておくからな」

「ちょ、先生。俺はともかく優子はよしてください。」

「むう、しょうがないな。ではお前だけにするか。昼休憩全部使うから弁当もってこいよ」

「そ、そんな。俺と優子の昼ご飯が」

そんなこんなで二時間目

「では授業を始めますよ。」

日本史のキャメロン先生だ。

日本史ということとやる気が出るけど学校で習うことは全部知っているんだよな。

「最悪だわ」

「そう落ち込むなって、島田。文字を記号だと思って覚えろ」

「こんなに多いのに無理よー」

と島田と話していると

「山崎君うるさいですよ。ということで問題です。」

おい！それだけでいきなり問題って。

しかも俺だけ

「ヤマト政権が中央、地方の豪族を支配下に組み入れるために作った政治的身分制度は何か。」

「氏姓制度」

「ちっ……それでは授業を始めます」

絶対この人この前のことを根に持ってるよ

キンコーンカーンコーン

今日最後の授業が終わった。

え？いつのまにそんなに時間が過ぎたかって？

それはどの休憩時間も俺や優子に何らかの用事がいりあえなかったからだあああ！！！！

あえなかったところなんてつまらないだろ？いや、つまらないさ。

しかし、まあ今は下校中。

優子と一緒にだ。

ああ幸せ。

あ、でも二人だけじゃない。霧島、工藤、島田に姫路も一緒に。ハーレムが羨ましい？

だから俺は優子にしか興味ないって

『~~~~~』

電話だ。

誰かと思つて携帯のディスプレイを見ると秀吉だった。

「もしもし、どうかしたか、秀吉？」

「それがのう、今日慶太の家で明久と雄二とムツツリー二とゲームをしてたんだがのう」

「さて。まずなんで俺の家なんだ」

秀吉は住んでも同然だからいいんだが一応家主に許可とろうよ・

「それはまあ、いろいろとあつてじゃな、ここからがもんだいなんじゃ」

「どうした？」

「明久たちがこのままここにいれば慶太の料理を食べられるのではと思ひまだ居座るといつておるのじゃ」

まったくあいつらつてやつらは……

「しょうがないなあ。じゃあ今日は人数多いから焼き焼きにするか」

「それはいいのう。では待っておるぞ」

はあ、じゃあ買い物に行くか。

「みんな、今日俺の家ですき焼きするんだけどこないか？」

「こんなに大勢でまたいつでもいいんですか？」

「問題ないぞ。明久たちもいるから。もちろん雄二も」

「……山崎、行かせてもらおう」

「じゃあ私も邪魔させてもうね。優子と山崎の愛の巣にね」

「もう、愛子ったら何言ってる／＼／＼」

工藤の言葉に優子が恥ずかしがる  
可愛いぞ

「アキもいるんだ。じゃあウチも行かせもらおうね」

ということとで全員参加。  
じゃあ買い物に行くか。

「俺買い物に行くから優子はみんな連れてって」

俺は一人スーパーに行き優子たちを先に家に行かせた。

「ただいまー」

「うお、翔子何をする！？」

今のは気にしない

「慶太、気にしてくれ！ちょ、助けてくれー」

リビングの入り口で雄二が霧島に縄で縛られようとしていた。

「仲睦まじくていいことじゃないか」

といいのこしすき焼きの準備を始める。

「慶太、手伝うよ」

「ありがとう優子。じゃあ、そっちの野菜切つといて。」

今日のはすき焼きなので例外だが優子とはよく一緒によく料理をする。

いつも弁当は俺が作ってるが夕食とか二人で作ることが多いんだ。

優子も普通に料理うまいし

これがかなり幸せだな。

「おーい。準備できたぞ」

人数が多いので鍋は二つ用意した。

「待ったよ、慶太。早く肉を……じゃなくて皆で食べよう」

明久……肉食べたいのがわかりすぎだぞ。

「明久は肉食べなくていいだろ。肉の味を知らないやつが食べたつてもつたいない。なあ皆」

「確かにそうだな。それより俺のこの拘束をといてくれないか」

あれ？まだ縛られてたんだ

まあとにかく

「……………いただきます」……………

……………

時が流れて夜の11時

現在 in the ベッドだ  
もちろん隣には優子がいる。

「慶太、あの時はありがとね」

「ん？あの時って？」

「西村先生が私のことも高橋先生に報告するって言ったとき私だけ

をかばってくれて」

「それは優子の成績に傷がつくかもしれないからな。そういうのは俺だけでいいよ」

「でも慶太に悪いよ」

「いって。気にすんな優子」

「・・・うん。ありがとう慶太。大好き」

そう。

俺はこの最高の笑顔が見たいんだ。  
マジでこれだけで生きてけるよ。

## 点数上位者について

本編書いていて自分でもキャラたちの順位とかわからなくなってきたので一度整理します。

1位 霧島翔子

2位 姫路瑞希

3位 木下優子

4位 久保利光

5位 山崎慶太

## 解説

1位と2位は不動ですね。

3位の優子は清涼祭の召喚大会でも書いてあった通り慶太のお陰で歴史科目の点数が大幅アップしています。  
その他も頑張っているようです。

4位の久保君は優子介入で順位は下がりましたが原作よりも点数は

上がっており4000点オーバーです。

本作主人公の慶太は5位

知つての通り歴史科目で大量に点数を稼ぎ、その次にその他の社会科目で点数を稼ぎ、あとは文系科目をAクラス並みに点数をとります。

理数系科目は全て15点以下です。

以上5位までが二年生で4000点オーバーの人です。

この『バカとオタクと召喚獣』では原作よりもキャラの点数は上がっています。

## 第十八問

次の言葉を正しい英語に直しなさい。

『ハートフル ラブストーリー』

姫路瑞希の答え

『heartful love story』

教師のコメント

正解です。映画や本の謳い文句によく見かける単語ですが、たまに heart の部分を間違える人がいます。身近にある英語なのですが、意外と分かりにくいそうですね。因みに日本語に訳すと『愛に満ちた恋物語』となります。是非そのような青春を皆で過ごしてもらいたいと思います。

島田美波の答え

『hurt full rough story』

教師のコメント

- ・ hurt……怪我
- ・ full……一杯の
- ・ rough……荒っぽい
- ・ story……物語

意図的に間違えたのではないかと思うほどきれいに間違えています

ね。

そのようなハートフルラブストーリーを演じるのは貴女だけだと思います。

霧島翔子の答え

『h u r t f u l l r o u g h s t o r y』

教師のコメント

まさかもう一人いるとは

山崎慶太の答え

『h e a r t f u l l o v e s t o r y』俺と優子のこと

教師のコメント

もう正解でいいでしょう。いろんな意味で  
学校側も認めます…

男子の一週間停学処分が終わり、今日は優子と秀吉も一緒に登校している。

そして毎日来るこのAクラス前での別れの瞬間。

「じゃあな、優子。昼休みにまた迎えに来るよ」

「うん、待ってるね。じゃあ・・・」

と優子が唇を突き出してくる。  
もちろんそれに答え優子にキスする。

「じゃあ、またあとでね慶太、と秀吉」

「またあとでね」

「それではの、姉上」

これもいつものこと  
入学以来ほぼ毎日やってるよ。

そして、秀吉とFクラスへと向かうのだ。

「じゃが、今日は珍しいのう。いつもはFFF団のやつらがどこからか今のを見ていて襲ってくるのじゃがのう」

「そうだなあ。まあ、いつも返り討ちにしてるからもう懲りたんじゃないか？」

いつも俺と優子がキスするところからもなく駆けつけてきてカッターを構えて飛び掛ってくるFクラスの男子のほとんどが参加している異端審問会。

今まで毎日懲りずによくやってきたもんだ。

と話しているうちに教室に到着。

って行っても今日は家出るの遅かったのもうHR始まっているかも。

「遅れました、すいませーん」

一応優等生やってるので真面目に挨拶を．．．．え？

「慶太！秀吉！良かった．．．！ずっとこないから、てつきり今日は休みなのかと」

目の前には紐で縛られ糞虫状態の明久と雄二がごろがっていた。  
その横には例の異端審問会のやつらが立っていた。

「今朝は少々支度に手間取ってしまったがゆえに遅くなったのじゃが．．．。明久、おぬしらは何をしておるのじゃ？」

「山崎に木下。邪魔をしてくれるな。今我々は異端者である吉井明久と坂本雄二の処刑を行うところだ」

そうか．．．いや、でも雄二には霧島がいるからわかるけど明久は何をしたんだ

「なあ雄二はわかるんだけど、明久はどうしたんだ？」

「よく聞いてくれた山崎。異端者・吉井明久は我らが聖域である文月学園敷地内で朝っぱらから島田美波と接吻などという不埒な行爲を．．．。」

ガラッ

須川の口上の途中、俺たちが入ってきたのとは別の扉が開く。  
そして、耳まで真っ赤になった顔を俯けて足早に自分の席に向かう  
女子生徒が現れた。  
噂をすればなんとやら。  
今、名前を呼ばれた島田だ。

「「「・・・・・・」」」

教室内が静まり返る。  
しかし、島田もやるなあ  
とうとう明久にアタックしたのか。

しばらく静寂が続いたがそこに一時間目の先生が来たことによって  
各自が自分の席に戻っていった。

一時間目は化学なので・・・・・・寝る。  
え？さっき優等生って言ってなかったっかって？  
授業が化学なら別だよ。  
ということでおやすみ

・  
・  
・  
・

・  
「お前ら！今は授業中だぞ！！」

うん？

鉄人の声……

いつのまにか2時間目になっていたのか……

「清水、二度目の警告だ。おとなしく自分の教室にもどれ。それと、もう一度言うがこの教室への出入りを禁止する。わかったな？」

「……わかりました」

ん？？？

状況がつかめないぞ

「お前らも授業中に遊ぶんじゃない。そういうことは休み時間にやれ。それに山崎。今は英語なんだから少しは真面目にやれ」

「はい。けど、遠藤先生は？」

「まったく……遠藤先生は別件ではずしているからかわりに俺が代わりに授業をやっているんだ。」

「了解です。先生」

「では、この英文を訳してみろ」

寝てた罰かよ……

えーっと……簡単だな

「勇斗は放課後体育館裏の大きな木の下で女子バスケットボール部の先輩の恵さんに愛の告白をした」

「正解だ」

なんて変な英文なんだよ……

休憩時間になりカッターが飛び交う中を明久と一緒にトイレに行く。

「なあ明久、さっきの騒ぎは何があつたんだ？」

「ああ、慶太はずっと寝てたもんね。実は……」

要するに明久が美波とイチャついてたのに男子どもが怒りだし、さらに清水が乱入してかなりの騒ぎになったらしい。

「まったく……お前ってやつは……」

なんかいやな予感がする……

・  
・  
・  
・  
・  
・

トイレから戻ってくると秀吉、雄二、康太が雄二の席で顔を突き合わせて何かを話し合っていた。

「どうしたんだ、3人とも」

「む、慶太に明久。ちょうどいいところにきおったな」

とりあえず、席に座る。

「なに？また何かのトラブル？」

「・・・・・・・・・・（コクリ）」

「ああ。お前のせいで面倒なことになりそうだ」

明久のせい・・・・・・・・さっきのことも考えると・・・・・・・・

「雄二、もしかしてDクラスが試召戦争をこのFクラスに仕掛けようとしてるのか？」

「さすが慶太だ。そのとおりDクラスがFクラスに試召戦争を仕掛けようとしている」

やっぱりか。

いやな予感的中だぜ

「けど、僕らは最低設備のFクラスなんだし、せめて来る相手なんていないはずじゃないの？」

「いや、普通ならそうなんだが、明久。さっき雄二が『お前のせい

で面倒なことになりそうなんだ』って言っただろ。」

「相手はDクラスじゃ。思い当たる節があるじゃろ?」

ここまで言えば場かな明久でもよくわかるだろう。

「もしかして、清水さん?」

「・・・・・・（コクリ）」

「け、けど、Dクラスだって全員が乗り気なわけじゃないでしょう? そんな目的でクラスの皆がかかわる戦争をするとは思えないよ。Dクラスの代表だって反対するんじゃないかな?」

明久の言うとおりそんな清水の私闘にクラス全員が賛成するわけがない。

だがそれがいつもどおりの状況ならだ。

「そこで今の状況を考えて。今俺たちは例の集団覗き犯だ。普通の女子は皆俺たちに良い感情を抱いていない。むしろ自分たちの手で罰を与えたいと考えているくらいだろうな。」

「おぬしも知つてのとおり、Dクラスの代表は男子生徒じゃ。今の覗き犯扱いのような状況では発言力も皆無であろう。怒りに燃える女子一同と嫉妬に燃える清水を抑えきれるとは思えん。」

「そ、そんな・・・・」

現状では戦力はかなりきつい。

このままじゃまたみかん箱になってしまふ。

「雄二、攻め込まれたら勝つ自信ある？」

「苦しいな。うちのクラスの連中は朝からの騒ぎのせいで点数を補充できてないし、女子生徒はわずかに二人だけ。幸い慶太も点数が残っているのは良かったんだがそれでも勝ち目はないに等しいな。」

男子生徒は俺以外全員強化合宿の時に点数を消費してそのまま停学になっている。今日補充しなければ戦力は無いに等しいだろう。ということとは戦力になりうるのは女子が俺だけだ。

「要するに、今の状況じゃと戦力は女子二人と慶太のみということじゃからな。それに比べてDクラスは二十人以上。慶太と姫路があるからといってかなり厳しいぞ」

「じゃあ、今回の試召戦争は回避させたほうがいいな」

うん

勝ったとしてもDクラスの設備じゃなあ

「え？回避できるの？」

「お前と島田次第だけだな」

と雄二が回りを見渡しながら言う。

「どうかした、雄二？」

「ああ。島田が近くにいるかと思ってな」

「美波ならさつき姫路さんどこかに言ったけど」

それはマズイだろ  
間違いなく…

「修羅場だ」

「修羅場じゃな」

「修羅場だな」

「……………修羅場」

「え？あの二人喧嘩でもしてるの？」

まったく……………

本当にバカなやつだ

「それより明久。一つ確認しておきたいことがあるんだがお前と島田は付き合ってるのか？」

「僕の記憶だと付き合っていない、と思う……………」

「だけどさつき聞いた島田の行動、態度は明らかに付き合ってるようなものだったけどな。」

「うん。それは多分僕の送った間違いメールが原因で…」

明久が島田に送った間違いメールについて説明した。その内容は告白とも思われる内容だった。

しかも明久がそれを送ってしまったあとすぐに雄二が携帯を壊して

しまつたらしい。

「ははっ。雄二もおもしろいタイミングで壊したな」

「もう、笑い事じゃないよ慶太。雄二も今回は腹を切って詫びるべきだよ」

「う……。まあ、たしかに悪かった。すまん明久」

「……………けど、そもそもの原因は明久の確認不足」

確かにそうだ

「だけど島田の誤解を解いて明久たちがいつも通りの姿に戻れば清水もおとなしくなるだろ」

「そうだな慶太。そうすればDクラスは俺たちに不安はあっても、試召戦争をするほどの意気込みがある核がいなくなつて、試召戦争の話は流れる。俺たちはいつもの日常を取り戻して万事解決というわけだ」

ふう

これなら大して面倒なことにはならないだろう

突然扉が開く。

息を切らしながら姫路が明久のもとへ駆けつけてきた

「明久君っ！あ、明久くんは……その、美波ちゃんに告白したんですか……？」

「え、えっと……それなんだけど……」

「姫路、その話なんだが島田も一緒のほうがいいだろう。どこにいるかわかるか？」

「美波ちゃんなら、さっきまで一緒に屋上にいましたけど……」

「じゃあみんなで屋上に行こうぜ」

ということ屋上に向かう。

途中で話を聞くと康太が教室にあった清水の盗聴機をあらかじめはずしていたようだ。

さすがだな

屋上についても康太がすぐに盗聴機類を見つけてくれた。

「どうかしたの、アキ？」

「あー、えつと……強化合宿のときのメールなんだけど」

「うん、あのメールがどうしたの？」

「あのメールは、実は間違って美波に送っちゃったんだ」

「だ、だれと間違えたの？」

「須川君、かな」

「「えええつ！？」」

島田と一緒に姫路も驚いていた。

「じゃあアキはウチじゃなくて須川に告白したつもりだったの!？」

ヤバイ

このままじゃ島田も姫路も混乱してしまいそうだから俺、介入。  
わかりやすく、誤解しないように説明してやった。

「どうしてくれるのよー!私のファーストキスー!」

「えっと、僕もはじめてだったからおあいこってことじゃ、ダメかな……?」

いや、ダメだろ

「え……?そ、そうなんだ……。それは、その……」こ、ごちそうさま……?」

つて、いいのかよ!

「まあこれで誤解も解けたようだし、あとはこのはなしを清水に伝えればいいだけだな」

「そうだな。これで清水も納得するだろう」

「え?どういうこと?瑞希、何かあったの?」

「いえ、私も知りませんけど……。何かあったんですか?」

そう言えば2人はDクラスのこと知らなかったんだな  
ということ雄二が今の状況を2人に話した。

まあ、これでなんとかなったな。  
ふわあゝ……………眠い

## 第十九問

次の元素記号を答えなさいまた周期表の縦の列を族と言いますが次の記号は何族ですか？

『Rn』

姫路瑞希の答え

ラドン

18族

教師のコメント

正解です。

授業でもあまりでない元素記号ですのでよく覚えてましたね。

18族は希ガスというものでよくるのでしっかり覚えておきましょうね

吉井明久の答え

ラン

この記号を2つ繋ぐと陽気な気分になれる（ランランッ）

教師のコメント

そんな気分にはなりません

山崎慶太の答え

ラドン

18族

教師のコメント

失礼ですが山崎君が答えたのは驚きました。

.....！

わかりました。

山崎君、ゴジラシリーズが好きですね

島田の誤解を解いてからしばらく時間が過ぎて昼休み。  
もちろん俺は優子とのランチタイムだ♪  
早くAクラスにいこー

ということでAクラスにやって来た。

「ああ、山崎君。」

「誰かと思えば学年4位の久保くんじゃないか」

「山崎君、いくら僕が吉井くんに夢中になりすぎて順位が下がった  
といえまだ君には負けていないよ！」

ああ…やっぱり明久のことでか……

「まあとりあえず俺は優子と昼御飯を食べるから、お邪魔します。」

廊下に出る久保くんの横を通りすぎ教室に入る。  
まあ、いつも思っけど設備すげえなあゝ

とにかく優子のもとへ向かう。

「あ、慶太。今日も屋上行く?」

「いや、今日はここにしよう。天気はいいが最近は温暖化の影響が知らないけど暑いからな。」

「うん、じゃあ食べよ」

やっぱりこの笑顔は最高だ。

ちなみに今日の弁当は優子がつってくれたものだ。

実は最近弁当は1日交代で作っていて、夕食は一緒に作っている。

いやあ、こんなに幸せなことはないよ。

というわけで特設してある豪華なソファとテーブルがあるところに行き、弁当を食べ始める。

よし、まだ先のことだけど優子にあのこと話すか

「なあ、優子。」

「うん?」

「夏休みにさ、みんなで旅行行かないか?」

「行きたい!でもみんなって?」

「まあ、いつものメンバーだな。まず、俺と優子と秀吉。それと明久、雄二、霧島、康太に工藤、島田に姫路ぐらいだな。」

「うん。いいんじゃない？でもみんな大丈夫かな？用事もあるかもしれないし経済的な面とかあるかもしれないから。」

まあ、ようじはともかく経済的な面では大丈夫なんだな。

「用事はみんなが会う日探さないとな。でも、金銭的なところは大丈夫だよ。交通費や宿泊費とかは全部、俺が………というか父さんが出してくれるから。」

「お父さんがどうして？」

「えっと…それは………」

それは昨夜、深夜3時のことだった。

回想モード

むう………

今何時だ？

…… 3時。

まだ、深夜なのに起きちまったなあ」

携帯で時間を見たのだが、そこで着信があったのに気づく。

着信履歴をみながらトイレに行くために部屋を出る。

着信は一分前で父さんからか。一分前ならかけ直してみるか。

『プルルルル………ガチャ』

「どうしたんだ？こんな時間に？」

『すまん、慶太。こっちは朝なんだ。』

この前怪我して入院してたのにもう退院して海外にいつてるのかよ

「で、なんの用？」

『まだ先の話なんだが、8月中に京都にいつてほしいんだ。京都の大学に私の旧友で歴史教授のやつがいてな…そいつが私に極秘に渡したいものがあるらしいんだが、あいにく私は仕事で帰れそうにない。だから、頼む』

「宅配でいいんじゃない？もしものときの補償とかあるし」

『それがどうしても信用出来ないと言うんだ。だから頼むよ。』

「わかったよ。そのかわり旅費用意してくれよ。京都なら観光もしたいし。」

『いいぞ………じゃあせつかくだから優子ちゃんと秀吉君、学

校の友達も呼びなさい』

「それじゃあかなり金かかるんじゃない？10人ぐらいなるぜ？」

『それぐらいなら出してやる。高校時代の思い出というものは一生の思い出になるからなあ。父さんも昔は……………』

「いや、話さなくてもいいから。こっちは眠いんだよ。こっちは夏休みにまでにみんなで予定あわせとくから、資金のほうはよろしく」

『ああ。あとあいつの論文も読んでやれ。それではな』

「おう。」

回想終了

「てな、かんじだ」

「わかったわ。じゃあ今いないからあとでわたしから代表と愛子に  
いっておくね」

「うん。お願い」

明久たちにもあとで言うか。

第二十問（前書き）

遅くなつてすみません

## 第二十問

次の英単語の意味を答えよ

『perform』

山崎慶太の答え

『演じる』

教師のコメント

正解です。

ちなみに『performance』で名詞の演技という意味になります。山崎君ならもう知ってるかな。

吉井明久の答え

『パフォーム』

## 教師のコメント

のっちもかしゆかもあゝちゃんも違います。  
ちなみにP e r f u m eだと香水という意味になります。

昼休みが終わる1分前ぐらいにようやくAクラスをでる。

たしか、次は自習だったよな。監督の先生はたしかキャメロン先生  
……最悪だ。あの人絶対また俺につつかかってくるよ。めんどい  
から5限は……… ついでに6限もサボる。基本、真面目な俺でもあ  
の人は無理

旅行のことは放課後にでも言えばいいか。

と考えてるうちにチャイムがなった。

うん。保健室で寝てよ。

ふあわゝ

よく寝た。

5限、6限の合計100分を保健室のベッドで寝ていた。保健医がなにか言わなかったかって？

そこは気にしない。

出張に行つてて保険室の鍵をかけわすれてたっていう設定にしといてくれ。

まあとにかく帰るか。

もちろん優子と。

「あ、慶太帰ろー」

「おう、優子。カバンとってくるからちょっと待ってて」

そういつてFクラスに向かう。

あれ？

明久たちがいないな。

六限がおわつてすぐきたのに明久たちがいない。

旅行の件はまた明日にするか・・・秀吉には今日の夕飯の時間にも・・・あ！今日の夕飯は何にしようかな・・・冷蔵庫には・・・いや、優子と帰り道に相談して決めるか。

そのとき俺は気づかなかった。旧校舎二階の空き教室で行われてるFクラスの未来が決まるかもしれない修羅場的な会議を・・・

今日の夕食は冷凍してあった魚があったので焼き魚とその他などになった。

夕食の準備もできあがりテーブルに配膳したときに秀吉も帰ってきた。

「ただいまなのじゃ」

なにか元氣のないような声だ。  
なにかあったのか……

「どうしたんだ、秀吉？まさか、女に間違われて男子中学生に告白されたとか？」

「そ、そんなわけないじゃろう。ワシはどこからどう見ても男じゃ！」

まあ、わかってるけど……

つい最近俺の知り合いの中学生の友達から、よく俺と一緒にいる女の人が好きになったと言われた。俺とよく一緒にいる女の人といえば優子なので写メを見せたら少し違うといったので、まさかと思い秀吉のを見せたら、この人だと言われた。

いや……今、この中学生に秀吉は男だと伝えるべきか困ってるところだ。

「で、あんたどうしたの？困ったような顔して」

今度は優子が秀吉に尋ねる。

「そうじゃのう・・・慶太にも関係があることじゃから、夕飯を食べながら話すとするか。ワシはちよつと着替えてくる」

秀吉も俺の家に着替えを常備してます。

秀吉が戻ってきて、テーブルにすわりそのまま食事が始まった。

「で、俺にも関係あることってのは何なんだ？まさかまたFクラスに何かあったとか・・・」

「そういうことじゃ。慶太が昼休みからどこかに行っておる間にいろいろあつてのうBクラスがFクラスに試召戦争を仕掛けるつもりなんじゃ」

Bクラスといったら・・・根元か。いや根元ぐらいしか思いつかない。それならどうせ俺たちへの仕返しが目적だろうな。

「Bクラス、いや根元の目的は第一にFクラスへの仕返し。そしてもうひとつはクラス内での発言力を取り戻すことじゃ」

「根元っていったらあの卑怯で有名なBクラスの代表でしょ？一つ目の目的はわかるけどクラスでの発言力を取り戻すこととFクラス

に責めこむことってどういう関係があるの？」

「ここからは雄二の言葉を借りるのじゃが、根元はもともと人望が皆無じゃったが四月の試召戦争で卑怯な手を使ってもワシらに勝てなかったことでさらにクラスの中での地位は厳しくなったのじゃ。さらに先週の覗きにも参加しておった。今や根元はBクラス内に居場所なんかないんじゃ。」

まあ、そうだろうな。

もとからあいつと進んで友達になろうってやつ何てほとんどいなかっ  
たし。

「それで、今回根元は『外部に共通の敵を作ること』によってクラスメイトとの仲を少しでもよくしようとおもっておるのじゃ」

「と、いうことは自分へ向けられた怒りや不満を俺たちに肩代わりさせて、自らの恨みも晴らす。あわよくばFクラスを完全に打ち倒すことで発言力も取り戻したいって考えだろ」

俺の言ったことに秀吉は肯定の意としてうなずく。

「へえ」。でも今、Bクラスに攻め込まれたらやばいんじゃないの？もとからやばいけどこの前の覗き騒ぎで点数がほとんどない上、今日はBクラスは点数の補充を積極的にやってたみたいだし。」

優子の言うとおりだ。

もともと、Dクラスできついって話だったのにBクラスだったら話にならない。

「Bクラスとの試召戦争をしないためにDクラスを煽ってDクラス

との試召戦争に持ち込もうと清水を怒らせようとしたのじゃが・・・」

「明久がドジやったってことだな」

「そうじゃ」

「で、どうするの慶太？」

「そうだなあ・・・とりあえず今は何もできない。だから、明日学校に行ってから考えるしかないな」

「そうじゃな・・・お、これ美味しいのう。慶太が作ったのじゃな・・・ち！、違うぞ姉上！その間接はそっちにはまがらな・・・」

「それは私が作ったのよ！」

優子の料理は格別にうまい

## 第二十問（後書き）

次話で四巻分は終わります。

## 第二十一問（前書き）

やっと四巻分終わった……  
テスト勉強してね

## 第二十一問

以下の状況を想像して質問に答えてください。

『あなたは今、一人で森の中で迷っています。明かりもなくくらしい森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。こらを幸いと中に入るあなた。するとそこにはいすとベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は？頭に浮かんだものを3つあげてください』

姫路瑞希の答え

- 『1・楽しい表情
- 2・優しい瞳
- 3・明るい雰囲気』

教師のコメント

これは『あなたの好きな人の特徴』についてわかる心理テストです。暗い森はあなたの不安を表し、そんなときに見つけた小屋の中にある肖像画は『あなたの心を支えてくれる伴侶』をあらわします。。どうあやら姫路さんの好きな人は温和で明るくて楽しい人のようにですね。

清水美春の答え

- 『1 ・ 気の強そうな目
- 2 ・ 男らしい胸
- 3 ・ ポニーテール』

教師のコメント

最後の一つがおかしい気がします。

島田美波の答え

- 『1 ・ 折れた指
- 2 ・ 捻じ曲げられた膝
- 3 ・ はずされた手首』

教師のコメント

全部おかしい気がします。

山崎慶太の答え

『1・優子

2・

3・

』

教師のコメント

問題をちゃんと読んでください

『我々Dクラスは、Fクラスに対して宣戦布告を行う!』

翌日の朝、HRの終了直後にDクラスの男子がやってつきて俺たちにそう告げた。

「? なんじゃと?」

なんでだ・・・秀吉の話だと挑発には失敗したはずじゃないのか

「秀吉、挑発には失敗したんじゃないかったのか?」

「そのはずなんじゃがのう。ムツツリーニ、何か知らぬか?」

「……昨日何があつたかはわからない。ただ、今日は朝から清水が興奮していた」

「清水が？だとすると、挑発は成功していたんじゃないのか？」

「いや、そんなことはないはずなのじゃが……。明久。お主、あの後に何か話しおつたのか？」

「い、いや。別に。それよりも試召戦争だよ！Bクラスじゃないとはいえ、今の僕らには厳しい相手なんだから早く準備を始めないと！」

たしかにそうだな。明久、最初動揺してた気もするけど。

「そうだな、明久。俺もFクラスで2番目に点数あるからがんばらないとな。雄二、作戦はできてるんだろ？」

「もちろんだが……。だが、その前に戦力の確認だ。今、慶太と姫路と島田以外に戦えるやつがどの程度いるのかを調べる」

そう言うと、雄二は立ち上がり教壇に上がった。

「野郎ども、よく聞け！さっき言われたとおり、これより俺たちFクラスはDクラスとの試召戦争に突入する！まずは戦力の確認だ！各自、自分の持ち点を紙に書いて持つてくるように！」

Dクラスの宣戦布告によってざわついていた教室が静まりみんなが紙に点数を書き始めた。

この前の覗きでみんな、点数を消費しているとはいえすべての点数を失ったわけじゃない。だから、点数がどれだけ残っているか調べ

て先に補充するメンバー決めるんだろ。俺の点数で減ったのは歴史科目だけ。しかも、先週のうちに回復済みだ。

「そういえば、ワシは1点も消費しておらん」

「そういえば、最終日見なかったな。でも、それならフルで戦える人数が増えたってことだな」

「そうじゃな。ワシもがんばらないとな」

全員が雄二にメモを渡すと、点数補充のメンバーが発表された。それから、出撃前のブリーフィングとして雄二が教壇に立ってみんなに説明を始める。

「どんな有利な状況でも決して深追いはするな！決められた場所でひたすら防衛に徹しろ！向こうは圧倒的に有利の女子の総合科目をメインに攻めてくる！ローテーションをしながらうまく立ち回れ！限界まで来てどうしてもやばかったら教室前まで退いてもいい！以上だ！健闘を祈る！」

雄二の説明が終わるとちょうどよく9時になったと時計が知らせてくれた。

『いよっしゃあああーっ！！』

さあて、どうなるかな・・・

基本として渡り廊下や階段を先に確保するのが両軍ともに最初の目的だろう。

俺も一番前の部隊に所属している。

ここで俺が雄二に受けた作戦だが、とにかく暴れてこいだ。部隊を指揮しながら死なない程度に戦場を荒らしてこいつてことだ。指揮能力に関しては雄二ほどではないが昔の文献などをよんで少しはできるほうだと思う。

「Fクラス、覚悟しなさい・・・って山崎！いや、数で押せばなんとかなる！」

「受けるぜ、その勝負。高橋先生お願いします！」

Dクラスの女子が連れてきたのは高橋先生。あのときの恨みは忘れないが、今はそんなこと気にしている場合じゃない。

「「サモン！」」

|       |      |       |      |      |      |
|-------|------|-------|------|------|------|
| 『Dクラス | 玉野美紀 | V S   | Fクラス | 山崎慶太 | 総合科目 |
| 1543点 | V S  | 4003点 | 』    |      |      |

「くっ！4000点オーバーだったの！？」

「そついうことだ！行くぞ」

召喚獣を攻撃に向かわせる。

玉野の召喚獣に一太刀を入れたがまだ点数は半分以上はあるみたいだな。

「みんな、ちょっと来て！」

あつちは救援を呼ぶようだ。さすがに何人も一人で相手をできるわけがない。

「秀吉！福村！こっちに来い！あとお前らはそっちの女子を！お前らは回り込め！」

周りの奴に指示を出す。なんとか持ちこたえてくれれば、俺が1対1もしくは1対2に持ち込めば倒せる。同時、二人ぐらいまでなら行けそうだ。今回はできるだけ長く戦わなくちゃいけないから点数消費するリングは使えない。

雄二の作戦……最後まで知らないけど雄二なら何とかしてくれる。

それからしばらくたった。俺もそれなりに点数を消費してしまった。ほかの奴らも結構厳しいな。

「休戦だー、休戦！！」

Dクラスのほうから走ってきた生徒がそう叫ぶ。  
休戦ってことは雄二が何とかしてくれたってことだな。

教室に帰って事情を聞くと空き教室で雄二たちと清水が明久の召還獣をばこぼこにし補習室送りにしてなんとか清水の怒りを収めさせたようだ。明久は放課後まで補習室で軟禁状態だ。ご愁傷様・・・

「さすが、雄二だな。後もう少しで前線破られてたぜ」

「いや、慶太もさすがだ。点数の少ない奴を従えてよく渡り廊下でもちきつたな」

まあ、がんばったよ。

そして、放課後。

優子と秀吉と帰ろうとしていたのだが康太がなにやら面白いものを聞かせてくれるらしいので俺たち3人と雄二と康太で教室に残っていた。優子には今日のことも話してあるので今回の一連の話を全部知っている。

「あれ？みんなまだ帰ってなかったの？」

すると、補習を終えた明久がやってきた。

「ああ。康太が面白いものを聞かせてくれるらしいから」

「……明久も聞いていくといい」

明久が自分の荷物を持って俺たちの元へ来た。

「じゃあ、土屋君。早く聞かせて」

「……再生する。これを聞けば気になっていたことのすべてがわかる。」

ガチャ

『この話し合いに何の目的があつたのかは知りませんが、美春は、もうあなたを恋敵として認めることはありません。お姉さまの魅力に気づかず、同性として扱う豚野郎に嫉妬するなんて、時間の無駄ですから。……お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

この声は清水のか……ってことはこれって昨日の話し合いの後の明久との会話か。

なるほど。これは面白い。ほかのみんなもわかったようで不敵な笑みを浮かべている。

『……なんです？美春に何かいいたいことでもあるんですか？』

「って、ちょ、ちょっと待って！この会話ってまさか！」

自分の会話なのに気づくの遅すぎだよ。

「ご名答。これは、お前と清水が昨日の放課後に何を話していたか、その一部始終を録音していたものだ」

『うん。ひとつだけ。清水さんの誤解を解いておきたいんだ』

『誤解？何が？お姉さまと付き合っているというのが演技だという話なら既に知っていますけど？』

「ちょちょちょっと！なんてものを再生してくれるのさ！？冗談じゃない！早く止め……」

「秀吉頼む」

「了解じゃ」

秀吉に明久の動きを止めてもらう。

『いや、そうじゃなくて……その……美波の魅力を知っているのは君だけじゃないってコト』

「くっ！は、放してよ秀吉！これだけは本当にだめなんだ！」

「ふっふっふ。そうはいかんのじゃ」

「明久、観念しろ」

『何を言ってるんですかつ！いつもお姉さまに悪口ばかり言って、女の子して大切に扱おうともしないで！』

『うん。それは清水さんの言う通りかもしれない』

『だったら、お姉さまの魅力の何を知っていると言っんです!』

『確かにお姫様みたいに扱っているわけじゃない。男友達に接するみたいに雑な態度になっているかもしれない。けどね……』

「わーっ! わーっ! 聞くなーっ」

「五月蠅いな。少し黙ってろ」

雄二の手で明久の口がふさがれる。

『けど、なんですか?』

『……けど、僕にとっては美波は、ありのままの自分で会話できて一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちょっとした仕草が可愛い、とても魅力的な女の子だよ』

「「「「「……「「「「」

「ここまでではつきり言うとはな」

「吉井君って結構すごいね」

「……いや、意外だったな」

「もう少し婉曲に言ったものじゃとばかり思っていたが……」

「……直球勝負だった」

明久って……やばい。笑ってしまう。

「……………っ！！（ダッ）」

康太が急に険しい表情になって廊下に飛び出した。

「どうしたんだ、康太？」

「……………油断した。今の立ち聞きされたかもしれない」

「ムツツリーニ！相手は誰！？」

「……………多分、張本人」

まじか……

「そ、そうか。聞かれちゃったか。すまん明久。まさかこれほどのものだとは思わなかった」

「すまぬ明久」

「明久、すまん」

「ごめんね、吉井君」

「……………ごめん」

「まあ、別にいいよ。張本人が相手なら。それより、悪いと思うんなら美波との仲直りに協力してよ。アレ以来ずっと険悪なままなん

だから」

「いや、それは多分大丈夫じゃろうな」

「へ？なんで大丈夫なの？」

明久・・・お前はどこまで馬鹿なんだ。

いや、まあこれで一件落着つてことでいいよな。  
よし、帰ろう。

第二十二問（前書き）

五巻突入です。

## 第二十二問

次の文章は日本国憲法の前文一部です。空欄にあてはまる共通する語句を書きなさい。

そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は（ ）に由来し、その権利は（ ）の代表者がこれを行使し、その福利は（ ）がこれを享受する。

山崎慶太の答え

そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は（国民）に由来し、その権利は（国民）の代表者がこれを行使し、その福利は（国民）がこれを享受する。

教師のコメント

正解です。特にここは日本国憲法の前文で大事なところですよ。

吉井明久の答え

そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は（ピー）に由来し、その権利は（ピー）の代表者がこれを行使し、その福利は（ピー）がこれを享受する。

## 教師のコメント

私たちの国の憲法が大変なことに。

## 須川亮の答え

そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は（ＦＦＦ団）に由来し、その権利は（ＦＦＦ団）の代表者がこれを行使し、その福利は（ＦＦＦ団）がこれを享受する。

## 教師のコメント

すべての国民に謝ってください。

ふう〜疲れたあ〜

現在は放課後になったばかりの時間なのだが俺は今日、学校には行っていない。理由は剣道部の試合の助っ人。団体戦の人数がたりないので俺が助っ人として試合に出たわけ。だから、今日は公欠。でも、なんでテスト期間に試合なんてすんだよ。試合は学校の授業が終わる前には終わっていたので、優子を迎えに学校にむかったのだ。

そして、現在優子と校門で待ち合わせしていると俺の級友達・・・まあFクラスのいつものメンバーと・・・おっ！優子も一緒だ。7名が歩いてきた。

「けいたーお疲れ様！」

「おう。楽勝だったぜ」

優子が抱きついてくる。もうすでに学校の外。一般人も少しだが歩道を歩いているけど恥ずかしくはない。もう慣れたし。

「すごいね、慶太！前から気になってたんだけど、なんでそんなに剣道強いのか？」

明久が尋ねてくる。あれ？言っていなかったか？

「俺、日本史でもやっぱり桃山時代とかの戦とか好きだからさ、刀にも昔から憧れて一人で練習してたら今の感じになって所だな。まあ父さんもフェンシングやってたし母さんは柔術全般やってたから俺もなんかやりたいと思ってたし。まあこんな話はどうでもいいんだけどみんなは全員集まってどうしたんだ？」

「今から吉井君の家で勉強会するんだって」

「・・・慶太、明久はなにか隠し事をしている。家には誰も入れたくないらしい」

「へえ、それは面白そうだな。優子、俺たちも行こうぜ」

「うん。私も行ってみたいし」

ということで俺たちは明久の家に向かった。

「でも、なんででしょうね？明久君がそこまで隠すことって」

「たしかに気になるなあ。」

「そうじゃな・・・。急に手作り弁当を持ってきたり、Yシャツにはアイロンがかかっておったことなども合わせて考えると・・・。」

そんなこともあったのか・・・。でも、明久が食費をゲームに使わず弁当に使うなんてありえないな。

「女でもできたか」

「それはないな」

即答

「ちょっと！慶太！さすがに即答はやめてよっ！それにみんなも納得したような顔しないで！」

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久。鍵を出せ」

「やだね」

少しでも抵抗するのか、明久。

だが、この手を使えばお前も必ず陥落するだろう。

「明久、お前の食費じゃどうやっても手に入らないプレミア物のゲームを貸してやらんでもないぞ」

「鍵どうぞ！！」

「慶太はもう明久を飼いならしているのう」

楽勝さ

明久から鍵を受け取り、その扉をあけ中に入っていく。

「本当に彼女がいるのかしら……」

「少々緊張するのう……」

「楽しみね。本当に彼女がいたらどうなるんだろう」

彼女はないだろうけど、まんがいちそんなことになったら姫路と島田はどうするんだろうな。

「大丈夫です。明久君にかぎってそんなこと、ありません……」

玄関で靴をぬぎ廊下を歩く。  
リビングへ続くドアを開ける

「……………」

俺たちの視界に信じられないものが飛び込んできた。

「いきなりフローできない証拠があーっ!？」

それは室内に干されたブラジャーだった。

な、なぜだ……明久に……この超天然野郎に彼女なんてできるわけがないだろ。

しかも、サイズが結構大きい。

優子のは多少小さめだがこれはかなりのものだろう。

「……………もうこれ以上ないくらいの物的証拠ね……」

「そ、そうじゃな……」

「殺したいほど妬ましい」

明久がすぐさま洗濯物をほかの部屋に移すが時すでに遅し。その場にいる全員がそれを見てしまっている。

「ダメじゃないですか、明久君」

一番落ち込んでいるであろう姫路が明久に歩み寄る。

「あのブラ、明久君にはサイズが合ってますよ」

ぶっ!!

「コイツ認めない気だ!」

やばい、心の中でふいてしまった。

「姫路さん、これは僕のじゃなくて!」

「あら?これは・・・」

なんだ。次はどんなことを言うんだ・・・

姫路の視線の先には化粧用のコットンパフがある

「ハンペンですね」

「ぶっ!!」

ヤバイ、今度は表に出てしまった。

そして次に姫路の視線が向いたほうにあったのは弁当か・・・クッ!ダメだ・・・笑いが止まらない。

「しくしくしく……もう否定しきれません」

なぜだ……なぜ今までの中で一番言い訳できそうな弁当はアウトなんだ。

「はあ……。もうこうなったら仕方がないよね。正直に言うよ。実は今、姉さんが帰ってきているんだよ。」

そういうことか。

ブラジャー、化粧品、量が少なめの弁当など女性物があるのは明久のお姉さんが帰ってきていたからか。

だから、明久の弁当も普通のだったってことか

明久のお姉さんか……。あの人なら、明久が俺たちに合わせたくない理由もわかった。

「明久、お前が俺たちを家に呼びたくなかった理由がわかったぞ。そのお姉さんの性格のせいだろ？」

「えっ！なんで慶太がそのことを……。まあそうなんだ、みんな。僕の姉さんは、かなりその……。珍妙な人格をしてるって言うか……。常識がないというか……。だから、一緒にいると大変で、いろいろと減点とかもされるし、それで家に帰るたくなって……。」

「たしかにあのお姉さんは大変よね」

「木下さんまで知っているの！？」

俺と優子は会ったことがるからな

ガチャッ

玄関のドアが開く音がする。

「あら・・・？姉さんが買い物に行っている間に帰ってきていたんですね、アキ君」

みんなが緊張する中リビングのドアが開き明久のお姉さんの玲さんが入ってくる

「あら。お客様ですか。ようこそいらっしやいました。狭い家ですがゆっくりしてってください」

普通は大丈夫なんだこの人。

現在・・・23歳か。ハーバード大学を卒業し教員免許も持っているすごい人なのだが・・・

「「「お、お邪魔しています」」」

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。みなさん出気の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます。」

本当に完璧だ。

「久しぶりです。玲さん。」

「お久しぶりです。玲さん。だいたい一年ぶりですね。」

「あ、慶太君に優子ちゃん。久しぶりですね。」

そう、俺たちは去年の夏休みに父さんたちに呼ばれアメリカに旅行に行った。秀吉は部活でこれなかったけどな。そのとき父さんと母さんの知り合いだった玲さんと出会ったんだ。

「？なんで姉さんのことを知ってるの？」

「私はもともと山崎君のご両親と知り合いで去年、旅行でアメリカに来ていた二人と知り合ったんですよ。それより、優子ちゃんがいるってことはここには優子ちゃん以外は全員男ですね。」

やっぱりきたか

「ちよつと待つてよ！出会い頭になんて失礼なこと言うのさ！木下さん以外にも・・ほら！3人の女の子がいるよ！！」

「そんなわけないでしょう。バカでブサイクで甲斐性なしのアキくんに女の子の友達なんてできるわけがありません」

そう。玲さんは明久の不順異性交遊は絶対許さないのだ。そのため  
の全力否定であろう。・・まあ不順同性交遊は認めてるらしいが。

「いや！本当に女の子だからね」

「・・・女の子ですか・・・？まさか、アキ君は女の子を家に連れ込むようになっていたのですか・・・・・減点150点です。」

「150！？多すぎるよ！まだ何もしてないのに！」

「…………『まだ』？…………200に変更します。」

「その減点ってなんですか？」

「期末テストの点数が明らかになったとき減点の方が上回ってたら僕の一人暮らしは消えてなくなるんだよ……………」

「それで今日は真面目に勉強していたのね」

「ご愁傷様、明久。」

「そういえば玲さんは夕飯の買い物に行ってたんですね。でも吉井君と玲さん二人分にしては多かつたんじゃないですか？」

「いえ、その量でいいんです。それより、せっかく皆さんいらっしやったことですしご夕飯と一緒にいかがですか？たいしたおもてなしはできませんが」

折角だし、ご馳走になるか。玲さんは何でもできるから料理もできそうだし。

「じゃあご馳走になろうぜ、優子」

「うん。」

「それじゃあ、俺もありがたく行為に甘えさせてもらうつとするかな」

「…………ご馳走になる」

「迷惑でなければ是非ワシも相伴させていただきたい」

「うちもご馳走になろうかな」

「じゃ、じゃあ、私も……」

この場にいる全員がご馳走になるようだ

「それはよかったです。では、お願いします。アキ君。」

「うん。了解」

「あれ？明久が作るの？」

「そうだよ。」

玲さんが作るんじゃないかったのか。

何でもできる人の料理も食べてみたかったんだが……

「んじゃ、ちょっと早いが先に夕飯の支度をするか。明久手伝うぞ。」

「……協力する」

「じゃ、俺も手伝うよ」

「慶太はいいよ。今回は僕の料理の腕前を見せてあげるから」

それもいいな。明久の実力がどれほどのものか見てやろう。



## 第二十三問（前書き）

前回までのあらすじ

剣道部の助っ人として試合を行った慶太はちょうど帰宅時間になっている文月学園に優子を迎えに来ていた。校門で待っていたのだがそこにFクラスの面々が来て今から明久の家で勉強会をするというのだ。

それに慶太と優子も便乗しついていくのだが、明久の家には姉の玲がいたのだ。

慶太と優子は彼女と知り合いなのだが玲はどうも変わった性格をしている。

そんななか、明久、雄二、ムッツリー二は夕食を作ることになった。

## 第二十三問

次の四字熟語の読みとそれを使った短文を作れ。

『真正正銘』

山崎慶太の答え

読み……しょうしんしょうめい  
短文……明久は真正正銘の馬鹿だ

坂本雄二の答え

読み……しょうしんしょうめい  
短文……明久は真正正銘の馬鹿だ

土屋康太の答え

読み…… しょうしんしょうめい

短文…… 明久は正真正銘の馬鹿だ

教師のコメント

正解ですが短文が3人そろってそれはさすがにひどくありませんか。

吉井明久の答え

読み…… せいしんせいめい

短文…… 次のテストに向けて正真正銘がんばります

教師のコメント

正真正銘の馬鹿でしたね

「『頂きまーす』」

明久の料理の腕試しってことでまず運ばれてきた料理を見る。

パエリアか。

俺は作ったことないけど昔、父さんの仕事でついていったスペインで本場の味を食べたことがあったな。

「じゃあ頂きます」

スプーンで一口すくい口に運ぶ。

「うまいな」

「本当に!？」

これは本当に上手い。

明久がこんなに料理ができたとはさすがに驚くな

「美味しいわよ吉井くん」

「確かにこれは美味しいのう」

「ありがとう秀吉、木下さん」

優子もそれに秀吉も美味しいと絶賛した。

一方、姫路と島田は対象的に砂でも噛んだような表情をしていた。

「あれ？二人ともパエリアは苦手だった？」

それに気づいた明久が二人に聞くと、

「う……。いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど……」

「だからこそ、落ち込むと言いますか……」

好きな相手の方が料理が上手いつてのがショックだったのか。

まあ、島田はわからないが姫路には誰だって勝っているだろうけど。

「……やっぱり、もっとたくさん料理を作って練習しないと……！  
これに勝つためにも、もっとオリジナルの味を出して……！」

小声で呟いた今の姫路の言葉だが聞こえてしまったよ。

いや、忘れよう……うん、その方がいい。

「上手に出来てますね。アキくんの知っているレシピとは違う材料  
を用意したのに、いつも通りのものなのは残念ですが」

「偉そうにいうなあ。姉さんは料理が全然ダメなくせに」

実はそうらしい。

完璧超人の玲さんは性格が変なだけかと思っていたけどどうやら料理もできないらしい。

なにやら、吉井家では夕飯は家の中で一番立場の低い人が作るらしい。

明久は今までずっとこれを信じてきていてさすがにドンマイとしか言えない。

「ところでみなさん」

明久を無視し玲さんが話をかえる。

「うちの愚弟の学園生活はどんな感じでしょうか？例えば成績や『異性関係』など」

最後の異性関係がやけに強調していたけどさっき言ってたやつだな。明久の家ではよくゲームするからな。一人暮らしが消えるのは俺にとってもいささか不便な気もする。

ここは協力しないといけないな。

「大丈夫ですよ、玲さん。『バカ』ですけど結構真面目に勉強しますよ」

雄二や康太も一緒にゲームしたりするから協力するだろ。

さっき、明久も頼んだと思うけど、二人に目配せして協力を促す。

すると、俺の考えがわかったのか雄二はウィンクをして答える。

キモいぞ。

「そつだな。この前も日本史で上位クラス並みの点数を取っていたしな。」

「……証拠写真」

康太が出したのは明久がミカン箱で真面目に勉強している写真だが、なんで康太がなんの変鉄のない明久を撮っているんだ？

久保に売るためののか……ん？

そういうことか。

「つつ！！（ブシャアア）」

島田が姫路の胸を揉んでいる写真を見せながら鼻血を勢いよく噴き出す康太。

現在見てないのに鼻血を噴き出すとは思いつき鼻血をしたのか。

「そうですか。それで、異性関係は？」

玲さんはあえて今答えた俺たち男子陣ではなく優子、島田、姫路の女子陣に聞く。

「え、えっと、それは、その、よくわかりません……。『異性関係』は」

「そ、そうね。ウチもあまり知らないわね……。『異性関係』は」

「えっと、大丈夫ですよ玲さん。吉井くん、ちゃんと男の子と仲良くしてますよ！」

島田と姫路は曖昧な答えで最後の『異性関係』は強調していたが最後に優子がきちんと締めてくれた。

玲さんは不純性交遊は許さないが不純同性交遊は許すそうだからなというかさすが優子だな。元氣よく男の子と仲良くしてるなんて天使の笑顔で言うんだからな。

学校では少しだけだが噂が広がっているらしい。  
優子が腐女子であると。

まあ、事実だがちゃんと俺という彼氏がいるから信憑性は低くなっているらしいけど。

それで、数少ない優子の秘密を知っている秀吉が以前俺に彼女が腐女子なのは嫌ではないかと聞いてきたことがあった。

まあ、俺は嫌じゃない。

そんな重度なものじゃないし俺だってアニオタなのを優子は認めてくれてるからな。

それにお互い愛し合ってるからなんの問題もありません。

とりあえず話を戻すと優子の説得あってか玲さんは納得してくれた。

「そういえば、いい忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくて結構ですよ、アキくん」

「え？そうなの？」

「はい。こちらで済ませておかないといけない仕事があつて、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうなのです」

玲さんの仕事っていうと明久のお父さんの会社のことだったよな。詳しくは知らんが。

それにしても今の話を来た瞬間、明久の顔が嬉しそうになったな。

「アキくん、嬉しそうですね？」

「うえ！？い、いや、そんなことないよっ。せつかく帰ってきた姉さんがいないのは凄く残念だよ！」

「英語でいつてみてください」

さすがにバカでアホな明久でもこの場面では間違わないはず……

「Happy」

「……………」

「あっ！痛っ！姉さっ…………！食事中にビンタは…………っ！」

明久は正真正銘のバカでアホでした。

夕食後みんなでテキパキと後片付けを済ませるとやはりというか姫路が本題を切り出した。

「そろそろお勉強を始めましょう」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

って言ってもまだ七時か。結構できるよな。

「ならばワシも一緒に教えてもらおうとするかの」

「……………同じく」

「そうだね。テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強を始めようか！」

なにげにみんなやる気だな。

「じゃあ俺は英国社限定教える側をするよ。勉強道具持ってきてないし」

「では、私も協力しましょう。これでもボストンの大学ですが教育課程を修了していますから多少はお力になれるかと」

「玲さんが教えるなら俺は出番なしかな」

「そんなことないですよ。社会学では山崎くんとは比べられないですよ」

それでもあなた教師の資格持つてるでしょ。

「ちよつと待て。明久の姉さん、ボストンの大学つてあのハーバードじゃ……」

「よくご存知ですね。その通りです」

「「「えええっ!?!」」」

さっきからの性格からしてやっぱり驚くよな。

それから、玲さんを中心に勉強会は進んでいっているのだがその玲さんが一度席をたち何やら雑誌のようなものをもって帰ってきた。

「アキくんが参考書を隠し持っていたので持ってきました」

そんな……明久がそんなものを持っているはずが……

『女子高生 魅惑の大胆写真集』

「僕のトップシークレットがあーっ!!」

納得。

「保健体育の参考書としてどうぞ」

と、そこから明久が必死になり始めるけど優子が話しかけてきたのでそちらは無視しよう。

「ねえ、慶太もあんな本持ってたりするの」

持ってるはずがない

「持っていないよ。」

「本当に？男の子なら誰しも持ってるんじゃないの？」

「確かに、Fクラスの連中なら全員一人百冊以上は持ってたそうだけど俺にはそういうの興味わかないから」

「え？なんで？」

最近、優子の可愛さは更に磨きがかかったと思う。

「俺にはこんなに素敵な彼女がいるからな」

「慶太……大好き！」

「俺もだよ、優子」

とこんな感じで10時前ぐらいまで俺たちは勉強をして解散となった。

## 第二十三問（後書き）

大変お待たせしてしまいました！

## 第二十四問

次の文章で『』のなかの言葉を敬語に直しなさい。

西村先生が『言った』ことは忘れない。

山崎慶太の答え

『おっしゃった』

教師のコメント

正解です。

社会に出てとても大切なことなのでしっかり身につけておきましょう。

土屋康太の答え

『申されました』

教師のコメント

典型的なミスですね。

日常でよく使いがちですが違うので気を付けましょう。

吉井明久の答え

『言いやがりました』

教師のコメント

目上の人には敬語を使いましょう！

「というわけで雄二、慶太。今日も楽しく勉強会をしよう！」

放課後、帰り支度をすませたけどまだAクラスが終わってないので雄二と話していると明久が駆け寄ってきた。

「……明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

「なんとも言うってよ。今の僕には体裁を気にしている余裕はないんだから」

また減点されたのか。

「で、今何点なの？」

「確か合計で290点。もうかなり厳しいんだよね」

「290か。そうになると、期末の総合目標は1090ぐらいだな」

「今の明久ならそれぐらいいけるだろ」

「そうかなあ。今までは絶対調でも1000点ちよつとだったから、それに更に50点以上アップさせないと」

いや、明久の点数は振り分け試験の時より大幅に増えているはずだ。

「いや、慶太のいう通りだ。暗記科目を中心に今から死ぬ気でやれば大丈夫だろ。清涼祭のときに慶太にみっちり鍛えられたんだからな」

「そうだ。あのときは日本史に力を入れていたから今回は世界史だな。ラッキーなことに今回のテストを作るのは田中先生だしな。」

世界史の田中先生の問題は解きやすいと評判だ。実際に問題文とかも易しくなってる。

俺にとったら甘すぎるが。

「田中先生か……。それなら確かに点数を撮りやすいかも」

「だが、明久。日本史も手を抜くなよ。今回、日本史の問題を作るのはキヤメロンだ。なあ、慶太」

そうなんだ。

授業で毎時間、俺に高校じゃ習わないような問題を出して来るほどだ。

テスト問題も何かしら難しいものにしてくるに違いない。

「ああ、気を付けろよ。多分、授業で教えなくてもいいような目立たない出来事とか出してくるに違いない」

「アハハ、キャメロン先生はいつも慶太に意味不明な問題出してくるしね。しかも、慶太はそれにあっさり答えちゃうけどね。それだと、理数系にあまり力はいれずに暗記科目に集中したほうがいいんだね」

「そうだな。今からお前が数学とかをやっても点数はあがらなそうだしな」

じゃあ、俺も理数科目は一切勉強しなくていいな。

「慶太、おまえは別だぞ。いくら慶太の15点でもないよりはマシだ」

勝手に人の心を読むなよとか思ってる俺たちの話し声が聞こえたのか秀吉が鞆を抱えてやって来た。

「なんじゃお主ら。今日も明久の家で勉強会か?」

「僕の家? うゝん……。今日から姉さんが仕事でいないから、それでもいいんだけど……」

「けど?」

「今日は雄二の家にしようよ。たまには僕の家以外にも行ってみたいし、何より僕の部屋には参考書とかの勉強道具があまり揃ってないしね。慶太の家にはよく行ってるしあそこには誘惑が多すぎるよ」

俺の家だと明久がゲームに手を出してしまうからな。それにしても雄二の家には行ってみたいな。

「俺も雄二の家がいいかな。しばらく行つてないし」

「わかった。今日は俺の家でやるか。幸い、おふくろも温泉旅行で不在だしな」

前から思つてたが雄二のお母さんはどんな人なんだ？何かしら雄二は隠そうとしているし。

「慶太も行くならワシも同行させてもらうかの」

「最初からそのつもりだったさ。というか、どうせいつものメンツが来るんだろ？それならさっさとしようぜ」

「そうだね。おい」

と明久が康太、島田、姫路を呼ぶ。

「雄二、優子も呼ぶけどいいよな？」

「ああ、いつものメンバーだしな。それに学年3位がいてくれるならこちらも助かる。」

そう言えば、優子って今霧島、姫路に続いて学年3位の点数なんだつたな。

さすが俺の優子。

「んじゃ、入ってくれ」

雄二の案内で学校から歩くこと十五分程度で坂本宅に着いた。雄二と総勢七名が玄関で靴を脱ぎ中に入る。

昨日の明久の家よりも広いから居間とかならこの人数でも大丈夫なはずだ。

「ねえ雄二。家には誰もいないの？」

明久が言うように雄二の両親とかがいたら居間が使えない可能性が高いな。

「ああ、親父は仕事で、おふくろは高校の同級生たちと温泉旅行らしい。だから、何も気兼ねせずによつくりしてくれ」

「でも私まで来てよかったの？」

優子が聞く。

優子がダメなら俺も来なかったな。

「いや、むしろ助かる。学年三位に教えてもらえればFクラスの戦力も上がるからな」

「前から思ってたけど確かにこのメンバーってすごいわよね」

「そうじゃのう。学年次位の姫路にそれに続く姉上。五位の慶太にAクラス並みの雄二がおるからのう」

「……………一対一でできる」

雄二の言葉に島田、秀吉、康太が付け加える。

昨日は玲さんがいたからまとめて教えてもらってたけど今日は確かに一対一で教えることが出来るからやりやすい。

でも一応優子はFクラスが目指す最終目標のAクラスだ。協力する義理はないんだが、

「優子はAクラスなんだから別に協力しなくてもいいんだぞ?」

「私なら全然いいよ」

と満面の笑みで答えてくれた。

可愛すぎる……………ダメだ。

とりあえず抱き締めよう。

「ありがとう、優子。大好きだ」

「慶太のためならなんでもするよ」

これはもう幸せすぎますよ。

「おい。人の家だってことを忘れんなよ。あと明久とムッツリーニは静まれ」

「ムッツリーニ、どうやって慶太を始末しようか」

「……………会長にも報告しよう」

おっと、確かに忘れてた。気にすることでもないけど

とりあえず話は一端終わり雄二がリビングのドアを開ける。  
すると、

「……………！！（ぷちぷちぷちぷち）」

居間には一心不乱にプチプチを潰している女性の姿があった。

「……………」

——パタン

何も言わずに戸を閉める雄二。

昨日、玲さんを見て明久に同情の視線を送っていたのはこのせいかな。  
雄二に兄弟がいるなんて聞いたことがないから……

「雄二のお母さんか」

「……………赤の他人だ」

さすがに否定しきれないだろう。

「さ、坂本の母親なの……………？　なんだか随分とすごい量を潰していた  
わよね……………」

「う、うむ。あれほどの量。費やした時間はおそらく一時間や二時  
間ではきくまい」

「……………凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をしているのでしょうか」

それぞれ口々に言うが本当に何をやっているんだ？

「恐らく、精神に疾患のある患者がなんらかの手段でこの家に侵入したに違いない。なにせ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

そこまで必死にならなくても。いつもは相手を陥れるためなら簡単に嘘をつく（明久に）雄二がこうも必死にバレバレの嘘をつくな。てな。

と、そこで今まで静かだった扉が閉まったりリビングから雄二のお母さんの声が聞こえた。

『あら……？もうこんな時間。さっき雄二を送り出したと思ったのに』

なんだ、この人は。

八時間近くもプチプチしていたのか。

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

もう四時になるのにお昼も食べずにやって、しかもまだ続けるのか。逆に尊敬できるよ。

「おふくろっ！何やってんだ！？」

さすがに騙すのを諦めたのか勢いよく扉を開け中に入る雄二。

「あら雄二。おかえり」

「おかえりじゃねえ！なんで家にいるんだ！？今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

俺はそれよりなぜプチプチをやっていたのかのほうが気になるんだが。

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。7月と10月ってパツと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似ているんだ！？数字の形どころか文字数すら合っていないだろ！？」

「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「サラッと図々しい台詞をぬかすな！あんたの黄金期は十年以上前に終わっているはずだ！」

「あら、雄二のお友だちかしら？」

「だから人の話を聞けえっ！」

今の会話は俺にはついていけないのでスルーしよう。しかも、雄二のお母さん、

「ねえ、慶太。坂本君のお母さんって見た目若すぎない」

「うん。雄二の姉って言っても十分通じるぐらいだよ」

しかも、見た感じ綺麗な人だし。

まあ、優子には敵わないけどな。

「み、皆、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ」

雄二に言われた通り階段を上がりすぐのところにある部屋に入る。

「秀吉、雄二の部屋に来たのはいつぶりだっけ？」

「そうじゃのう。たしか、去年の秋ぐらいじゃったような」

「え？アンタたちはよく来てるんじゃないの？」

「いや、俺たち五人で遊ぶときは大体明久の家だ」

「場所といい、広さといい明久の家は都合がいいからな」

「そうだけど……慶太の家もその条件はクリアしているくせに一年の頃は殆ど行かせてくれなかったからね」

それはしょうがない。

俺と優子が付き合っていることを知ってる人は当時、秀吉などごくわずか。

明久なんか知られたらいつ襲い掛かってくるかわかったもんじゃない。

「それはそうと……。やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。参ったな……」

全人数八人。

さすがに厳しいな

「居間じゃダメかな？」

と明久

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

「もうっ。ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いしてっ」

「そうはいうがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんなことが言えるんだ。四六時中一緒にいると、ツッコミどころが多すぎて……」

P r r r ! P r r r !

雄二が反論している途中、突然誰かの携帯が鳴る。

俺の携帯はアニソンなので違うし優子、秀吉のでもないな。

「あ、ウチの携帯ね。ちょっとゴメン」

島田のだったか。

「もしもし？あ、M u t——お母さん。どうしたの？ ……うん。

……うん。そう。わかった」

簡単な会話で電話はすぐに終わった。

「美波ちゃん、何かあったの」

俺の目から見ても少し落ち込んでいるように見え、優子が島田に聞く。

「うん……。今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど……。ちょっと急な仕事が入って家にいられなくなったみたい」

「あ、そうなの？それじゃ、葉月ちゃんが家に一人ってこと？」

と次は明久が聞く。

「そうね。だから、悪いけど今日はウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」

それはしょうがないな。

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

「え？ウチの家？」

確かにそれなら大した問題はないはずだ。

「それは良いのう。島田の妹とは全員が顔見知りじゃし、丁度雄二の部屋は手狭だったところじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

それなら俺も協力を、

「なんなら、俺が夕飯作るし」

「美波さえ良かったらどうかかな？」

「う……。そ、そうね……」

ぎこちない応え。

おそらく明久に部屋を見られてしまう可能性があるからか。

「ウチの家にしましょうか……。ただし！絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

やっぱりそうか。

好きな明久になにか見られたくないものでもあるのだろうか。

ということで雄二に急かされながら玄関から出て島田宅へと向かった。

勉強会は何事もなくみんな真剣にやっていて俺と優子だけ途中で抜け出して冷蔵庫に入っていた食品で有り合わせの料理を作ったりしたのが一番楽しかったな。

優子と二人で料理するってのがたのしくて仕方がないんだな。

## 第二十四問（後書き）

美波の家での話は割愛させてもらいます。

理由は何個かあるのですが明久たちと同じでテスト期間に入ってしまったのでできるだけ早く書き上げたかったからです。

なので、次の投稿は一ヶ月後になるかもしれませんが、読んでもらっている方々、すみません。

## 第二十五問（前書き）

テスト終わりっ！

てことで更新。

短いんですけどござ。

## 第二十五問

次の四字熟語の意味を答えよ

「自縄自縛」

山崎慶太の答え

自分の言動が自分自身をしばって、自由に振る舞えずに苦しむこと

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

ドM

教師のコメント

あながち間違ってはいませんが……

翌日の昼休み。

俺は明久たちではなくAクラスで昼食をとっていた。理由は優子がAクラス内での仕事があったので、それをやりながら昼食をとろうということになった。

明久たちも誘ったが雄二が断固拒否したため俺だけがAクラスに行くことになったのだ。

そして、現在時刻は昼休みが始まってから既に15分以上は経っている。

優子の仕事も終わり霧島、工藤を含めた4人で談笑しながら少なくなっただけの残りを片付けていた。

「相変わらず優子たちのお弁当は美味しそうだね。これ、もうね」

「あつ、もう。愛子ったら」

と、こんなやり取りは先程から何度も行われている。

「まあ、旨いに決まってる。なにせ、俺が作ってるんだからな」

「……この味付け今度教えて」

俺の弁当に入っていた肉団子を口に入れ霧島が喋る。

「それなんだが昨日の残りなんだ。んで、肉団子を作ったのは優子だよ」

「え！嘘！？こんなに美味しいからてつきり山崎君が作ったものだと思ってたのに。てか、優子もご飯作るんだ」

「失礼な。私もちゃんとつくってるもん！」

今の可愛いです、優子。

「そうそう。今じゃ朝は俺が弁当作ってる間に優子が朝飯を作ってくれてるし、休日の昼は優子だし、夕飯は一緒に作っている」

優子のご飯はマジで旨い。俺も料理には自信はあるけどもう同じぐらいだと思う。

なにより一緒に料理するのが楽しいし。

「へー、それはもうラブラブだね」

「……どこまで進んだの？」

「「っ！」「」

いきなりの思いがけない言葉に食べ物に詰まりそうになる。どうやら優子も同じような感じたが顔が紅潮していく。

そりゃ、恥ずかしいよな。俺だって恥ずかしいよ……、明久たち男

同士で話すんだっいたらまだいいんだけどまさか、霧島の口からそんな言葉が出るとは思っても見なかった。

「そうだよ。もう、3年も付き合つてて、一緒に暮らしてるなら最後までやっちゃったんだとは思うけど」

優子は真っ赤にした顔のまま俯いている。

確かに、やるところまでやったが女子には恥ずかしくて面と向かつて言えやしない。

「そんなこと、お前らに言うことじゃないだろ」

プライバシーだ、プライバシー。

言う必要なんてない。

「興味あるんだからいいじゃん。ねー、代表」

「……そんなお年頃」

ダメだ。

ここは話題を変えよう。

霧島がいるなら雄二ネタでいくか。

「そ、そういえば昨日雄二たちと島田の家に行って勉強会をしたんだ」

「あー、話を変えるなんて卑怯だよ!」

工藤はスルーだ。

少なくとも霧島は俺の話に興味を持ったようだ。

「で、その帰り何だが家の方向のせいで雄二と姫路が2人つきりで帰ってたんだよ」

よし。

俺の言葉を聞いて霧島の内面の怒りに火がついたようだ。

ここで、教室を飛び出して雄二を抹殺しにいかなくなったところとか前より変わったと思う。

「……教えてくれてありがとう。それより勉強会なんてやってるの？」

ようやく元に戻った優子が霧島に答える。

「うん。なんだが、吉井くんが少し大変な状況になってるからってことで勉強会をやってるの」

「大変なことって？」

工藤が聞き返してきたので今度は俺が答える。

「実は今明久のお姉さんが帰ってきてて、ちゃんと堅実な一人暮らしが出来てるかチェックしてるんだ。で、今結構減点されてて期末でいい点数とらないと一人暮らしがなくなるからよく遊びに行く俺や雄二も不便だと思って教えてやってるんだ。それにFクラスのいつものメンバーと優子も手伝ってくれてる」

「へー。それは面白そうだね。ムツツリー二くんもいるみたいだしボクも交ぜてよ」

「それはいいけど、それだと場所は俺の家かな」

「……それなら私の家に来るといい。今週末なら泊まり掛けでできる」

「それは助かるけど……、雄二が来なさそうだな……」

多分、霧島の家と言ったら拒否しそうだ。

「……大丈夫。首輪で繋げておくから」

雄二「……ご愁傷さま。やっぱり霧島は変わってないようだ。」

「わかった。じゃあ、この事はあとでみんなに伝えておくよ。」

話は終り弁当をすぐに食べ終えた。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る五分前にFクラスの教室に戻った。

そして、俺の後ろには霧島が着いてきていた。

ジャリジャリと鉄がすれるような音を出しながら……。

「お、みんな集まってるな」

教室に入るといつものメンバーは卓袱台をくっ付けて弁当を食べていたようで今は何か話しているようだ。

「よお、戻ってきたか慶太」

最初に気付いた雄二が手を振る。

「雄二。」

お前に天使を連れてきたぞ」

「はあ？天使ってどういう？」

雄二が困惑しているので俺は横に一步ずれる。

「……雄二。山崎から話は聞いた。……首輪は用意してあるから」

「しよ、翔子！？違うんだ！しかも、首輪ってなんだ！話が飛躍しすぎだ！！」

「……問題ない。」

ガチャ

雄二の言い訳を聞こうともせず首輪ははめられどこかに連れ去られていった。

その直後、俺の携帯のメール着信音のアニソンが鳴り響いた。  
マナーにするのを忘れてたな。

【Message From 坂本雄二】  
たすてけ

多分『助けて』と打ちたかったんだろうけど……………まあ、ドンマイ。

「で、お前らは今なんか話してたのか？」

「えーっと、放課後の勉強会をどうしようかって話をしてたんだ」

「ん？また場所がないってか？」

「それもあるんですけど私の昨日の我が儘でお父さんたちにすごく怒られて週末までの間学校以外は外出禁止にされてしまったんです」

姫路（雄二もか）がいなくなったことで教える側の人が少なくなっ  
たってことか。

「…………じゃあ、しょうがない。週末までは俺が文系中心を。優子と  
島田もか。二人で理数系を教えあう。場所は俺ん家だ」

「週末までとはどういうことじゃ、慶太。」

「今週末は霧島の家でみんなで勉強会だ。しかも泊まり掛け。もち  
ろんこれは霧島が言い出したことだから了解をとるなんてことはし  
なくていい」

「すごいね！それは本当に助かるよ」

明久は喜びを顔に表しているがまだ他のやつは行くって言ったわけじゃないから一応聞いておこう。

「まあ、強制じゃないから行くか行かないかは自分次第だ」

「ワシは行かせてもらっぞ」

「……………参加する」

「週末ならウチも多分大丈夫よ」

「私も大丈夫です。ダメでも、なんとか両親を説得しますっ！」

みんな行くようだな。

雄二は……………繋がれてるから大丈夫だろう。

## 第二十五問（後書き）

五巻分の話はあと2話ぐらいだと思います。

## 第二十六問（前書き）

今回は今までで一番長い話で慶太と優子が一番イチャついていた回になってしまいました。

## 第二十六問

山崎慶太の特別世界史試験！！

今回、俺こと山崎慶太が明久たちに世界史の問題を出します。期末試験の範囲とは違うが頑張ろう！

1905年に特殊相対性理論を発表したドイツ生まれのユダヤ人理論物理学者の名前を答えよ。

姫路瑞希の答え

アインシュタイン

慶太のコメント

正解！

光量子仮説に基づく光電効果の理論的解明でノーベル物理学賞を受賞したりしてるから世界的に現代でも有名な人だな。

土屋康太の答え

## 写真の人

### 慶太のコメント

確かにあの舌を出している写真は有名だな。  
ちなみにあの写真は切手にもなってたんだ。

### 吉井明久の答え

## 舌の人

### 慶太のコメント

やはりそう来たか。

あの写真について説明すると、普段人前ではめったに笑顔を見せないと言われているアイنشユタインが72歳の誕生日にあるカメラマンの

「笑ってください」

というリクエストをされて危うくそれに応えてしまいそうになり、  
とっさに笑顔を隠そうとして舌を出したそうだ。

それよりお前、こんな調子で大丈夫なのか？

結局、雄二は霧島に連れていかれてから帰ってこず週末までの三日間一度も学校には来なかった。

一体、何をされたんだ……

まあ、そんなことはどうでもよくて約束の週末までは雄二、姫路抜きでの勉強会を俺の家でやった。

自分の家ということで優子とイチヤイチヤばかりしていたのだが勉強もしっかりやったからな。

そして、やってきた土曜日。

霧島宅での泊まり掛けの勉強会の集合時間は午前十時なのでゆっくり朝食をとっている。  
もちろん優子と一緒に。

「やっぱり優子の作るご飯は美味しいよ」

朝食の当番は優子だ。

朝食なので特に凝ったものは作ってないが味噌汁もいい味が出てい

るし優子がつけた漬け物も美味しい。

「慶太の方が美味しいよ」

「そうか？もうたいしてかわらなと思うぞ」

「そんなことないよ」

「いや、本当だって。マジで旨いから何杯でもご飯はいけるよ」

「ありがとう、慶太」

「俺の方こそいつもありがとうな。好きだぞ、優子」といい、優子の髪を撫でる。

それに笑顔で返してくれる優子。

ダメだ。幸せすぎるだろ、俺。

とここでテレビから知っている声が流れてきた。

「あつ、おじさんだ。また解説員で出てるね」

「まあ、それも仕事のひとつだからな。遺跡調査ばかりしてても何も見付からないときのほうが多いからこういうのもまめにやっていかないといけないし」

そうだね、と優子が返してくれたとき家中にチャイムが鳴り響く。

「誰だろ」

「俺行くよ」

優子が立つのを制して玄関に向かう。

『宅配便です』

とチャイムから数秒後に聞こえたので判子も携えていく。

玄関の扉をあけると二十代前半の男が立っていた。

この人は俺の家がある地区を担当している某宅配会社の佐藤さんだ……、いやすまん。今の名前は嘘だ。

一応プライバシーなので伏せておこう。

「いつもの親父さんからのだぞ！」

「ありがとうございます。それより彼女とはどうですか？」

「今のはところは順調だ。だが、お互い時間があわなくてな。最近  
は電話とメールばかりだ……」

会話の通り佐藤さん（仮）には付き合いはじめて三ヶ月の彼女がいる。

定期的に親父から来る荷物を毎回届けてくれる佐藤さん（仮）とはすぐに仲良くなり付き合う前から年下ながらアドバイスなんかをしたりしてる。

「大丈夫ですよ！電話はどれぐらいの頻度でしてるんですか？」

「あーっと、二日に一回ぐらいか」

「もうラブラブじゃないですか」

全然危機なんてないじゃんか。  
俺も安心だ。

「それならいいんだが。まあ、次の配達もあるから行くな。いつもありがと」

「頑張ってくださいねー」

なんか初々しいな。俺にもあんな時期があったのか？

まあとりあえず戻ろう。

つてか、テスト期間中にこれ寄越すなよ。

一応俺だって勉強頑張ってるんだから……。

「なんだったの？」

「親父のいつもの」

封を開けると中に入っているのは例のごとく親父の研究資料と一枚の紙。

紙には親父の字で

『火曜には帰る』

と書いてあった。

火曜日と言えばテスト二日目。

まあ最終日なわけだから優子をデートにでも誘おうかと思ってたんだがどうせ討論するだろうから無理そうだな。

それに……

「火曜日ってことはちょうど私が帰ってるときだから家族団らんでたのしんでね」

優子が家に帰ってるのだ。優子が俺との同棲をする条件として優子が二ヶ月に一回、一週間だけ家に帰るとご両親と約束している。

それがテストの始まる月曜日からなのだ。

「優子がいないと寂しいなあ」

「私も寂しいけど我慢しないとね」

しょうがないよな。

優子のご両親に認めて貰ってるんだからこれ以上の我が儘は言えない。

「うん。じゃあそろそろ準備しようか」

「うん！」

「……優子、山崎。いらっしやい」

優子から聞いていた通りかなりの豪邸だ。

「「お邪魔しまーす」」

玄関もまた豪華で何人でもすめそうな家だ。

「代表。もうみんなそろってる？」

「あとは吉井だけ」

まだ集合時間の十時になってないが少し遅くなったと思ってたけど  
やっぱり最後の方だったか。

そして霧島の先導によって玄関から続く長い廊下を歩いていく。  
両端には用途別のたくさん部屋のあり書斎やらシアタールームな  
ど羨ましいものばかりだ。

「……………ん？」

なにやら不審な部屋を見つけてしまったので立ち止まってしまっ

部屋の入り口には鉄格子がはまっている。

気になる！

マジで気になるんだが少し予想できしまい逆に怖い。  
聞くべきなのか！？

これは霧島に聞いていいのか？

「……山崎。そこは雄二の部屋」

やっぱりかああ！！！！

悪い予想が的中してしまったぜ。

さあ、忘れようか。

雄二のことだからあとで復活してくれるさ。

再び奥に進み、暫く歩いたところで霧島が立ち止まりドアを開ける。

「……優子と山崎をつれてきた」

「おつす」

中に入ると先ほど霧島が言っていた通り明久以外のメンバーが集まっていた。

「少し遅かったようじゃな、慶太」

「ああ。優子とゆっくりしすぎてたら出るのが少し遅れてしまったな」

「……………憎い」

秀吉と康太が歩み寄ってきて男子組で話が始まる。

一方優子は姫路、島田、工藤の元に行き会話に加わる。霧島はまたチャイムがなったのでまた玄関に向かう。

『あつ、瑞希ちゃんポニテだ。似合うね』

『ありがとうございます』

『それにしてもずるいわよ瑞希は。』

『ん？なにがずるいの、美波ちゃん？』

『それがこの間アキの好みが巨乳でポニテールだってわかったの。だから瑞希、今日はポニテできたのよ』

『そ、そんなことありませんよ美波ちゃん！たまたまそんな気分になっただけです』

『ハハハ。分かりやすいね瑞希ちゃんは』

『うん。確かにそれだと瑞希ちゃんが一步リードね。私も羨ましいもん』

『優子ってばそんなこと言って最近大きくなったんじゃない？』

『ええっ！？』

『やっぱり揉んでもらうと大きくなるのか』

『な、なに言ってるの！？』

『さすがです、優子ちゃん』

などところらまで聞こえる声でガールズトークをしている。

「康太！。大丈夫か？」

「……………問題ない……………がやはり憎い」

今の話を聞いて鼻血が出てしまったようで手で押さえている。  
人ん家を血で汚すなよ。

「あ、みんなもう来てたんだね」

ドアが開く音がして振り向くとそこには明久が。

「おう、遅刻しなかったか明久」

「まあね。でも雄二が……………」

雄二のことは気にしない方がいいぞ。そのうち復活してくれると思うから……………ん？明久の言葉が途中で途切れた。

明久を見るとある一方を見て口を開けたまま固まっている。  
そこには先ほど優子たちが話していたポニーテールの姫路が。

まあ、好きなんだから見惚れるよな。

大きくてポニーテールが好きらしいからな、参考書によると。

「……………はっ。雄二がまだ来てないみたいだけど」

正気に戻ったみたいで先ほど言いかけた言葉をまた口にする。

「そつえばまだ見てないのう」

「大丈夫だ。雄二ならなんとか復活」

じゃらじゃら

鎖が擦れる音と共に横たわる雄二が俺たちの前に登場した。

「ほ、ほらな」

三日前からずっと首輪をしていたと言うのか……。

「ん？みんな……。どうしてここに……」

「……ああ、うん。霧島さんのご厚意でね……」

「雄二よ。お主は今日の勉強会の話は霧島から知らされておらんかったのか？」

未だ首輪が外されていない雄二に秀吉が尋ねる。

「ああ。なにも聞いてない。三日前のあの日からずっと監禁されていたからな」

雄二「……………苦労してるんだな。」

「でも、それなら雄二は勉強道具がないんじゃないのか？」

「……………大丈夫。準備は万全」

霧島の手には雄二の鞆が握られていた。

着替えもあるようだしさすが未来の奥さん。

「じゃあ、勉強会を始めようぜ」

「そうじゃな。それがいいじゃろ」

『ねえ、優子！そろそろはいっちなよ』

『そうよ。山崎とどこまでやったのか教えてよ！』

『気になりますよ、優子ちゃん！』

『ええ……つと、それは……』

そうしないと優子が尋問に屈してしまいそうだし。

「じゃあ明久には新たな覚え方を伝授しよう」

「新しい覚え方？」

現在は明久に世界史を教えている。  
勉強会を始めてからもう何時間も経っているのだがこれまでは俺が  
優子に数学を教えてもらっていた。

あんまりやりたくなかったんだけど、雄二が絶対やれと言つのと優  
子が教えてくれるってことだったので頑張ってみました。

「そうだ。世界史は同じ年代でも色んな国についてやってるからが  
むしろに暗記するなんてことはしないで同じ年代、同じ年にそれ  
ぞれの国で起きたことをまとめて覚えるんだ」

実際俺は使ってないんだがな。  
使わなくても覚えれたし。

「それぞれの国で？」

「そう。例えば……、三國志わかるだろ？」

明久に分かりやすいと言えばゲーム関連だな。

「うん。三国伝とか無双とかで結構覚えてるよ」

「その魏・呉・蜀の三国時代が始まった六年後に今回テスト範囲の  
ササン朝ペルシアが成立している。他にも220年には曹操が、2  
23年には劉備が死んでいる年だ。どっちも明久が好きな武将だろ  
？」

「うん。確かに同じ年代でまとめたら覚えやすそうだね。曹操みた  
いに好きな武将がいたらもっと記憶に残るしね」

「そうだ。今の明久にはこれで覚えていくのが一番効率がいいだろう」

それと明久には俺から更なる秘密兵器をやろう。

「あとこれもやるよ。暗記ように作ったさっきいつてたように時代ごとにまとめたやつだ。で、ある程度覚えたと思ったら俺が作ったこの試験予想問題を解く。何回も積み重ねが重要だからな。まあ、これはみんなの分も用意してあるものだけだ」

「さすが慶太だね。これなら本当になんとかなるよ」

「なんとかするために頑張ったんだ。てか、これ使うのはまだ先だ。時間がある今は俺がみっちり教えてやるよ」

「はい！先生！」

やっぱりやる気満々だな。まあ、その方が教えがいがあるってものだ」

時間は過ぎ明久への先生としての仕事は大体が終わっており明久には先ほど渡した試験予想問題をやってもらっている。

その間、俺は今朝親父から送られてきた資料に目を通して  
いる。勉強は……まあ気にしない。

俺たち他のやつらはというと優子と姫路は真面目に自習。

秀吉と島田は雄二に国語、まあ古典を教えてもらっている模様。

康太と工藤は相変わらずというか保健の勉強をやっているの  
だろうけど康太の出血量が本格的にヤバそうだ。

残る霧島はというと30分前ぐらいに部屋を出ていったきり  
なのだが………お、戻ってきた。

「……そろそろ夕飯だから、別の部屋に来て」

そういえばもう六時を回っている。

「よし、そこまででいいだろう明久。飯行こうぜ」

明久が限界まで書いたのを見届けてからそう言う。

「そうだね。出来る限り書いたからな」

立ち上がり少し背伸びをする。ずっと座っていると肩が凝るな。

「……案内するから、ついてきて」

「「「はい」「」」

先導する霧島に雑談しながらついていく。

「いやー、最近はまともな食事が摂れて嬉しいよ」

「玲さんがいるもんね、吉井くん」

「そうですよ。明久くんはもう少し生活を見直すべきだと思いますけど……」

「一応、掃除や洗濯はきちんとやっているんだけどね」

姫路の言うことはもつともだ。

「明久は使えるだけの金を全部ゲームや部屋の至るところに隠してある参考書につき込んでいるから悪いんだ。もつと計画的に使えよ」

「ちよつとまつて！僕はそんな至るところに隠すほど持っていないよ！それに、慶太はいいよ。家がお金持ちだからお小遣いも多いじゃないか」

「それはしょうがないだろ。とにかく俺が言いたいのは金は計画的に使えってことだ」

「わかつたよ……」

やつとわかつたか。

まあ明久のお陰で俺も色んなゲームが出来るのだからどうしても金がないときは俺が弁当を作ってやっても構わないんだが。

「それより吉井くん」

「何？工藤さん」

そんな明久に先ほどまで康太と討論していた工藤が話しかける。

「そんなエッチな本より僕が実技で教えてあげようか？」

「え、遠慮しておくよ！」

「そうですね、愛子ちゃん！明久くんにはそんなもの一生必要ありません」

「そうよ！アキには絶対いらないわよ！」

おい、二人……。

明久がものすごくへこんでるぞ。

「アハハ。ごめんごめん。じゃあかわりにムッツリー二君にあげようかな（チラッ）」

「……………不意打ち……………っっ！！（ブシャアア）」

もう康太を死に近づけないでやって来れ工藤。

でも、なんか……………。

こいつら楽しいな。

つといい香りがしてきたな。

「……………この部屋」

先頭の霧島が立ち止まった部屋の扉を開けみんなで中に入っていく。

「す、凄い……っ！」

「わぁ……」

「これはまた、贅沢じゃな」

やっぱり流石と言えるほど豪華だ。

この人数でも充分余裕のある豪華なダイニングテーブルに所狭しと並べられている中華料理。

北京ダックにフカヒレの姿煮。チンジャオロースやホイコーロー、八宝菜に麻婆豆腐、エビチリ等々たくさん並んでいる。

確か霧島家には専属の料理人がいるらしいからこわな旨そうなものを作られているのも頷ける。

「よし、食うか」

「……いただきまーすっ……」

雄二の言葉で全員が席につき夕食が始まった。

さて、まずは目の前にあるエビチリを食べようかな。

そういえばエビチリ、中華料理と言えば前に俺の家でみんなに作ってたよな。

そのとき霧島が俺が作っているところを見たいっていつて俺の後ろに立ってたり料理は好評価をもらったりしたっけな。

うん？

このエビチリの味……

「慶太。このチンジャオロース……慶太の味に似てるよ」

優子も気づいたか。

「霧島。この料理……」

「……エビチリとチンジャオロースと麻婆豆腐は私が作った」

やっぱりか。

って、俺の料理を一回見ただけで覚えただけなのか？

恐るべし、学年一位。

「え！？すごいね、霧島さん！本当に美味しいよ」

「確かに旨いのう。しかし、慶太の味に似とるな」

秀吉も気付いたみたいだ。

「……前に見た山崎の料理を参考に作ったから」

「だが、翔子。それって一回だけなはずだが……ってなぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ」

「……おかしい薬なんて入っていない」

まったく。

こんな霧島の才能には驚かされる。

「慶太。あーん」

「ん、優子。あーん」

モグモグ……。

このままじゃ俺の上をいくかもしれないな。

「優子。あーん」

「あーん」

俺も更に精進しなくちゃな。

「翔子。なぜ俺のコップに注いだ飲み物だけ毒々しいピンク色をしているんだ」

「……怪しい薬なんて入っていない」

それから、また豪華な料理を食べ続ける。

流石に俺でもツバメの巣などの高級食材なんかは調理したことないし、新鮮だ。

そして、最後に締めとなるデザートは杏仁豆腐を味わっているとこ  
ろで霧島が雄二に話しかけていた。

「……雄二」

「なんだ翔子？」

「……勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配はいらねえ」

「……本当に？」

「ああ。次のテストではお前に勝つちまうかもしれないぞ」

「……そう」

「そうしたら俺は晴れて自由の身だな」

楽しげに笑う雄二を見て、霧島の目がスツと細くなった。

「……そこまで言つのなら」

「ん？」

「……勝負、する？」

ほう。

これは面白い展開だな。

「勝負だと？」

「……うん。雄二がどの程度できるようになったのか、見てあげる」

「ほほう……。随分と上からの目線で言ってくれるじゃねえか」

イケイケー

「……実際に、私の方が上だから」

「くつ。上等だ！勝負でも何でもしてやろっじゃねえか！本当の実力の違いってヤツを見せてやらあ！」

なんだか、今日の雄二はいつもより抜けている感があるな。

「……わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復讐テストで勝負」

「おうよ！今までの俺と思うなよ！」

「……それで、私が買ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「は？」

目が点になる雄二。

いつもの雄二なら予想できただろうに。

「ゆうじー。明久がフォーク持って臨戦態勢だぞ」

「……憎い……憎いユウジ憎い」

「な、待て明久！」

急に焦り出した雄二だが明久は容赦なく襲いかかろうとしている。

まあ、冗談だろうが。

「いいな。そういうの、面白そうだね。ボクも何かやりたいなあ」

と工藤が話す。

なんか企んで……あの笑みは絶対そんな気がする。

「……愛子も勝負する？」

だが、まあスルーしよう。俺と優子に影響が出るならそのとき対処すればいい。

ということで隣にいる優子に杏仁豆腐をぁーんで食べさせてあげる。

「それもいいけど、折角だから……そのテスト、皆で受けて、その点数で部屋割りを決めようよ」

「よしっ！望むところ…」

「だ、ダメですそんなことっ！明久くんにそういうことは、えっと、その、まだ早いと思いますっ！」

お返しにと言わんばかりに優子も笑顔で俺に杏仁豆腐を食べさせてくれる。

あゝ。やっぱり可愛いなあ。

「でも、保健体育のテストの為に吉井くんがボクと実践を経験しておくのはイイコトだと思うよ？」

「ダメですっ！そんなのいけませんっ！」

「保健体育のお勉強、ボクが吉井くんに教えてあげたいな」

「ダメったらダメです！絶対にダメですっ！工藤さんがそんなことをしようとするのなら……私が明久くんと一緒に寝ますっ！」

「えええええっ！？ 姫路さん何言ってるの！？」

もう可愛すぎるので優子のきれいな髪を撫でる。

このときの照れる優子もまた可愛すぎて苦しいです。

「み、瑞希！ 何言ってるのよ！ そんなのダメに決まってるでしょ！？」

「でも、美波ちゃんだって明久くんの本を見たならわかるはずですよ！ 明久くんだって男の子なんです！ 本なことに興味津々なんです！ 工藤さんと一緒に寝たら大変なんです！」

「確かに、アキの持っていた本の四冊目にはショートカットのコモ載っていたけど……」

優子も俺に甘えてくれて俺の肩に頭を預けてくれている。

「ですから、明久くんを守るために、私が一緒に寝ますっ！」

「そ、そうねっ。アキを守るためにウチと一緒に寝てあげないとねっ！」

「いやいや、お主らは慌てすぎじゃ。別にこの提案に乗らなければ済むだけの話じゃと」

「勝負です工藤さん！ 私、明久くんの為に負けませんっ！」

「そうね！ アキの為にウチと一緒に寝るとするわ！」

「あははっ。二人ともやっぱ面白いね。そうこなくっちゃ」

回りがうるさいけど俺と優子の間にそんなものは関係ない。二人だけの世界が形成されつつあるからな……ん？秀吉？

「済む……だけの話じゃと……思うんじゃが……慶太、姉上といつまでもイチャついておらずこちらをおさめてくんかのう……」

「ごめん。聞いてなかった」

すまないな、秀吉。  
マジで聞いてなかったんだ。

「……じゃあ、まだ開けていない新品の模擬試験を持ってくる」

「待て翔子！俺はまだ承諾してないぞ！」

「……決定事項。さつき雄二は勝負するっていった。反対意見は認めない」

「ぐ……っ！そ、それはそうだが……！」

ん！

頬に衝撃が走る。

その原因は優子が俺の頬にキスしたからだ。

……ヤバイです。

理性が保てるかわからなくなってきたぞ……。

「つと、すまん翔子！服にかからなかったか？」

「……大丈夫」

「いや、大丈夫じゃない。お前には見えづらいかもしれないが、服の裾のその辺にかかったみたいだ」

「……それは困るかも」

「悪い。俺の不注意で……」

「……あの薬は繊維を溶かすから」

「待て。お前は俺の飲み物に何を入れたんだ」

何やら雄二は焦っているようだがもうどうでもいい。それより、俺の理性が持つかが問題なんだ。

「……着替えてくる」

「そうした方がいいだろうが……それなら、ちょっと早いが先に風呂にしないか？腹ごなしも兼ねてな」

風呂か……。

危なかったぜ。

「……わかった。それなら先にお風呂にする」

「んじゃ、模擬試験はその後だな」

「……うん」

ということで着替えの用意のために男女別々の部屋に向かうことに。みんな足早に部屋を出ていくので俺と優子は自然と最後尾になった。

「じゃあまた風呂の後でな、優子」

といい優子に口付けする。

「うん！　また後でね、慶太！」

やっぱりその笑顔は天使そのものだ。

## 第二十六問（後書き）

五巻分は多分次で終わります。

第二十七問（前書き）

五卷分の最後です

## 第二十七問

次の英文正しい日本語に訳しなさい。

『I wish I had a big sister』

山崎慶太の答え

姉がいればいいのになあ

教師のコメント

正解です。

仮定法の重要な文法の一つなので忘れないようにしましょう。

吉井明久の答え

姉なんていりません！

教師のコメント

不正解です。

もう一度仮定法をしっかり勉強してください。

しかし、ただ間違えただけではないような気がします……。

「さて、行くか」

部屋に入り、風呂の準備をし終わった所で雄二が立ち上がり言った。

「了解。覗きだね？」

「……………任せておけ」

「お主らはどこまでバカなのじゃ……………」

「そつだぞ……………。冗談じゃないとお前ら死ぬぞ？」

友人だからといって本当に殺意が沸いたぞ。

風呂には優子も入るんだ。

「そんなことしたら本当に慶太にやられるぞ」

「え？ 雄二も覗きに行くつもりじゃなかったの？」

「そんなわけあるか。俺が行こうと行っているのは翔子の部屋だ」

「え？なんで？」

ん？

霧島の部屋？

「決まっている。さっきの話にあった模擬試験の問題を盗み出した  
めだ」

「待て、雄二。さっきの話とやらを聞かせてくれ」

「ったく……。本当に聞いてなかったのか、慶太」

俺と優子の間に他の声は入ってこないさ。

「勿論！」

「そんな自信もって言うな。で、簡単に言つとだな……全員で模擬  
試験をやることになった」

全員でか……。

まあ、それなら大した問題はないと思うんだけど。

「そして、その点数で部屋割りが決められる」

「そうか。点数の一番高い奴から好きな相手を選び同じ部屋になる  
つてこてか」

そうになると、予想される順番として

？霧島？姫路？優子？俺？工藤

上位五人はこうなるから……俺は優子に選ばれるから問題なし。

「問題ない」

「お前には問題なくてもこっちには大有りなんだ。明久とムツツリ  
ー二もそうだ」

「僕たちにも？」

「そうだ。まず点数的に一番の翔子は俺を選ぶ。そして、二番の姫  
路は明久を選ぶだろう」

確かに妥当だ。

つてか、別に雄二いいだろう。

「さっきから思っていたけどなんで姫路さんはボクを選ぶんだろう」

この鈍感野郎め

「そこで、明久。よく考えて見る。お前の家に帰ってきている姉貴  
は、何を禁止していた？」

「えっと、？『ゲームは一日三十分』、？『不純異性交遊の全面禁  
止』……ってヤバいっ！！すっかり忘れてたっ！！」

それでもばれなければ済む話じゃ……。

「あ。でも、バレなければ」

「協力しなければ俺がバラす」

「外道っ！この外道っ！」

ぬかりなし、ということか。

「で、三番の木下は慶太を選ぶ。四番の慶太は既に選ばれているから五番の工藤はムツツリー二を選ぶ」

「出血多量で死んでしまいかもしれんのう」

「……………つく！」

これで、二人は雄二に協力するわけか。  
別に俺は反対というじゃないけど。

「ワシも協力しよう」

「え？秀吉が？どうして？」

と明久が聞く。

「どうしても、じゃ」

友情のためか？

たまに秀吉の言動がわからなくなるんだが。

「あとは慶太だ。こつちとしては出来るだけ人数が多い方が助かるかな」

「無理にでもって訳じゃなさそうだけど？」

「お前には脅迫材料がないからな」

「じゃあ、行かない。勝手に女子の部屋に入るのは気が引けるし。雄二たちが帰ってくるまで待ってるよ」

「そうか。まあ、しゃーない。それじゃあ行くぞお前ら。翔子の口ぶりから察するに、テスト問題はアイツの部屋にある。そこに忍び込むぞ」

「了解」「」

四人は部屋を出ていった。じゃあ俺は親父の研究資料を読みながら待つかな。

しばらくすると四人は逃げるようにして部屋に帰ってきた。

「成果はどうだったんだ？」

「それならワシがそれらしきものを軒並み開封しておいた」

じゃあ模擬試験はな什てことか。

そしたら、部屋割りはどうなるんだ？

男女別か？

「じゃあワシらも風呂に入りに行くかの」

「そうだね。それじゃ、秀吉はまた後でね」

「待ていつ。ワシも男湯じゃ」

やっぱり言うと思った。

「違うぞ秀吉。秀吉は明久たちと違う風呂だ」

「な！？慶太までワシを女としてみるのか！？」

そんな訳はない。

秀吉は歴とした男だ。

ちゃんとしているし。

「違う。さつき、みんながいない間に霧島が来て秀吉専用の浴室を用意したて言つてた。だから、そち行くぞ。俺も一緒に入るから」

「……むう。わかつたのじゃ。慶太が一緒ならいいが、やはり……納得がいかなのう」

「でも霧島さんもよくやるよねえ。秀吉一人のために専用のお風呂

作るなんて」

まあ霧島からしたら雄二と入られるよりいいんだろな。

「まあ、そういうことならさっさと行こうぜ。本当は風呂どころじゃないんだがどうしようもないからな」

よし！

やっと風呂だな。

そういえば秀吉と風呂に入るのも久しぶりだな。

風呂に入ったあと結局、模擬試験はなくなったのでまた勉強の続きをやること数時間。日付が変わった辺りでそろそろ寝ようということになった。

だけど、一つ不安がある。女子が五人も同じ部屋で泊まるのなら恋ばなをしないはずがない。そこで、優子が口を滑らして俺との関係がどこまで進んだのか喋ってしまうかもしれない。

いや、ダメじゃない訳じゃないんだけど恥ずかしい。

でも女子組はもう部屋に行ってしまったし、俺たちも五人同じ部屋でもう寝る支度を始めていた。

〈女子部屋での会話〉

『あれ？私の髪留め、どこにいったんでしょう？……ここに置いておいたはずなのに』

『なくしちゃったの？』

『そうかもしれません』

『……探すの、手伝う』

『あ、いえ。また明日の朝にでも捜します』

『じゃあそのときは私たちも手伝うよ』

『ありがとうございます』

『そう言えば、瑞希っていつもあの髪留めをしてるわよね』

『……思いでの品、だとか』

『んっふっふ。ボクの予想だと、好きな人からの贈り物って感じなんだケド？』

『いえ。あれ自体は自分で買ってきた普通の髪留めです。思い入れはありますけど』

『それ気になる。教えてよ瑞希ちゃん』

『残念ながら、それはヒミツ、です。それより、私は優子ちゃんと山崎くんのお話のほうになります』

『え！？話すことなんて何もないよ』

『聞くことならたくさんあるわよね。馴れ初めの話とか告白の時の話とか……』

『Hな話とかね!』

『だ、ダメ!そんなこと……恥ずかしくて……… いえないよ』

『……気になる』

『ダメ!!言わない!!わ。私の話よりあ、愛子の話のほうが気になるよ』

『え?ボク?』

『それはウチも気になるわ』

『私も気になりますっ!』

『ふふっ。三人とも、そんなにボクのHな話が聞きたいのかな?』

『そっちじゃなくて、土屋くんとの関係よ』

『ふえう！？』

『……それは私も気になる』

『な、何を言ってるのさ四人ともっ。ボクとムツツリー二くんがどうこうだなんて、そんなことあるわけないじゃないっ』

『そうやって否定するところが怪しいですね』

『……いつもの愛子なら笑って受け流す』

『ち、違うってば！ボクもムツツリー二くんもそんな気は全然ないよっ』

『そんなことないかもしれないよ。土屋くんたちも似たようなこと言っているかもしれないよ？』

『お泊まり会の定番よね』

『そうですね。きっと向こうの部屋でもきつと土屋が尋問されているだろうし素直に言っちゃいなさい』

『……言えば楽になる』

『だから、あんな頭でっかち、ボクは全く興味がないって言うてるのにー！』

雄「坂本雄二から始まるっ」

「「「イエーツ！」」」

「古今東西っ」

「「「イエーツ！」」」

雄二から勢いよく始まったのは古今東西ゲーム。

負けた人が先ほど一人ずつ書いたバツゲームの中から一つ選び実行しなければいけないんだ。

「一部生徒の間で噂になっている明久の恋人の名前っ」

そう来たか、雄二。

パンパン

雄「久保利光！」

「ダウト！それダウト！久保くんは男だから！」

パンパン

康「……………坂本雄二」

「嫌だあつ！それはなんとなく知っていたけど改めて言われると凄く嫌だあつ！」

「俺だつて嫌だボケ！」

パンパン

秀「え、えつとえつと……ワ、ワシじゃ！」

「……………」

「あ、明久！？そこで黙り込んで頬を染められるとワシも困るのじやが！？」

自分で言ってしまったから自業自得だ、秀吉。

さて、次は俺の番。

面白い回答はもう出てるしな。

パンパン

まあ、この空気ならいつか。

あれでいいころ。

慶「吉井玲！」

「それもダウト！それ姉さんだからっ！しかも、生徒の間で噂になんて……」

パンパン

よし。

セーフだ。

「え！？し、島田美波！」

「『『罰ゲーム決定っ！』』」

まあ、明久だからな。  
仕方ない。

「さあ明久くじをひくのじゃ」

「うう……。なんだか納得いかない……」

「いや、明久以外みんな納得しているからいいんだ」

渋谷雄二が持っている袋の中から一枚の髪を取り出す。

「『女子部屋に行って姫路さんの髪留めを戻してくる』って、コレはボクの書いた罰じゃないか」

なんだ……。明久は自分で書いたものをひいたのか。

「なんか面白くないな。みんなは何を書いたんだ？」

気になる。

俺は完全な嫌がらせなんだけど……。他のみんなはどんなことを書いたんだ？

「俺は『翔子の部屋から婚姻届をダッシュしてくる』だな。当然、盗ってこれるまで何度でもトライしてもらおう」

「ワシは『本気女装写真集の撮影』じゃな。ワシの苦しみも味わうべきじゃ」

「……………『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めている写真はなかなか撮れない」

みんなは完全に個人的な目的だな。

「慶太はどんなこと書いたの？」

「俺は『ジグソーパズル砂漠と雲一つない空』をやるだ」

「なんて鬼畜なお題じゃ……………」

「本当に自分のでよかったよ」

実は前々から持っていたんだけど一面の砂漠と空の青にやる気がおきなくてずっと押入れにしまってるからな。

「さて。それじゃあアイツらが寝静まるまで適当にダベるか」

……………ん。

優子からメールだ。

何々……………。

『こっちの部屋で愛子と土屋くんの関係について話が盛り上がった

てるよ。愛子の反応が面白すぎてみんなでいじってる。そっちでも聞いてみれば?」

とのことだ。

確かにあの二人はよく話してるし際どいスキンシップもたくさんとっているからな。

気になるところでもある。

「そうじゃな。疲れておるだろうし、小一時間もしたら眠っておるじゃろ」

「……………お題は?」

よし。

ここはこれで。

「康太と工藤の関係でどうだ?」

「……………!」

「それはいい案じゃな」

「そうだな。お前らよく話しているしなんだかんだ言っているいい雰囲気だしな」

「そうだね。ボクも気になるよ」

「……………なつ、何もない」

動揺してるぞ?

「白状したほうが楽になるぞ、康太」

「そうじゃぞ」

「ここは言つべきだよな」

「……………（ブンブン）」

……………

……………

……………

しばらく俺たちと康太で問答が繰り返されたが結局最後までしゃべらなかつた康太。

面白くないな。

まあ、先ほどもう寝ると優子からメールが来たからいい時間にはなつたからか……

「明久。あつちはみんな寝たみたいだからいいぞ」

「わかつたよ」

渋々というかんじで部屋を出ていく明久。  
その後には雄二の姿も。

「雄二もついていくのか？」

「ああ。俺は俺でやることがあるからな」

なにやら手にはガラス用カッターを持っているけどそんなものどうするんだ？

「ならば、ワシと慶太とムッツリーニは廊下から見ておるかの」

「……………面白いハプニングを期待してる」

「そうだな」

部屋を出て俺たち三人は女子部屋の近くで待機する。  
しばらく三人で雑談して待っていたのだけどそれは途中、雄二の悲鳴によって中断されてしまった。

翌日の昼すぎ。

勉強会は終了となりそれぞれ帰途についていた。

俺は優子と秀吉と一緒に帰っているのだけと行き先は違う。

「やっぱり帰っちゃうんだよな、ゆうこ」

「……うん。しょうがないしょ……」

優子のご両親との約束で一週間も家に帰らなければならない。

「まあ、一週間なんてすぐじゃ。しかも、学校でも毎日会えるのじやし」

そうだよな、我慢だ。

「それじゃあまた明日、優子」

「うん！じゃあね慶太」

「じゃあのお、慶太」

木下家につき二人と渋々別れる。

まあ俺の家も近所だから会おうと思えばすぐ会えるんだけどね。

そして、テスト当日。

いつも通り優子と秀吉を向かいに行き三人で当校してきて、教室に入ると明久が熱心に勉強していた。

うん。やる気十分だな。

昨日やった感じだと結構いい点数がとれそうだし独り暮らしはなんとかなりそうだな。

「よしお前ら、席につけ。」

時間ぴったしに鉄人がやって来て朝のHRが始まった。たいして連絡事項がなかったのですぐに終わり教室を出ていったので俺も明久を見習って復習でもしてみる。

取り敢えず一時間目の現国だな。

語句の意味の確認やワークブックの範囲の見直しなどをする。

そして、五分ほどすると監督の先生がやって来て、

「はい、勉強道具をしまってください。一時間目のテストを始めますよ」

といい、解答用紙から配られる。

よし、今日は得意教科が多いしやる気がする。

「では始めてください」

〈現代国語〉

『四面楚歌』という言葉の正しい意味を次の選択肢の中から選びなさい。

？孤立して助けがないこと

？歌ばかり歌って何もしないこと

？楚という国の歌のように、四方に伝播しやすい物事を示す喩えのこと

？四面のBGMが楚歌であること

うむ。

これは簡単だな。

答えは？と。

リーディング  
〈英語〉

次の It の意味する内容を日本語で書きなさい。

It won't take you more than minutes to your home.

警告

『それ』と書いた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます。

これも楽勝。

こういうのはこの文の直前に書いてあるものだ。

……あつた。

それよりこの警告はなんだよ。

完全にバカ（Ｆクラス）たちのために書いてあるようなものじゃん。

そして明久にとって一番重要な世界史の時間。

俺も最高点を目指すつもりなので真面目に頑張るか。

「よしお前ら。テストを始めるぞ。筆記用具以外は全部しまつように」

監督の先生は鉄人か。

野太い声が教室に響く。

「一枚ずつ取って後ろに回すように。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておくこと。いいな？」

前の席から来たテスト用紙を受け取り裏返しにしておく。

キンコーン――

そして、始まった。

まず始めに名前を書いてと……。

さすがに振り分け試験の二の舞は避けたいからな。

よし。

第一問は神権政治だからイ……第二問は甲骨文字……第三問は穴埋

めで豎穴と……。

さすがに最初は簡単すぎるな。

早く最初のほうをといて難しい方にいかないと面白くない。

よっし！

気合いいれてこつ。

……

……

……

キンコーン――

「よし。ペンを置け。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」

ふー、終わった。

チャイムが鳴るまで問題を解き続けた。

あー……、最後に書いた選択問題間違えたかも。

『おい朝倉。往生際が悪いぞ。早く渡せよ』

『ま、待ってくれ！ここだけ直してから』

『朝倉！チャイムは鳴ったぞ！諦めてペンを置け！』

鉄人に怒鳴られる朝倉。

諦めろよ……どうせもうチャイムは鳴っているんだから意味ないだろ。

その後、順調に集められた解答用紙を専用の袋に詰めて鉄人は教室から出ていった。

明久、どうだったんだろ。聞いてみるか。

立ち上がり明久の近くまで行きテストの成果を聞いてみる。

「どうだった明久？」

「ああ、うん。慶太に教えてもらったお陰で今までで一番よく出来たよ」

ほう。

まあそれはよかったことだ。

「俺が教えてやったんだ。よくて当然だ」

「そうだよね。あはははっ」

「当たり前だぜ」

「うん……ははっ……」

うん？

次第に明久の声が小さくなっていく。  
出来はよかったんじゃないのか？

「明久？もしかして、なにかやらかしたんじゃないだろうな？」

「え！？そ、そんなわけないじゃないか」

おかしい。

誰が聞いたって、百人中百人がおかしいと思うだろう明久の挙動だ。

まさか……。

まさかだと思っけど……。

「明久。まさか名前を書き忘れたとかしょうもないことをしてないだろうな？」

振り分け試験のことがある俺が言える立場じゃないけど名前を書き忘れたら勿論点数は0点だ。

明久の一人暮らしも消え去るだろう。

「ええつと……それは……」

「嘘つくなよ、明久。重要な事なんだぞ」

「はぁ……。慶太の言う通りだよ。焦っちゃって、クラスに紀元前、学生番号に334年、指名にアレクサンドロス大王って書きちゃったんだ」

「ぷつ。ちょ、明久。それはさすがに……ハハっ！腹いてえ」

名前を書き忘れて問題をそこに書いてしまったのか。でも、なんかおもしろいほどあってるよな、これ。

「そんなに笑わないでよ慶太。今、僕は絶望の中にいるんだから」

「いや、すまん。でも氏名アレクサンドロス大王って……」

これは当分ネタに使えるな。

でも、まあ今の明久に一つだけ言えることは……

「ドンマイ、アレクサンドロス大王」

第二十八問（前書き）

遅れてすみません

## 第二十八問

次の人物の名前を答えよ

1498年にアフリカの喜望峰をまわり、インドのカリカットへ到着したポルトガル人

山崎慶太の答え

ヴァスコ＝ダ＝ガマ

教師のコメント

正解です

土屋康太の答え

ガマガエル

教師のコメント

失礼です

吉井明久の答え

カエル

教師のコメント

失礼です

すでに一文字もあつてませんし

『二年Aクラス木下優子さん。まだ校内に残っていれば職員室に来てください。繰り返します。二年——』  
期末試験が終わって数日後の放課後。私はいつも通り慶太と帰ろうと生徒玄関に向かっていた。

そんな中聞こえてきたのがこの放送。  
なんだろう？

「慶太、ごめんね。ちょっと行ってくる」

「わかった。外で待ってるよ」

「うん。ありがとう」

慶太に一言告げてから、方向を戻し職員室へ進む。

なんか、私、昔と比べて少し変わったかもって最近思っようになった。

それはいい意味で。

口調も性格も昔より丸くなったと思う。

それも多分慶太のお蔭。

幼馴染みとして弟の秀吉と三人でずっと育ってきた山崎慶太。

優しくて頼りになって面白くて一緒にいていつも楽しかった。

そんな慶太を異性として好きになったのはいつからだっけ？

付き合い始めたのが中学二年の時だから多分一年生の時かな。

きっかけまでは覚えていない。それは、多分いつも一緒にいたからだと思う。

競争率は高かった。だって、慶太はカッコいいし頭もよかったからモテていた。

それでも、私は慶太と付き合っことができた。

あの時は驚いたけど慶太が告白してくれた。

実は両思いだったっていう話でやっぱり私と慶太は運命の赤い糸で結ばれていたんだね。

慶太のことは今でも大好き。それはこれからもずっと変わらなくて

喧嘩もたまにするけどそれでも大好き。私にとってはもういなくてはいけない存在なんだ。

このまま上手くいって慶太と結婚できたらなあ……なんて思っちゃってる私だけど慶太はどうおもっているんだろうな。

ガラガラ

そんなことを考えているうちに職員室についた。

「失礼します。」

と言って高橋先生の元まで向かった。

「よかったわ、木下さん。学園長からの急な話だったから今日のうちに話しておきたかったんです」

学園長からの話ってなんだろう。

「明日、文月学園のプロモーションビデオを制作することになって、それを木下さんを中心に作ろうと思っているのだけどいいかしら？」

それぐらいならどうってことないことね。

「でも、私より学年一位の代表……霧島さんのほうがいいんじゃないですか？」

「彼女は少し愛想に欠ける部分があるので。木下さんにしかお願い出来ないことなんです」

確かに代表はそういう所が少しあるし他のみんなも少し問題があるわね……特に愛子とか。

それに高橋先生にここまでお願いされて断ることは出来ないし引き受けよう。

「わかりました。私、やります」

「そうですか。ありがとう木下さん」

学園の紹介ムービーに出るってことは私の評価もいってこと。今までで優等生を演じてきてよかったわ。

「いえ、学園の紹介ムービーに出られるなんて光栄です」

「木下さんはこの学園でも全校生徒の模範になれる生徒です。山崎くんのお付き合いは少し控えてほしいですが」

それは聞き捨てならない。

「先生！それはどういうことですか！慶太は今はFクラスですけど総合点数はAクラスでもトップクラスの部類に入ります。」

「それはわかっています。私が言いたいのはプライベートと学園での差を考えて欲しいということですよ」

へ？

「あなたたちもそういう年頃です。恋愛したいという気持ちがあるのもわかります。ですが、学園は勉強をするところです。プライベートでのお付き合いに関してはなるべく口を挟みませんがせめて学園では節度あるお付き合いをしてください」

「はい……」

先生の言うことは最もだ。確かに最近では学校でも慶太に抱き着いたりキスしたりしている。これからは少し控えなくちゃ。

「それで撮影は明日の放課後です。お願いしますね」

「はい。わかりました」

話が終わったからその場を離れようとしたとき、

「あつ、一つ忘れていました。大丈夫だと思いますがプロモーションビデオには合唱部との校歌斉唱もあります」

校歌……。

それってカメラの前で歌うってことよね……。

ああ、最悪。

歌は私の苦手なこと。これは慶太も知らない秘密事項。知っているのは家族ぐらい。慶太に隠し事なんてしたくないけどこればかりは恥ずかしくて言えないよ。

「あつ、はい。大丈夫です！」

でも、ここではやっぱり断れない。せつかく優等生を演じてきたんだから。

「ではお願いしますね」

本当に話が終わり失礼しましたと一礼して職員室をあとにする。

はあ。  
でもどうしよう……。

「ただいま帰ったぞい」

あの後待っていてくれた慶太と一緒に帰ったのだけど明日の作戦を練るためすぐに自分の家に帰った。

ちなみに今は親との約束で今週中は慶太の家に泊まっていない。

だけど一向にいい案が思い浮かばないでいる中私の双子の弟の秀吉が部活から帰宅した。

「……………はあ……………」

深いため息をついてしまう。

秀吉が帰ってきたところでこの問題が解決されるわけでもないから。

「んむ？姉上、どうしたのじゃ？似合わぬ溜め息なぞついてからに」

「ちょっとした問題が起きているのよ」

「問題とはなんじゃ？ワシになにかできるなら協力するのじゃが」

「はあ……あんたに出来るならとつくに言ってるわよ……」

「それならば慶太はどうなのじゃ？」

それは一番協力してほしくない。

慶太にだけは歌が下手なんて知られたくないもん

「それは絶対ダメ。第一私自身の能力の問題だからね」

私と瓜二つの秀吉の顔を見ながら言う。

「姉上なら歌以外ならなんでも出来ると思うのじゃが」

ん？瓜二つ！

そうだ！この手があったわ。

「秀吉。アンタ、歌とか得意よね」

悔しいけどコイツには才能がある。

「歌？まあ得意と言うほどでもないが、姉上に比べれば幾分マシなのは確かじゃな」

む……っ！言ってくれるわね。

でも、今はそんなことよりコイツの才能に頼るしかない。

「アンタの演劇の才能を見込んでのお願いよ。明日、私を中心に学園の紹介ムービーを作ることになってるの。それに私の変装をして出てちょうだい。その中で合唱部と一緒に校歌を歌うのよ」

多分、秀吉に頼む最初で最後のお願い。

「はぁ……。姉上の考えていることが大体わかったぞ。学園の紹介ムービーに出れば姉上が歌うのが下手だということが広まってしまふ。それが愛しの慶太には絶対知られたくない……ということじゃな」

「ご名答よ……。はぁ……」

「そんな深いため息をつくぐらいなら頼まれたときに断っておけばよかったのではないか？」

それもないや。

「それもイヤよ。折角今まで何でも出来る優等生を演じてきたのに、この程度のことまでギブアップなんて冗談じゃないわ」

「姉上の見栄っ張りも筋金入りじゃのう」

「うるさいわね。で、やってくれるの？」

「まぁ……いいが」

よし。

これで明日はなんとか乗りきれそうね。

「じゃあ明日の放課後に体育用具室辺りで待ち合わせしてお互いの服を交換しよつか。胸の詰め物も用意しておくから」

「明日の放課後じゃと？その時間、ワシらのクラスは補習があるのじゃが」

「補習？それなら私が受けておいてあげるわ。教室には慶太もいることだしね」

「わかっておるのか、姉上？そのとき姉上はワシなのじゃぞ？いつも通りの態度で接していれば慶太にばれてしまうぞ」

そうだった……。

慶太には絶対にばれたくないから我慢しないといけないんだ。でめ目の前に慶太がいるのに甘えられないなんてなんて生き地獄。

「わかってるわよ。そっちこそ絶対ばれないようにしてね。お礼は今度するから」

「任せておくのじゃ」

その後秀吉の歌う校歌を聞いて問題がないことを確認してから、私は安心してネット通販の箱を手についた。

中身は例のごとく乙女小説だ。慶太と付き合うようになってから読む時間は減ったけど今でもこれは私の趣味の一つって訳よ。

## 第二十八問（後書き）

そう言えば連載を始めて一年が経ちました。  
たいした量じゃないんですけどね。

そこでなにかやってほしいことがあれば何かいつてください。  
できる限りやってみたいと思います。

## 第二十九問（前書き）

続きです

## 第二十九問

翌日の放課後、周囲の目がないことを確認してから体育用具室に入った私と秀吉は、素早くお互いの服を取り替えていた。

「ホント、アンタって私とそっくりよね。二卵性なのに」

「じゃがそのおかげで今回のようなことが出来るんじゃないか」

ホントに似ている私と秀吉は同じ服装をしているとどちらが私と秀吉かわからない人が多いほどなわけで……でも慶太は気づいてくれるもん！

「では行ってくる。姉上は補習の出席を頼むぞい」

タイを結び終わると、秀吉は用具室の扉に手をかけた。

「あ、待って秀吉。コレを持っていきなさい」

秀吉を呼び止めて、その手にある物を握らせる。

「んむ？なんじゃコレは」

「盗聴器よ。土屋さんに貸してもらったのよ」

秀吉の寝顔写真と引き換えにね。

「それにしても監視なんぞせんでも、きちんと姉上を演じきって見せるというに……」

「アンタの『きちんと』は全然信用できないのよ」

それから洪々と盗聴器をもって秀吉は体育用具室を出ていった。

「さて。私もFクラスに行かないと」

そうすれば慶太にも会えるしね。

『しまった！須川が窓を伝って隣の教室に逃げたぞ！』

『あのブタ野郎……！異端審問会の血の掟に背いて、Dクラスの玉野さんにケータイの番号交換を迫っていたという噂は本当だったのか……！いいか！今この時よりヤツは会長ではなく反逆者だ！見つけ出して始末するんだ！』

『『『了解！指示を！』』』

『A～E部隊はヤツを捕らえ次第異端審問会にかける！携帯電話の

メモリー削除も忘れるな！番号交換に成功していた可能性もある！  
FとG部隊はあらゆる手段を用いてヤツの悪評を流せ！特にDクラスには念入りにだ！H部隊は船越先生（四十六歳♀独身）のところに向かえ！あの裏切り者に人生の墓場というものを教えてやるんだ！」

『『『了解っ！』』』

教室の前に来てみれば中から怒号の応酬が聞こえてきた。

そして、教室の中に入ると覆面をつけた連中が鞭や蠟燭を手に忙しなく駆け回っていた。

「ホントに相変わらずよね、このクラスは……」

「あ、おかえり秀吉」

覆面の集団を慶太と吉井くんが話しかけてきた。  
慶太もいることだし二人の元に歩み寄る。

「どうしたの……じゃ？」

どうしたのって普通に聞きそうになった所をかるうじてこらえた。

「ゆ……ひ、秀吉。おかえり」

今、優子って言いそうにならなかった、慶太！？  
しかも、じつと私の顔を見てるし。

そういえば慶太は完全に私と秀吉を見分けられるんだった！  
どうしよう……。

初っぱなから私が見破られてどうするのよ。

「ど、どうしたのじゃ慶太？」

「いや、何でもないぞ。それより、さっき鉄人が来てプリントおいていつてやっつけつてよ。後で解説授業をするってさ」

今度はいたっていつも通りの慶太。  
ばれてないの……？

「なるほど。それでみんなこんなに自由なのじゃな」

ちよつと様子見てみよう。

「だから自習みたいなもんだ。ほら、姫路なんか真面目にやってるだろ」

うん。これはやっぱりいつもの慶太だ。  
気付いてないのね……………よかつたあ。

『報告！新情報です！須川の悪評を流す為にF部隊がDクラスの玉野に接触したところ、彼女は須川に興味はなく、「それよりアキちゃんについて聞かせて欲しい」と繰り返していたこと！繰り返す！Dクラスの玉野美紀は吉井明久に興味あり！Dクラスの玉野美紀は吉井明久に興味あり！』

突然教室の扉が開き一人の生徒が身を乗り出して叫んだ。

「さらばだっ！」

報告を聞いた瞬間、吉井くんは素早く立ち上がり脱兎の如く駆け出した。

『逃がすな！予備戦力で追撃隊を組織しろ！これ以上ヤツの横行を許すな！』

『だが待て！玉野はアキちゃんと言っていたらしいじゃないか！正直、吉井には虫酸が走るがアキちゃんなら俺も興味がある！』

『実は俺もだ！』

また、騒がしくなってきた大半の生徒が教室を出ていってしまった。あと近くに居るのは慶太ただけで真面目に自習のプリントをやっているみたいね。歴史のプリントがあるからかな。

でも、これで都合がいいはね。私もプリントをやっているように見せて秀吉の様子をチェックしよう。

えっと、確かこのラジオみたいな機械で——っと。

昼休みに土屋くんから借りた機械についているイヤホンをつけてス イッチを入れる。

すると少しの間だけ耳障りなノイズが走り、徐々に音がクリアーになっ ていた。

『……優子』

『あ、代表。なに？』

代表と秀吉……よね。

いつもの秀吉の声とは違うように聞こえるけど、これが他の人が聞いた時の私の声なのかな。

自分じゃ分かりにくいわね。

『……そこ』

『そこ？なにになに？』

『……スカート、めくれてる』

あのバカ、なにボロ出してるのよ……！

演技はともかくとして、動きが無防備過ぎるのよ！

私たちがスカートの時どれだけ気を遣っているのか全然わかってないんだから！

いつばれてしまうかとやきもきしている私の気持ちも知らず、イヤホン越しの秀吉の声は、まるでスカートが捲れていることなんてなんでもないかのように平然とした口調で答えた。

『心配してくれてありがとね、代表。でも大丈夫なの』

『……大丈夫って？』

『見られても大丈夫ってこと』

『……でも、スカートがめくれたら』

『うっん。そのくらい平気なの。だって』

『……だって？』

『だって——今日は、きちんと下着を穿いているもの』

あのバカ！

何を言っているのよ！

こうしちゃいられない。

あのバカを殴って止めないと……！

Fクラスの教室を飛び出して、渡り廊下を全力疾走して、Aクラスの扉を勢いよく開け放つ。

パンツ！

というけたましい音が教室中に響き渡った。

「あら秀吉。どうかしたの？」

代表と話をしていた秀吉は、私の演技を続けたままこちらを向いた。私も秀吉の演技を続けたまま呼び掛けることにする。

「姉上。ちょっつとよろしいかの？向こうで内密に話したいことがあるのじゃが」

「？よくわからないけど、いいわよ。それじゃね、代表」

私の殺気に気付くことなく、秀吉は人気のない階段の踊り場まで着いてきてくれた。

「で、どうかしたのか姉上？」

「どうかしたのかじゃないわよ！アンタは何を言ってるのよ！あれだとまるでいつも私がノーパンみたいでしょ！？」

「いつもと違ってスカートの下にスパッツを穿いているから大丈夫という意味じゃったのじゃが」

「そういう風には全然聞こえないのよ！」

「じゃが、スパッツは分類的には下着に入ると」

「黙りなさい！とにかく、ああいう迂闊な発言は二度としないように！あと、スカートの裾には気を付けなさい！」

幸いにも代表くらいしか聞いてなかったみたいだからまだマシだけど、そうではなかったら私の評判が大変なことになっちゃうじゃない。

「むう……。姉上のスカートは短いのじゃ……」

「それはみんな普通よ。とにかく、動きにも充分気を付けなさい！あんまり挑発的な格好をしていて変な虫がよってきたら困るんだからね！私には慶太がいるんだから！」

中学のこれ変なヤツに告白されたこともあったからね。

「それはないと思うのじゃが」

「なんでよ？」

「姉上と慶太の熱愛ぶりは学校中で知れわたっており。それなのに姉上に告白するやつがいるまいて」

「えっ！？私と慶太が付き合っていることそんなに広まっていたの！？」

「そうじゃ」

春までは隠してたのにな……。

「でも、まあ撮影までホントに気を付けてよ」

「了解じゃ。気を付けよう」  
「くれぐれも頼んだからね」

秀吉を解放してAクラスに戻らせる。

あのバカは目を離すと何をしかすのかわからないので、私はFクラスの教室に向かって歩きながらイヤホンを装着した。この際、多少周りに変な目で見られても仕方がないわよね。

『やあ、優子』

『どうしたの愛子？』

今度は愛子かあ……。

『優子、学園のPRビデオに出るんだってね。いつ撮るの？』

『三十分後よ。だから、それまで暇ね』

『そうか。じゃあ、今日こそは山崎くんとどこまでやったのかきかせてもらおうかな』

ヤバイ！

秀吉がまた口を滑らせてしまつかもしれない……………いや、秀吉は知らないはずよ。

私と慶太がどこまでやったかなんて誰にも言っていないから私たち自身しか知らないはずよ。

『ええ。言わないとダメ？』

『ダメだよ』

『も〜。しょうがないなあ。』

あれ？

なにかいかにも知ってますよ的な言い回しだけど何を言つつもりよ。

『じゃあ教えて、教えて！』

『えーっとね最後まで……だよ！』

ドドドドド

「アンタ何変なこと言ってるのよ！」

「だ、ダメだったのかのう？」

「だ、ダメよ！恥ずかしいじゃない！それよりアンタ何デタラメ言っているのよ！」

本当は間違っではないんだけどね……。

「違っていたのか。いや……三年も付き合っておるのじゃないいつもあれだけイチャついているのじゃないな」

「当たり前じゃない！……まったく」

でもこれ以上秀吉が歩き回っていたら何をしでかすかわからないわ

ね……。

「アンタもう集会所行ってなさい」

「はて？まだ時間までは二十分以上もあるのじゃが」

「いいのよ。行きなさい」

「いや、でも今行っても暇じゃし」

なかなか動かないわね。  
もうこうなったら。

「行きなさい」

「嫌じゃ……あ、姉上っ！ちが……っ！その関節はそっちには曲が  
らな……っ！」

「行きなさい」

「わかったのじゃ」

これでいいわね。

秀吉は私の言った通り、素直に集会所に向かっていった。

さて、私もFクラスに戻って補習のプリントを終わらせとおこつ。

慶太の元（Fクラス）に戻ると慶太は一人で卓袱台に突っ伏していた。

「どうしたのじゃ慶太？」

「ああ、秀吉か。補習のプリントなんだが数学がやる気おきなくてな……」

そういうことね……。

じゃあ私もちゃっちゃと終わらせて教えてあげよう。

………

………

………

………

うん。

これぐらいなら対して難しくないわね。  
基本が出来ていれば解けるものばかりね。  
じゃあ慶太に教えあげようかな……。

「そう言えば秀吉。明久から聞いたんだけど優子が学園のPVに出るらしくて合唱部と校歌歌うみたいなんだよ。見に行こうぜ」

「そ、そうじゃな。確かに気になるし、見に行くのも悪くないかう」

秀吉の言動も気になるから様子を見に行った方がいいかもしれない。教室を後にして、私と慶太は音楽室を目指して廊下をのんびりと歩いた。

「そう言えば優子が歌うところって見たことないなあ」

慶太には死んでも歌が下手なことを知られたくないから見せるわけがない。ここは適当にごまかしておこう。

「そうじゃったかう」

適当に世間話をしながら廊下を進むと直に音楽室に到着した。

「お、ちようど歌ってるな」

「うむ。そのようじゃな」

グランドピアノが伴奏を奏で、二十人程度の歌声がそのメロディーの上に重なっている。

校歌だからアルトやテナーといった区分もなく、あくまでも主旋律だけの簡単な曲。

けれども揃えられたその歌声は、澄みきった夏の空を彷彿とさせるような爽やかさと、そこにうかぶ入道雲の壮大さを併せ持つような

そんな素晴らしいものねように思えた。

「秀吉……真ん中か」

更に近付いてみると、私に扮した秀吉は一番目立つセンターで堂々とその歌声を披露していた。

悔しいけど、我が弟ながらいい顔をしていると思う。いい顔っていうのは、別に顔が綺麗っていうことじゃない。秀吉に限らず、人は誰でも自分が本当にやりたいことを一生懸命やっていると時の顔は不思議な魅力に溢れている。今の秀吉はその魅力に溢れたいい顔をしているってこと。私にはそれがちょっと羨ましい。

「……………はあ」

そんなことを思っていると思わずため息が出てしまう。

「どうしたんだ優子？」

……………優子？

あれ？

今、慶太、優子って言わなかったかな？

もしかして、慶太……。

「もしかして、慶太気付いてる？」

「あははは。ばれてしまっか」

そんな……。

じゃあ今までののは全部演技だったの？

「ごめんな、優子。隠し通しておくつもりだったんだけど」

「いつから気付いていたの？」

「優子と秀吉が入れ替わって教室に入ってきたとき」

なんだ……。

最初からばれていたのね。

「じゃあなんで今まで黙っててくれたの？」

「優子が学園のPVにでて校歌を歌うって話を聞いたのと優子に変装しているのを見て感付いてしまったんだけど優子が一生懸命隠そうとしていたからつい黙ってたんだ」

やっぱり慶太はどんなに変装していても私と秀吉の区別がつくんだね。まあ、それは嬉しいことでもあるんだけどね。

「ありがとうね、慶太」

「いや、それより優子ー。週末にカラオケ行こうぜ」

へ？

カラオケって。

「嫌よー。今回のことで私が歌が下手ってわかったでしょ！」

「そのための特訓だよ。優子なら練習すればなんでも出来るよ」

「でも……」

慶太はそんな風に言ってくれるけど歌ばっかしはあんまり自信ないよ。

「大丈夫だって。なんたって俺の優子だからな。一生懸命やればいい顔になる。俺はいつも一生懸命な優子が好きだから」

「……ありがとう、慶太。じゃあ、行くよカラオケ」

慶太にはいつも助けられる。やっぱり慶太がいるから今の私がいる。

だから私も決めた。

慶太とずっと一緒にいたいからずっと好きでいてもらいたいから私はこれからも努力し続ける。

慶太が大好きだから。

## 第二十九問（後書き）

今回の全編優子視線でした。

いつもはバカップルぶりを慶太の言動で描いていましたが優子はどんなこと思っているのかなって感じです。

一年経っているくせに相変わらず文章下手ですね。

前回も言ったやってほしいことは期限とかないんでいつでも何か思い付いたら言ってください。

次の投稿はいつになるかわかりませんが六巻の話になる予定です。

第三十問（前書き）

遅くなつてすみません

### 第三十問

次の単語を英訳しなさい。

『スペイン語』

山崎慶太の答え

『Spanish』

教師のコメント

基礎英単語の一つですね。ですがケアレスミスのよくでる単語でもあるので十分に注意しましょう。

土屋康太の答え

『Spanish』

## 教師のコメント

Japaneseと同じような形でSpanishでも書きたかったのでしょうか。残念ながら間違いです。

## 吉井明久の答え

『Spagett——』

## 教師のコメント

どう解釈してもスパゲティと書くとしたようにしかみえません。

期末テストが終わると夏休みはすぐやってくる。

俺の通う文月学園も例外ではなく一学期が終了した。

高二の夏。

勉強なんてしている暇はない。

まず優子と毎日ラブラブな生活を過ごす。これは最重要だ。最高で

も三日会わないと俺の生きていく上でのエネルギーが尽きてしまう。

次に趣味だ。

歴史とアニメもどちらも欠かせないものだ。

歴史物の小説とかも読み漁りたいし日帰りで現地に行ってみたりもしたい。

アニメに関してはこちらでもラノベを読み漁り、夏期のアニメを見るものと見ないもので決めていかなければいけない。

とくに最近は忙しかったので結構たまってしまっている。

とにかく忙しいのだ、俺は。

それなのに……………

『——ということでこの位置エネルギーが——』

俺は……………俺たちFクラスは環境最悪の教室で暑苦しい鉄人の補習を受けているのだ。

しかも、現在の教科は科学。もはや苦痛でしかない。

そんな中、隣の席から声が聞こえてきた。

（慶太、雄二。この魂の牢獄から逃げよう）

逃げるか……………

確かに逃げ切れればこの地獄からおさらばできるが相手は個人で召喚獣と闘えるほどの人物だ。

そう簡単に……、いや確率はかなり低い。

（いいこというじゃねえか明久。俺もこの鉄拳補習フルコースには飽き飽きしていたところだ）

（おい。二人とも待て。相手はあの鉄人だぞ。補習中に抜け出すなんて自殺行為だぞ。暑さにやられて頭がおかしくなったか？いや、明久は元々おかしいけど）

（くっ……その言葉、今ここで騒ぐのはまずいから怒らないであげるよ）

みんな思っていることだと思うぞ。

（だがな、慶太。夏休みに入っているのに授業があるつてのが間違いないんだよ。お前だって夏休みにやりたいことぐらいたくさんあるだろ？）

（それはもちろんあるさ。とくに優子と遊ぶ時間は欠かせねえよ。だが、リスクが高すぎる。失敗でもしたら鉄人になにをされるかわかったもんじゃないぞ）

（確かに一人二人でやっても成功する可能性は低いかもしれない。でも、今朝パンの耳を二個も食べてきた僕には秘策があるんだ）

鉄人の様子を窺いながら話し合う俺たち。勿論、口が動いていることを気取られるようなことはない。腹話術のように口の動きを最小限に抑えて会話をしている。このFクラスの生徒なら姫路や島田以外はみんな習得している。

『——ここで元の高さをりとした時、位置エネルギーが全て運動エ

ネルギーに変換されたとすると、この時の速度 $v$ は重力加速度 $g$ と高さ $h$ にのみ依存する式となり――』

鉄人は教科書を読み上げながら俺たちの方を見ている。問題児に挟まれているからしょうがないか……。

そして、今、動くのは得策じゃないし、下手な動きを見せたら即座に捕まるだろう。

とりあえず、明久の秘策を聞いてみようじゃないか。

（それはね、全員で一斉に逃げるって作戦だよ）

（人海戦術か。単純だが、確実な作戦だな……。よし。俺は乗った）

（お、逃げるのかお前ら）

（逃げるなら俺たちもだ。人海なんたらなんだろ）

（俺もだ。このままだったら確実に干からびて死んじまう）

と回りの奴らがのつてきて、そのうちクラスの秀吉、島田、姫路以外の男子が全員呼応した。

これだけの人数が一斉に動くとなると流石の鉄人でも全員を捕らえるのは無理な話だ。

だが、捕まる者も出てくるので危険が消えた訳じゃない。

なので俺は……

（俺はやめておく。チキンでも何とでも言え。なんかもう動かなくていいよ）

（わかったよ。じゃあみんな。誰が捕まっても恨みっこなしってことで。問題がなければ小さく頷いてもらえる？）

明久がそう言うと、先ほど参加を決意した四十七人が頷いた。

さあ、どうなるかな。

「——つまり、物体の落下速度というものはその物体の質量に依存しないということになる。だが理論とは違って現実には空気抵抗というものがある。綿毛と鉄球が同様の速度で落下しないのはこの空気抵抗によるものが大きく、式に表すと——」

説明が佳境に至ったのか、鉄人が黒板に向き直って板書を始めた。俺たちに背を向けたこのタイミングを逃すまいと、明久たちは脱出のために腰を浮かせて、

「全員動くなっ！」

今ので気付いたのかよ。

未だに黒板に顔を向けたまま再度鉄人が口を開く。

「貴様ら……。脱走とはいい度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

ばれたからには既にみんな覚悟している。

誰が最初に鉄拳の餌食になるのかとビクビクしている。

まあ、俺には関係はないがな。

「……そうか。お前らがそこまで退屈しているとは気がつかなかった。これはつまらない授業をしてしまった俺の落ち度だな」

意外にも鉄人はそんなことを言い出した。  
あれ？いつもみたいに鉄拳がとぶと思ったんだがな。

「詫びと言ってはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてやろう。  
……姫路、島田、木下は耳を塞げ」

面白い話ってなんだ？

それより、今の三人には聞かせないってなんか悪い気がする。

「そう。あれは、十年以上前の夏――」

いや、とにかく聞いてみるか。

「――俺がブラジルの留学生とレスリングをやっていたときのことだ」

『『『ギヤああアあーっ！！』『』』

なんと言ったことだ。耐性の低い連中が鉄人の暑苦しい言葉で精神崩壊したみたいだ。

『大きな星がついたり消えたりしている……彗星かな……いや、違うなあ彗星はもっとバァツと消えるもんな……』

などと某ガンダムの女の名前の主人公みたいなこと言ってる奴もいる。

「相手は身長195？、体重120kgの巨漢、ジョルジーニョ・グランシェーロ。腕の太さが女性のウエストくらいはありそうな男

だった。だが、俺とて負けはしない。188?、97kgの鍛えに鍛えた肉体で奴と正面からぶつかり合い――」

『やめろっ！やめてくれえーっ！』

『脳が！脳が痛えよっ！！』 『ママァーッ！』

消えていく……

みんなの精神が一つ、また一つと消えていく！

……っ！

俺の精神もかなりヤバイところまで来てしまっている。

ん？

そういえば何で俺は耳を塞げと指示が出なかったんだ？

俺は動いていないのに……鉄人め！

いや、今からでも耳を塞げば………はっ！

手が動かない……だと！？

くそっ！

脳にきたダメージがもう運動神経にまでまわってしまったというのか！！

「――しかし、ヤツはレスリングと柔道を勘違いしていた。腕ひしぎを仕掛けてきたんだ。だがこの俺の自慢の上腕二頭筋には勝てるわけもない。汗にまみれ、血管を浮き上がらせながらも俺は腕を伸ばしきることなく抵抗し続けた。すると向こうはすかさず俺の頭上にまわり、その分厚い大胸筋で俺の顔を圧迫しつつ上四方固めを――」

『ぐあああああっ！い、嫌だ！目を閉じたくない！最悪のビジュアルが瞼の裏に張り付いて離れない！』

『起きねえ！福村が起きねえよ！おい、しっかりしろよ！』

『空気を！新鮮で涼しい空気をくれ！！』

まさに地獄絵図。

既にクラスの上の半分以上の男子が気を失っている。

こうなったら勝負だ、鉄人！

目を瞑り妄想の世界に入る。必死に優子の笑顔、思い出を思い浮かべていく。さらに、妄想の中で優子とイチャイチャしていく。

よし、この調子ならなんとかなる。オタクの妄想力をなめるなよ！

「――だが、俺も負けじと筋肉を働かせ寝技を掛けにかかり――」

な！？

俺の妄想のなかに鉄人が！？くっ、来るな！ん！？後ろからはジョルジーニまで！挟み撃ちだと！

ヤバイ。筋肉と筋肉が徐々に近づいてくる。しかも、恐怖のあまり体が動かないだと！

来るなっ！来るなっ！うあああああーっ！

俺と優子の間に筋肉があーっ！

こうして俺の意識は消え去った。

### 第三十一問（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

言い訳としては情けなく今書いている第六巻を紛失してしまいました書くことが出来ませんでした。

そして、先日やっと、9・5巻と一緒に買いなおし今日に至ったというわけです。

これからも更新遅いですが読んでもらえれば幸いです

### 第三十一問

「……………っ！」

いつの間にか気絶してしまってたのか。

うつ伏せで気絶していたから頬に跡ついちゃったな。

てか、さっきのはひどかった。

正に悪夢の何者でもなかったよ。

そういえば、俺はどれぐらい気絶していたんだ？

「「きゃああああーっ!?!」」

少し離れたところにいる姫路と島田の悲鳴が聞こえるなか立ち上がる。

最初に気付いたのは教室の前方に召喚フィールドがあること。

そして、その中には先ほど悲鳴をあげた女子二人と驚いた顔をしている秀吉と雄二と明久になにやら困っている鉄人。

その全員が真ん中にある謎の物体を凝視している。

なんだよ、あれ……。

とりあえず行ってみるか。

「おーい、これはどういう状況だ？」

そう言つて、召喚フィールドに足を踏み入れた。  
踏み出した足元にはなにかを踏んでいる感覚と……

「いたあっ！」

と明久の叫び声が聞こえてきた。

ちらっ……………。

踏んでいるものを足で転がしてみると凹凸があり感触が生々しい。

「いたっ、顔がっ！」

また、明久の声がする……………うむ。

更に足で踏みながら確かめているのだが全く検討がつかない。  
もうちょっと、踏んでみるか

「痛いっ！ボクの顔がーっ！鼻がっ、鼻がつぶれる……………って慶  
太！これだけリアクションとっているんだから気づいてよ！その踏  
んでるのボクの顔だよ！」

「えー。本当だー。」

とふざけて言うが内心かなり驚いている。

明久は観察処分者だ。

その特質ゆえ召喚獣は他の者では無理な物理的にいろんな物に触れ  
たりする。それは人間も例外ではない。しかし、召喚獣がダメージ  
を負うと自分も痛みを感じるという弱点もあった。

だからさっきチラ見してこの明久の生首を確認したとき『まさかこ

れは明久の召喚獣なのではないか』と考え踏み続けたのだ。

だが、生首の正体がやはり気になったので聞いてみることにしよう。

「で、真面目にこれはどういうことだ？ 召喚獣がこんなにリアルに生首って」

おそらくこの生首の本体は前に剣を持ち鎧を着こんだ首なしだろう。

「それはこの前の試験で召喚獣の装備がリセットされたじゃろ。じやから装備がどうなったか確かめようとしたのじゃ」

まず最初に秀吉が口を開き雄二がそれに続いた。

「そんで鉄人に召喚許可を頼んだんだがどうも様子がおかしく渋ったから俺が白銀の腕輪を使って明久が呼び出してみればこの様だ」

そう言うことなら鉄人に聞くのが一番いいだろう。

「で、どうということなんですか、西村先生」

俺が聞くと鉄人は諦めたように大きくため息をつく、訥々と説明を始めた。

「……俺にはよくわからんが、今喚び出される召喚獣は化け物の類か何かになっているという話だ」

「お化け、ですか？」

そう言うのは歴史上で出てくるミイラとかしか知らないんだよな。

お化けっていつでも物語のなかの話だし。

「お前らも知っての通り、試験召喚システムは科学技術だけで成り立っているわけではない。幾ばくかの偶然やオカルト的な要素も含まれているんだ」

「????つまり、どういうことですか？」

「あー……。要するに、だな……」

「調整に失敗した、と」

「……身も蓋もない言い方をするな」

雄二の言葉に鉄人が仏頂面で答えた。  
まあ、さすが試験校つてところか……。

「明久のこの召喚獣からしてオカルト的な要素が強くなったってことか」

ふと思えばまだ足元には生首が転がっていた。

とりあえず蹴り飛ばしておいた。

「目がっ！眼球がつぶれるーっ！それよりどうしてボクの召喚獣はデュラハンなんだろ？お化けなら日本の妖怪とかもいっぱいいるはずなのに。デュラハンのせいで慶太には蹴られるし」

明久の言うことはわかる。明久の召喚獣がデュラハンになったのはなにか条件があるのかも。

「学園長の話聞く限りでは、どうも召喚者の特徴や本質から喚び出される妖怪が決定されるらしい」

腕組みをしながら鉄人が説明する。

明久の特徴と言えば……バカ。

「そうなるボクの騎士道精神が召喚獣に影響を与えたからってことですね」

「明久。現実から目を背けるな」

そして、デュラハンってよく知らないんだけど見た感じ頭がないってのが印象強いな。  
ということはある……

「え？違うの？そうすると他に考えられるのは、甲冑の似合う男らしさとか、大剣を振るう力強さとか」

「たぶん『頭がない』バカ』ってことじゃね」

「言ったあー！僕が必死に目を逸らしていた事実を慶太が包み隠さず言ったあー！」

なんだ、気付いてたのか。バカだからってつきり気付いてないのかと。

「じゃが、こうしてみる限りは以前の召喚獣よりも強そうではないか。武器も金属のようじゃし、鎧もつけておる」

「そうだよな。前よりは強そうだよな」

確かに学ランより鎧、木刀より剣のほうが強そうだが……

「でも弱点も増えただろ。その頭とか」

「そうだ。さっきだつて取れた頭を散々慶太に痛め付けられていただろ。つまり、明久の召喚獣はどちらかの手で頭を抱えながら戦わなければいけないんだよ」

俺の言葉に雄二が続けてくれた。

まあ、だから弱点が増えたってことだ。前より弱くなったかもしれないし。

そうやって俺たちが騒いでいると、ようやく俺と同じように鉄人の悪夢から目覚めたクラスメイトが数人こちらにやってきた。

「おいおい、さっきからなんか面白そうなことやっているな」

「これ召喚獣か？特徴や本質がどうか言ってなかったか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか」

お前らも対して変わらないだろうと思ったのは口にしないでおう。

「そう言つならそつちも喚び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣が出てくるからさ」

明久は反発し先ほどの三人に向かってそう言った。

すると、三人は揃つて口の端を歪めて嫌な笑みを浮かべた。

「おいおい吉井。そんなこと言つていいのか？」

「俺たちの召喚獣がバカ日本一のお前に負けるわけないだろ？」

「俺の本質はなんといつてもジェントルマンだからな。酷い召喚獣なんかが出てくるわけがない。いいか、見てろよ——」

さて、どうなるかな。

俺は嫌な予感しかしないんだけどね。

「『サモンっ！』」

三人の喚び声に反応して、それぞれの召喚獣が姿を現した。いや、結局出てきたのは同じだったわけだ。

……ズズズ↑ゾンビ登場

みんな根性が腐っているのか。けど面白いな、これ。自分のも気になるし他のみんなのも結構気になる。個性的だからな、こいつら。

とりあえず秀吉に出してもらうか

「秀吉も出してみてよ。秀吉の特徴と言えば演劇か？」

「そうじゃな。妖怪ではないが、舞台で有名なオペラ座の怪人あたりが妥当じゃろうが。……どれ。サモンっ」

……ポンッ      ↑猫又登場

「へえ〜。猫のお化けか。可愛いね。秀吉によく似合ってるよ」

猫又っていうやつか。

「どうやら秀吉の特徴は『可愛い』ということらしいな」

あれ？

そんなんでいいのか、雄二。

「また木下はそうやってアキを誘惑して……！」

「わ、私だつて負けませんっ。見ていてください、明久くん！サモンっ」

……ポンッ      ↑サキュバス登場

「きゃあああーっ！？明久くん見ないでくださいっ！」

「くっぺっ！？」

出てきたのはサキュバスというものの格好をした姫路の召喚獣。特に胸の部分が強調されているせいで明久の首が180°回転させてしまった。

「とにかく上着を……あうっ！通り抜けちゃいます」

いつの間にか、近くではムツツリーニこと康太が顔を鮮血に染めながらも必死にカメラを構えている。

「それにしても、姫路。召喚獣を見せたくないなら早く召喚フィールドから出た方がいいぞ」

混乱していつものあいっじやなくなってるよ。

「あ……。は、はいっ」

急いで雄二を中心に広がっている召喚フィールドから出ていった姫路。

「じゃあ次は島田いつてみようぜ」

「えっ！？私？」

「そうだね。美波の召喚獣も見てみたいよ」

「わかったわよ。まあ、私の召喚獣は瑞希のようなエッチなのじゃなくて、妖精とか女神とか戦乙女とか、そういった可愛いのが出てくるはずだから。見てなさい——サモンっ！」

ぬりかべ登場

これは……。

いくら俺でもわかってしまうよ。

真っ平らなところとか硬いところとかだろう。

そんなことをいつも通りに口走ってしまった明久は島田の鉄拳を喰らっていた。

あれはしょうがないからほおっておこう。

次だ、次。

「慶太にムツツリーニ。二人はどんな召喚獣なのじゃ？まだ確認しておらんのじゃろう」

「そうだな。じゃあ康太、先どうぞ」

「……………サモン」

康太が呟くと、近くに顔色の悪いタキシード姿の少年が現れた。これはヴァンパイアか。

「なるほど。確かにいつも血を欲しているイメージがあるからな」

「若い女が好きという点も酷似しておるしの。さて、次は慶太じやの」

「そうだな。じゃあ——サモンっ！」

さあ、何がでるかな。

「これって、落ち武者？」

「そうみたいだな。それにしてもなぜ……」

雄二が言うように俺の召喚獣は少し破損している鎧を着込み折れた矢がささっており、腰には太刀をさし頭の髪は結ってあったものが崩れていて漫画に出てくるような落ち武者のような恰好だ。顔だけは今までどおりだけど。

「歴史と言う意味ではあっておるが、落ち武者〓敗者というイメージしかわかんしのう」

「そうよね。山崎は彼女もいて頭もいいから勝ち組っぽいけど」

「なにか心当たりはないんですか、山崎君？」

そうだなあ。

歴史上でも戦国時代とか特に好きだからって理由もあるかもしれないけど落ち武者の理由がわからない。

「まあ、落ち武者〓お化けとか怖いものだからきたんじゃないかな」

これが一番考えられると思うけど

「それが一番の理由かもしれないな。今回の召喚獣はオカルト色が強いから」

「……………ここに家紋がある」

突然、康太が俺の召喚中の手の甲を指差して言った。  
見てみるとそこには文様が書いてあった。

「桔梗の紋……ってことは明智家か」

「明智家？」

「明智家ってあの明智光秀のことですか？」

「多分そうだろうな。この甲冑も文献で見ただことがある光秀のものとそっくりだし」

「その人なら僕も知っているよ。ゲームにもたまにでてくるしね」

「お前はそればかりか。だが、なんで、明智光秀って限定されたんだ？」

明智光秀か………あ、そうか。

「まあー多分なんだけど。明智光秀って妻をたくさん持つことが普通だった戦国時代で本妻だけを愛して一人も側室をとらなかった愛妻家なんだよね」

「「「あー、なつとく（じゃ）」」」

秀吉、明久、雄二の声がかぶった。

「慶太も姉上一筋じゃからの」

まあ、当然といっちゃ当然かな。  
俺は優子を愛しているし。

「バカップルだからなー」

「うん。殺してやりたいほど妬ましいバカップルだからねー」

「おいおい、そんなにほめるなよ。照れるじゃないか」

「「ほめてないからっ!」」

違ったのかよ。

てつきり俺と優子の仲のよさが羨ましかったと思ったのに。

「じゃあ次は雄二ってことで」

「ん? そうだ……。それじゃ、このままだと俺の召喚獣は呼べないからフィールドをOFFにして鉄人に許可をもらうか。鉄人も今更文句は言わないだろう」

雄二がそういうと鉄人は「やれやれ」と呟いて、許可をくれた。

「ワシらと違って雄二の性格は暴力的じゃからな。戦闘向きの妖怪がでるかもしれんのか」

確かになあ。入学したてのあの時も明久とやり合ってたし。

「まあ、やってみねえとわからないからな。……サモンっ!」

現れたのは、筋肉マッチョの雄二の姿をした召喚獣だった。

「また手ぶらじゃないかぁーッ」

雄二の召喚獣は以前よりもさらに退化して武器はなし、来ているものはズボンだけという粗末なものになってしまっている。

「なあ、俺妖怪とかあんまり詳しくないからわからないんだけどこういう妖怪っているの？」

「うむ。特徴が無いからわかんぬの？」

他のみんなもわからないみたいだ。

これじゃあまるつきり雄二本人だもんな。  
と、そこで明久が口を開いた。

「知らないの、みんな？これは最近日本で発見された新種の妖怪『坂本雄二』じゃないか。醜い容姿と汚い性格で美人の幼馴染を騙すっていう話の」

「明久。召喚獣を呼び出せ」

「え、いいよ。サモン」

雄二に言われ素直に明久はデュラハンの召喚獣を呼び出した。

「目指せワールドカップ！（ガコッ）」

「あがっ！蹴ったね雄二！？僕の召喚獣の首をサッカーボールに見立ててゴミ箱に蹴りこんだね！？なんてことしてくれるのさ！」

「起こるな明久。よく言うだろうが。『友達はボールだ』って」

「それをいうなら『ボールは友達』じゃないの！？前後の順番入れ

替えたらただのいじめの現場だよ！」

それにしても見事入ったな。とりあえずゴミ箱から取り出してと。

「そうだぞ、雄二。『ボールは友達だ』だろ？」

「ああ、ありがとう慶太。じゃあ、それを返して……」

「よし、パス行け、明久！」

「え！？いたっ！」

明久に向かってこの友達のボールを蹴り飛ばした。  
ボールは明久の胸に直撃して地面に落下した。

「おい、明久。そこは胸でトラップしてからデュラハンの首にパスだろ」

「慶太の言った『ボールは友達』ってこういう意味なの！？もう僕の召喚獣の頭をただのボールとしか思っていないってことだよね！？」

だから最初っから言ってるじゃないかと言おうとした矢先、雄二の召喚獣に異変がおきた。

「ん？なんだこれは？」

雄二の召喚獣が身震いをし始めたかと思うと、その口が大きく裂け、全身からすごい勢いで毛がはえてきた。

「「きああああー！」」

「……………狼男」

そういうことか。

雄二の特徴のうちのたてがみのような髪の毛が更にツンツンと逆立って、野性味たっぷりの顔は野生そのものへと還っていく。だから、雄二の特徴は野生ってことで狼男になったってわけか。

「でも、満月でもないのに変身なんておかしくないですか？」

「それはもうわかったぜ。満月の変わりに丸いものでもよかったんだろ。今回の場合だとさっきのボールとか」

「ああ、そういうことか……慶太！もう僕の召喚獣の頭をボール扱いしないでお」

「それはそうと、この召喚獣はきちんと次の試召戦争までに直るのか？こんなんでクラス間の勝負なんてやったら妖怪大戦争になっちまうだろ」

「そ、それは困ります……。怖いのも困りますし……………」

どうやら怖いのと恥ずかしいので姫路は困っていて明久の袖をつかんでいる。

「召喚システムの調整については俺もよくわからん。学園長ならなにか知っているかもしれんがな」

鉄人も困っているようだな。

「たしかにその辺は鉄人よりババアに聞いたほうがよさそうだな。」

「まあ、召喚システムを作った人だからな」

「そうだね。学園長に聞いてみよう」

すると雄二と明久は立ち上がり学園長室を目指して歩き出した。  
俺は……やめておこう。

『キサマらっ！ドサクサにまぎれて脱走か！』

これで、鉄人が二人を追っていくからしばらくの間補習はなしだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8459k/>

---

バカとオタクと召喚獣

2011年7月30日06時08分発行